

秋田城跡調査事務所年報2015

秋 田 城 跡



秋田市教育委員会
秋田城跡調査事務所

秋田城跡調査事務所年報2015

秋 田 城 跡

秋田市教育委員会
秋田城跡調査事務所

序 文

平成27年度の秋田城跡発掘調査は、焼山北西部1箇所において実施し、奈良時代から中世にかけての遺構・遺物が発見されるなど、多くの成果をあげることができました。

第106次調査では、第92次・第102次調査で発見されていた外郭西門から城外に延びる奈良時代と平安時代の道路遺構や、外郭西門の北側に取り付く築地塀などの外郭区画施設、櫓状建物跡などが発見され、外郭西門周辺の基本構造にかかわる重要な知見を得ることができました。

これらは、史跡の保護・整備・活用を行う上で必要不可欠な情報であり、今後も焼山地区の更なる把握に努めたいと考えております。

また、環境整備事業につきましては、平成28年度開館予定の秋田城跡歴史資料館と政庁域などの史跡公園を結ぶための階段を設置するとともに、大型バスも駐車可能な多目的広場の造成を行いました。

このように、秋田城跡の発掘調査と保護管理、環境整備事業が順調に進んでいることは、文化庁および秋田県教育委員会をはじめとする関係機関や環境整備指導委員会委員、そして地元住民の皆様の多大なるご指導・ご協力の賜物と、心より深く感謝申し上げます。

平成28年3月

秋田市教育委員会
教育長 越後俊彦

秋田城跡調査事務所年報2015

目 次

例言・凡例

I 調査の計画と実施状況.....	1
II 第106次調査報告	
1) 調査経過.....	2
2) A区検出遺構と出土遺物.....	5
3) A区基本層序および各層出土遺物.....	20
4) B区検出遺構と出土遺物.....	22
5) B区基本層序および各層出土遺物.....	28
6) C区検出遺構と出土遺物.....	31
7) C区基本層序および各層出土遺物.....	35
8) D区検出遺構と出土遺物.....	36
9) D区基本層序および各層出土遺物.....	43
10) E区検出遺構と出土遺物.....	48
11) E区基本層序および各層出土遺物.....	50
III 考 察.....	60
IV 秋田城跡環境整備事業.....	74
V 秋田城跡保存活用整備事業.....	75
VI 秋田城跡現状変更.....	77
別 編「古代秋田城の築地塀を構成する白色および褐色粘土の互層構造について(その1)」 今井忠男・西川治・千田恵吾・栗崎笑・柴田いづみ.....	78
写真図版.....	83
報告書抄録.....	109
秋田城跡調査事務所要項.....	110

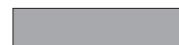
例　　言

- 1 本書は、平成27年度に実施した秋田城跡第106次発掘調査、秋田城跡環境整備事業、秋田城跡保存活用整備事業、秋田城跡現状変更の記録を収録したものである。
- 2 本書の編集は斎藤和敏、伊藤武士、神田和彦、松下秀博が行った。IV章を松下秀博、それ以外を神田和彦が執筆した。別編は、秋田大学　今井忠男氏、西川治氏、千田恵吾氏、栗崎笑氏、柴田いづみ氏に執筆していただいた。
- 3 遺物の実測・トレース、遺構図の作成及びトレースは、神田のほか、整理員の森泉裕美子、伊藤雅子、今野祥子、阿部美穂が行った。
- 4 遺構・遺物の写真撮影は、神田が行った。
- 5 本調査で得られた資料は、秋田市教育委員会で保管している。
- 6 発掘調査では、以下の方々や関係機関から指導・助言を賜った。記して感謝したい。

新野直吉、岡田茂弘、渡邊定夫、田中哲雄、木村勉、熊田亮介、山田晃弘、森先一貴、及川規、小松正夫、進藤秋輝、藤木海、佐藤敏幸、廣谷和也、山川順一、清野陽一、河野一也、菅原祥夫、大橋泰夫、高橋学、五十嵐一治、高橋和成、根岸洋、榎原滋高、塚田直哉、文化庁記念物課、国立歴史民俗博物館、奈良文化財研究所、宮城県教育委員会、東北歴史博物館、多賀城跡調査研究所、秋田県教育委員会、秋田県埋蔵文化財センター（敬称略・順不同）

凡　　例

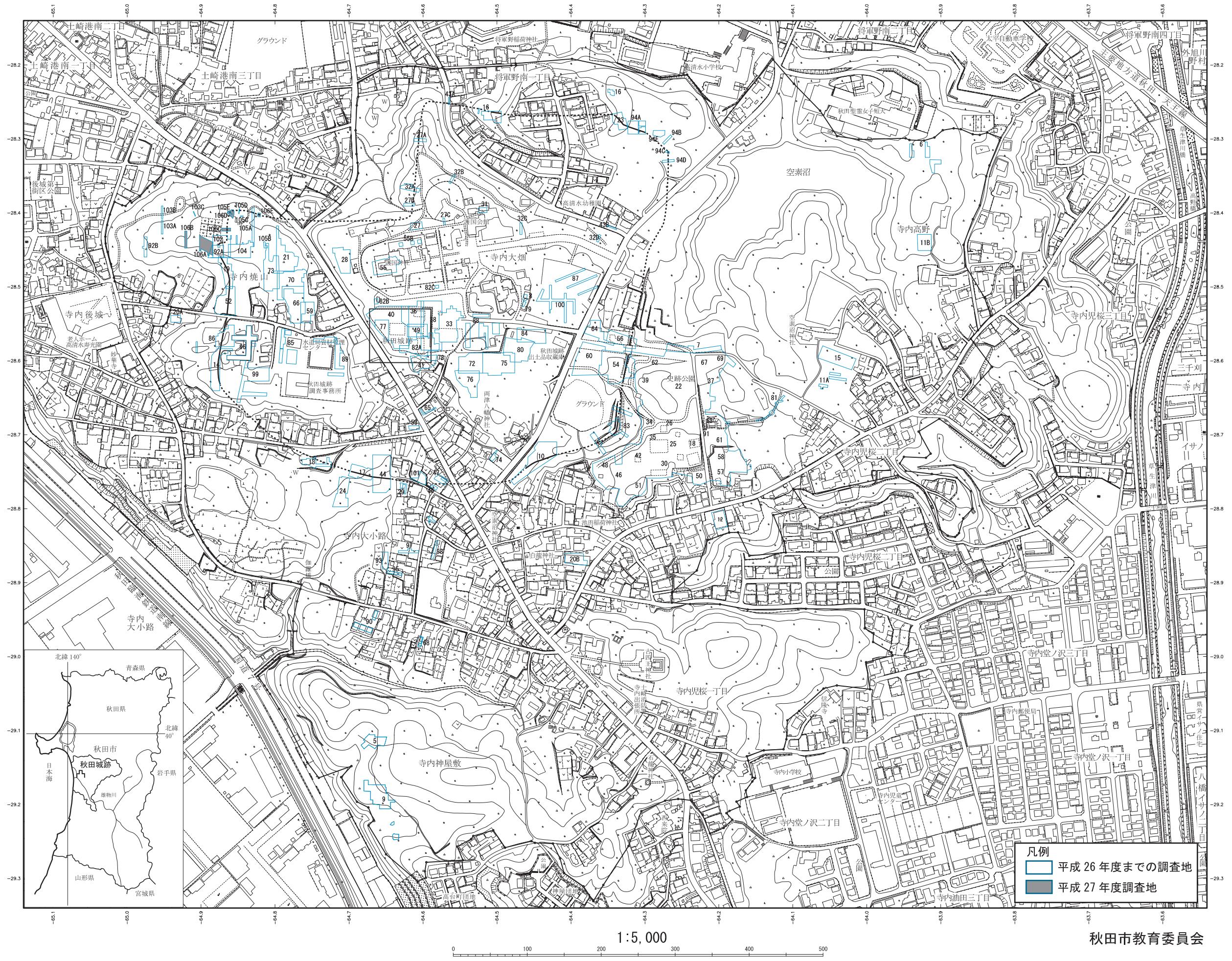
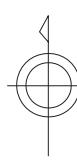
遺　物

- 1 土器の断面を黒く塗りつぶしたのが須恵器である。
- 2 土器の性格の相違・釉薬等については、下記のスクリーントーンで表現した。
黒色処理  鉄釉 
- 3 土器の調整技術や切り離し等の表記は、下記のとおりである。
 - ・回転利用ケズリは、ケズリ調整と記載。ケズリ調整以外の調整はその都度別記。
 - ・ロクロ等広い意味の回転を利用したカキ目調整は、ロクロ利用のカキ目調整と記載。
 - ・切り離し、粘土紐、タタキ痕跡等、成形時痕跡の消滅を目的としない軽度な器面調整痕跡は、軽い撫で調整と記載。成形時痕跡の摩滅を目的とし、痕跡が一部残るものを撫で調整、ほとんど痕跡を残さないものを丁寧な撫で調整と記載。
 - ・底部回転ヘラ切りによる切り離しは、ヘラ切りと記載。底部回転糸切りによる切り離しは、糸切りと記載。底部回転以外の切り離しはその都度別記。
 - ・遺物実測図の縮尺は、瓦は1/4、石器1/2、その他の遺物は1/3とし、それぞれ各図面に縮尺を示した。写真の縮尺は瓦約1/4、石器約1/2、その他の遺物は約2/5とした。

方位・測量原点

文章中および図面の方位と方向を示す東西南北は、遺跡全域に設定された発掘基準線に基づく真東、真西、真南、真北を示す。

遺跡の測量原点は、外郭範囲内のほぼ中央にあたる政庁正殿東の任意点に埋標されている。その原点から真北を求めた南北基準線を定め、これに直交する東西基準線を定めて、座標軸を設定している。報告においてE・W・S・Nと共に示された数値は、測量原点からの座標上の位置、東西南北の距離を示す。測量原点は世界測地系座標で、X=-28562.592、Y=-64607.889である。



秋田市教育委員会

I 調査の計画と実施状況

平成27年度の秋田城跡発掘調査は、第106次調査を実施した（第1図）。

発掘調査事業費は、総事業費（本体額）784万円のうち国庫補助額3,920,000円（50%）、県費補助額784,000円（10%）、市費3,136,000円（40%）である。調査計画は、下記表1のように立案した。

表1 発掘調査計画

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査予定期間
第106次	焼山地区北西部	670m ² (203. 03)	4月15日～10月16日
計		670m ² (203. 03)	

発掘調査に伴う現状変更許可申請について、平成27年2月3日付け教文第366号で申請し、平成27年3月13日付け26受庁財第4号の1941で許可された。

平成27年度の発掘調査は、焼山地区北西部の1箇所を調査対象とした。

第106次調査地は焼山地区北西部、政庁の北西約250mの外郭西門周辺である。第92次調査地A区と第102次調査地で外郭西門が発見されている。外郭西門から城外に延びる道路遺構と外郭西門北側の外郭区画施設の実体把握と今後の環境整備事業に向けて、調査を実施した。調査区はA～E区の5箇所を設定した。調査の結果、A・B区で外郭西門からの城外大路、C・D・E区で外郭区画施設が発見され、秋田城の基本構造に関わる重要な知見を得た。また、A・B区では中世後期と考えられる材木塀跡、土壙跡などが発見され、中世の当該地における利用状況に関する新しい知見も得ることができた。

A区では、道路遺構2面、溝状遺構2箇所、材木塀跡2条、溝跡4条、土取り穴3基、土坑5基が検出された。このうち材木塀跡2条は中世遺構の可能性が高く、それ以外は古代遺構であると考えられる。その他、近世以降の畠畝跡が一部検出された。B区では、道路遺構1面、土壙跡1基、材木塀跡4条、溝跡4条、竪穴住居跡1軒、土坑5基が検出された。このうち、土壙跡1基、材木塀跡4条、溝跡2条は中世遺構と考えられ、それ以外は古代遺構であると考えられる。C区では、溝跡1条、築地塀跡1基、土取り穴3基が検出された。いずれも古代遺構であると考えられる。D区では、掘立柱建物跡2棟、材木塀跡2条、柱列跡1列、築地塀跡1基、土坑8基が検出された。いずれも古代遺構であると考えられる。E区では、材木塀跡2条、築地塀跡1基が検出された。いずれも古代遺構であると考えられる。

平成27年8月29日に第106次調査の現地説明会を開催し、80名の参加があった。平成27年9月2日～3日に東北歴史博物館 及川規上席主任研究員の指導のもと第105次調査地A区 SF2300築地塀跡の土層断面剥ぎ取り転写を行った。平成27年9月8日に文化庁記念物課 森先一貴文化財技官の調査指導を受けた。平成27年9月17日に秋田大学 今井忠男教授、千田恵吾学芸員らに築地塀土壤分析のための現地調査をしていただいた。

平成27年度の発掘調査実施状況は下記表2のとおりである。

表2 発掘調査実施状況

調査次数	調査地区	発掘調査面積m ² （坪）	調査実施期間
第106次	焼山地区北西部	535m ² (162. 12)	5月11日～10月13日
計		535m ² (162. 12)	

II 第106次調査報告

1) 調査経過

第106次調査は焼山北西部を対象に、平成27年5月11日から10月13日まで調査を実施した。調査面積は535m²である。

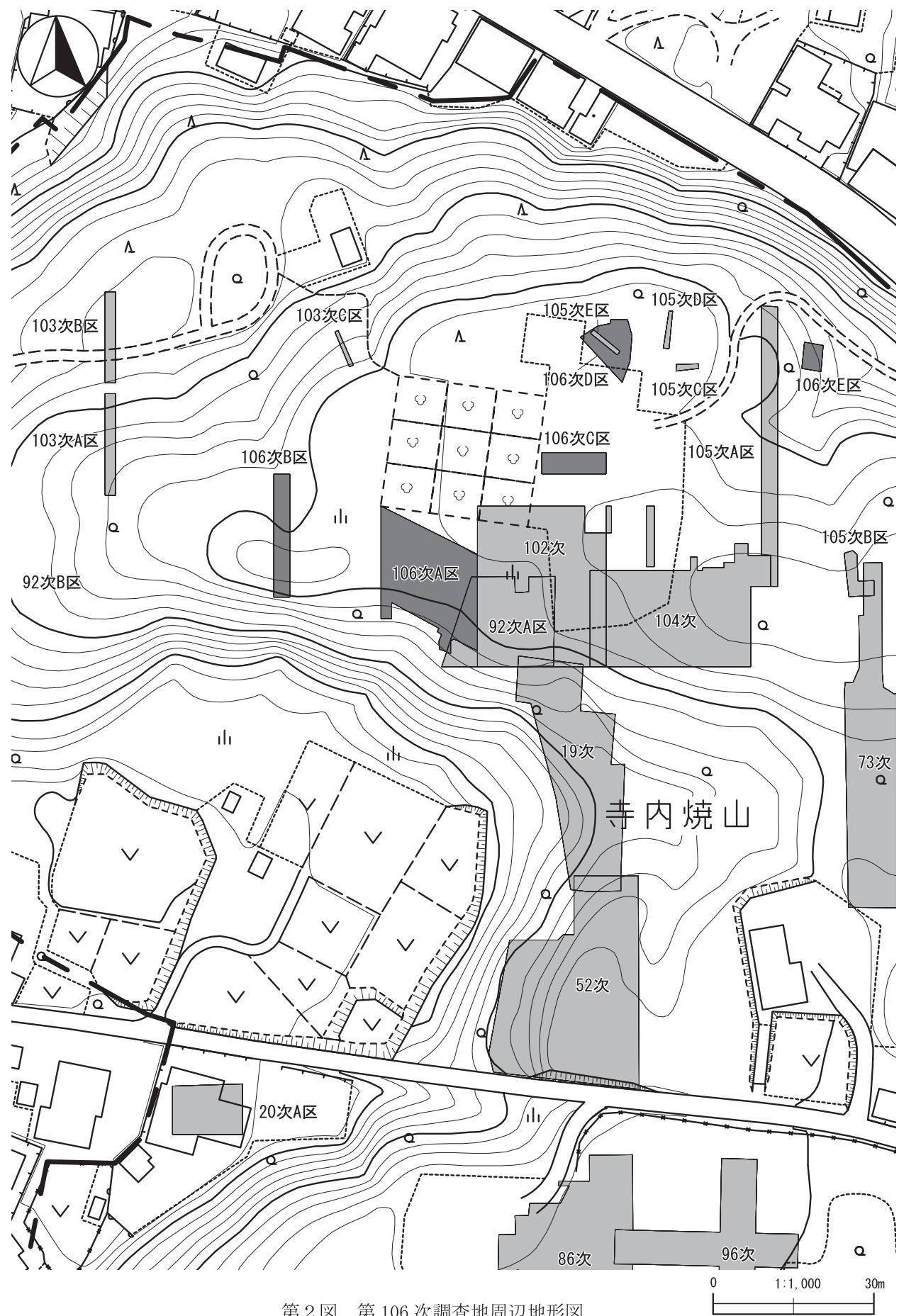
調査地は、政庁の北西約250mの外郭西門周辺、外郭線北西隅にあたる場所である（第1・2図）。第106次調査地周辺は、これまでの調査により、外郭西門跡とそれに取り付く外郭区画施設が発見されている。第92次調査A区（平成20年度）では、外郭西門が発見された。外郭西門の平面規模は桁行3間、梁間2間の規模で、掘立柱式の八脚門で、6期の変遷が確認された（I期～VI期）。この6期の変遷は政庁遺構期のI～VI期と対応している。また、第102次調査（平成25年度）では、これらの外郭西門に取り付く北側の外郭区画施設を発見した。外郭西門I・II期の築地塀跡と外郭西門III期の柱列塀跡は約5m延びると東に屈曲することが確認されている。外郭西門の東側隣接地である第104次調査地（平成26年度）では、城内大路の検出に努めたが、近世土取り穴により大きく削平を受けていた。一部道路硬化面が発見され、道路遺構が存在することだけは確認できたが、道路幅等は不明であった。外郭西門北西側に位置する第105次調査（平成26年度）では、A区北側・D区・E区で築地塀跡・材木塀跡の外郭区画施設が発見され、外郭西門に取り付く北側外郭区画施設は北側に張り出すことが判明した。外郭西門南側に位置する第19次調査（昭和51年度）・第52次調査（昭和63年度）・第86次調査（平成17年度）・第14次調査（昭和49年度）では南北方向に築地塀と材木塀が確認された。築地塀は第19次調査区では北でやや西に振れており、外郭西門方向へ延びる。また、第19次・52次・14次調査では柱列塀を跨ぐ形で櫓状建物（1間×2間）が1棟ずつ、合計3棟確認されている。外郭西門の東側にあたる第21次調査（昭和52年度）・第66次調査（平成8年度）・第70次調査（平成9年度）・第73次調査（平成12年度）では、規則的な配置に基づく8世紀第2四半期～9世紀中頃までの掘立柱建物群が確認され、倉庫群である可能性が指摘されている。また、第92次調査地B区では中世の土塁区画施設と小規模な門跡が発見され、第103次調査B・C区では北側の中世土塁区画施設の延長が発見されており、焼山地区北西部が古代以外に中世にも利用されていたことが判明している。

今回調査を行った第106次調査地は、近年まで宅地およびそれに付属する庭として利用されていた。現在は更地となっており、外郭西門西側の城外に延びる道路遺構と外郭西門北側の外郭区画施設の実体把握と今後の環境整備事業に向けて、調査を実施した。

調査区はA～E区の5箇所を設定した（第2図）。A区は地形に合わせ東西18m×南北18mの平行四辺形に調査区を設定し、必要に応じて南側にトレーニング状に拡張した。B区は3m×23mの南北トレーニング、C区は12m×4mの東西トレーニングを設定した。D区は第105次調査地E区を取り囲む形で61.5m²、E区は3.7m×5mの調査区を設定した。調査方法は、A・D・E区で面的調査、B・C区ではトレーニング調査で、遺構の検出確認を行った後、検出遺構については時期等遺構内容の把握が必要なものについて、保存に留意しながら半裁し、遺構調査を行った。

調査は基準杭測量、調査区の設定後、重機による第I層表土除去（A～C区）を行った（5月11日～12日）。

A区では、外郭西門からの城外道路の検出を目的として調査した。第I層表土および第II-1層造成土の除去、平面精査を行った（5月14日～21日）。第II-1層除去後、A区中央部でIII層の道路硬化面が確認され、第III層面検出遺構として、SD2319・SD2320A・SK2326・SK2327を検出した。また、調査区北



第2図 第106次調査地周辺地形図

II 第106次調査報告

側では既に部分的に第V層（地山）が検出され、SG2323・SG2324・SG2325を検出し、現況では平坦であるが、旧地形は北から南に傾斜していたことが判明した（5月22～27日）。SD2319とSD2320Aの発見により道路幅約9mの平安期のSX2331道路遺構が存在することが予想された。ただし、部分的に第II-2面で畠畝跡、第II-3層面に庭造成による搅乱が確認され、掘り下げた後に記録化を行った（6月2日～6月3日、第3図）。造成土である第II-2・II-3層を除去し、第IV-1層面でSD2321・SK2330を検出した。また、A区南西隅を南側に拡張、SD2320Aの延長にあたるSD2320Bを検出し、SX2331の道路幅を確認した（6月5日～8日）。この段階で第III層面におけるSX2331道路遺構を検出した状況となったので、検出段階での記録化を行った（6月15日～17日、第4図）。SD2319・SD2320A・Bを部分的に半裁後、A区北東部に堆積している第II-4層を掘り下げた。その結果、ガラス等の近代の遺物が出土したため、この層も庭構築の際の造成土であると判断し、除去・精査を行った（6月19日～24日）。その結果、A区北東部ではSG2325の埋土およびV層地山面を掘り込む形でSX2333が検出され、この段階で一旦記録化を行った（6月24日～7月2日）。SX2331道路遺構の時期決定および下層遺構の追求のため、A区西側のIII層をSX2331に直交する形で西側では部分的に、東側ではトレンチ状に除去した。その結果、A区西側ではSX2333が第IV-2層面で広く確認され、またSD2322B・SK2328が検出された。A区東側ではSX2334・SD2322Aが第IV-2層面で確認された（7月3日～8日）。SD2322A・Bと既に発見されていたSD2321の間に堆積している第IV-1～4層が幅約12mの奈良期SX2332道路遺構であると考えられた。また、平行して進めていたB区での調査状況の所見からA区南西隅をさらに拡張する必要に迫られ、拡張を行った（7月8日）。その結果、中世材木塀と考えられるSA2317・SA2318を検出した。これらについて、検出状況で記録化を行い、部分的に半裁後、記録化を行った（7月10日～21日）。北壁壁際のSG2323・SG2324に対し、サブトレンチを設定し、地山面まで検出した。また、A区西側も第IV層を除去、SK2329を検出し半裁後、第V層地山面まで確認し、記録化を行い、A区での作業は終了した（7月21日～8月3日、第5図）。

B区では、外郭西門からの城外道路の延長を確認するために調査した。第I層表土・第II-1・2層造成土を除去した（5月27日～6月11日）。北側土手状高まりで第III-1層、B区南端でIII-2層、B区中央部で硬化した第IV-1層と第IV-2層を検出した。精査を行った結果、第III-1層面でSA2335・SA2336・SD2341、第III-2層面でSA2337・SA2338、第IV-1層面でSD2339・SI2343・SK2344・SK2345・SK2346を検出した。SD2339は、A区におけるSD2321の延長線上に位置することから奈良期道路側溝と考えられ、第IV-1層がSX2349道路遺構と考えられた。当初SA2337・SA2338はSD2339と対になる溝跡と考えていたが、一段下げを行った結果、丸太材の痕跡が確認されたことから、材木塀跡と考えられた。またSA2338から珠洲系中世陶器が出土したため、これらは中世の材木塀跡であると判断した。この遺構検出状況で記録化を行った後（6月16日）、これらの遺構の半裁、記録化を行った（7月10日～13日）。SI2343の半裁後、遺構底部からSK2348を検出し、半裁後記録化を行っている。IV-1層の堆積状況などの情報を得るために西側にサブトレンチを設定し、深掘りを行い、第VI層地山まで確認した。断面図等の記録化を行いB区の調査を終了した（7月24日～29日、第16図）。

C区では、外郭西門北側の外郭区画施設の確認を目的として調査した。近年まで住宅があった部分であり、削平を受けている。第I層表土を除去後すぐに第III層地山面が検出された（7月29日）。第III層面でSD2351・SF2352A・B・SG2353・SG2354・SG2355が検出された。その他、住宅に伴う基礎の布堀りなどの搅乱があったため、これらを除去し遺構検出状況で記録化を行った（8月4日～7日）。遺構断面の確認のため、北壁側と南壁側にサブトレンチを設定し、掘り下げた（8月24～25日）。サブトレン

チ完掘後、記録化を行った（9月11日～9月15日、第21図）。

D区では、第105次調査地E区周辺を調査し、外郭西門北東部の利用状況の実体把握を目的として調査した。第I層表土を除去し、第II層面を検出した（7月29日～30日）。なお、D区第I層の掘り下げの時に、小中学生を対象とした発掘体験教室を開催した（7月25日）。第II層面に礫が多数出土したため、記録化を行った。第II層を掘り下げ、近世陶磁器等が出土したため、近現代の造成土であると判断し、除去した（8月5～6日）。第III層面を精査し、SB2356・SB2357・SA2358・SK2359～2366の多数の遺構を検出し、検出状況の記録化を行った。（8月7日～27日）。なお、第105次E区で発見していたSA2313・SA2314の広がりも面的に確認した。SB2356・SB2357のP1～4について半裁を行い、柱痕跡を検出し、柱位置を確認した（9月1日～9月24日）。確認の必要な遺構の半裁後、記録化を行い、D区の調査を終了した（9月24日～9月29日、第27図）。

E区では、第105次調査地A区で発見された外郭区画施設（築地塀跡・材木塀跡）の東側延長を確認することを目的として調査した。第I層表土・第II層近世造成土を除去した（8月12日～17日）。なお、第105次調査地A区のSF2300の土層断面剥ぎ取り転写のため埋め戻し土の除去・清掃も行った。第III-1-①・②層面でSA2367・SA2368を検出した。また、東側の園路階段部分の搅乱を除去し削平を受けている部分を精査し、第III-3-①層面でSF2369を検出し、検出段階で記録化を行った（8月18日～8月21日）。いずれの外郭区画施設も東側へ延びていることを確認できた。SA2367・SA2368の半裁および、E区中央部で南北方向にSF2369を断ち割り、南側で深掘りし土層堆積状況を確認した（8月22日～9月9日）。これらの遺構の半裁状況について記録化を行いE区の調査を終了した（9月10日、第38図）。

平成27年8月29日に第106次調査の現地説明会を開催し、80名の参加があった。平成27年9月2日～3日に東北歴史博物館 及川規上席主任研究員の指導のもと第105次調査A区 SF2300築地塀跡の土層断面剥ぎ取り転写を行った。平成27年9月8日に文化庁記念物課 森先一貴文化財技官の調査指導を受けた。平成27年9月17日に秋田大学 今井忠男教授、千田恵吾学芸員らに築地塀土壤分析のための現地調査をしていただいた。

全調査区の記録化の後、機材撤収および埋め戻しを行い調査が終了した（9月30日～10月13日）。

2) A区検出遺構と出土遺物

A区では、道路遺構2面、溝状遺構2箇所、材木塀跡2条、溝跡4条、土取り穴3基、土坑5基が発見された。このうち材木塀跡2条は中世遺構の可能性が高く、それ以外は古代遺構であると考えられる。

①古代道路遺構関係

SD2319溝跡（第3～5・9図、図版1・3・4）

調査区中央の第III層面で検出された。幅約40cm、深さ5～30cm、長さ16.6m以上の東西方向の溝跡である。断面はU字状もしくは浅い皿状を呈する。西で23度北に振れる。調査区外の西側に延び、SX2331道路遺構の北側側溝と考えられる。第92次調査地A区で検出されたSD1994と繋がり、これの延長であると考えられる。

SK2327と重複し、これより古い。

SD2320A・B溝跡（第4・5・9図、図版1・3～5）

調査区南側の第III層面で検出された。調査区南東側で検出されたものをSD2320A、これの延長線上にあ

る南西側のものを SD2320B とした。SD2320A は幅40cm、深さ30cm、長さ2.4m以上の東西方向の溝跡である。断面はU字状を呈する。西で23度北に振れる。SD2320B は幅45cm、深さ15cm、長さ2.1m以上の東西方向の溝跡である。断面はU字状を呈する。西で23度北に振れる。両者をあわせると長さ14.3m以上の溝跡であると考えられる。調査区外の西側に延び、SX2331道路遺構の南側側溝と考えられる。

SD2320B は SD2322B・SA2317と重複し、SD2322B より新しく、SA2317より古い。

S D 2321溝跡（第4・5・9図、図版1・4・5）

調査区北東の第IV-1層面で検出された。幅40cm、深さ5cm、長さ4.2m以上の東西方向の溝跡である。断面は浅い皿状を呈する。西で24度北に振れる。西側は削平され検出されなかった。また、遺構上部は全体的に削平を受けている。SX2332道路遺構の北側側溝であると考えられる。

SG2323と重複し、これより新しい。

S D 2322A・B溝跡（第5・9図、図版1・5・6）

調査区南側の第IV-2層面で検出された。調査区南東側で検出されたものを SD2322A、この延長線上にある南東側のものを SD2322B とした。SD2322A は幅50cm、深さ15cm、長さ20cm以上の東西方向の溝跡である。断面はU字形を呈し、西で24度北に振れる。SD2332B は幅50cm、深さ15cm、長さ40cm以上の東西方向の溝跡である。断面はU字形を呈し、西で24度北に振れる。両者をあわせると長さ12.4m以上の溝跡であると考えられる。調査区外の西側に延び、SX2332道路遺構の南側側溝であると考えられる。第92次調査地A区で検出された地山面掘り込みの SD1995は、これらの延長線上に位置する。

SD2322B は SA2317・SK2328・SD2320B と重複し、これらより古い。

S X 2331道路遺構（第9図、図版1・3・4）

調査区中央南側のⅢ層である褐色土の硬化面からなる東西方向の道路跡である。硬化面の厚さは10～20cm遺存していた。SD2319溝跡が北側側溝、SD2320A・B溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で23度北に振れる。SD2319溝跡・SD2320A・B溝跡の方向に沿って東西16.6m以上にわたり確認され、道路側溝間の距離は、道路側溝に直交する方向で計測すると溝芯々で、SD2319—SD2320A 間で9.0m、SD2319—SD2320B 間で8.6mである。総じて約9mの幅をもつ道路遺構であると考えられる。調査区外の西側に延びる。

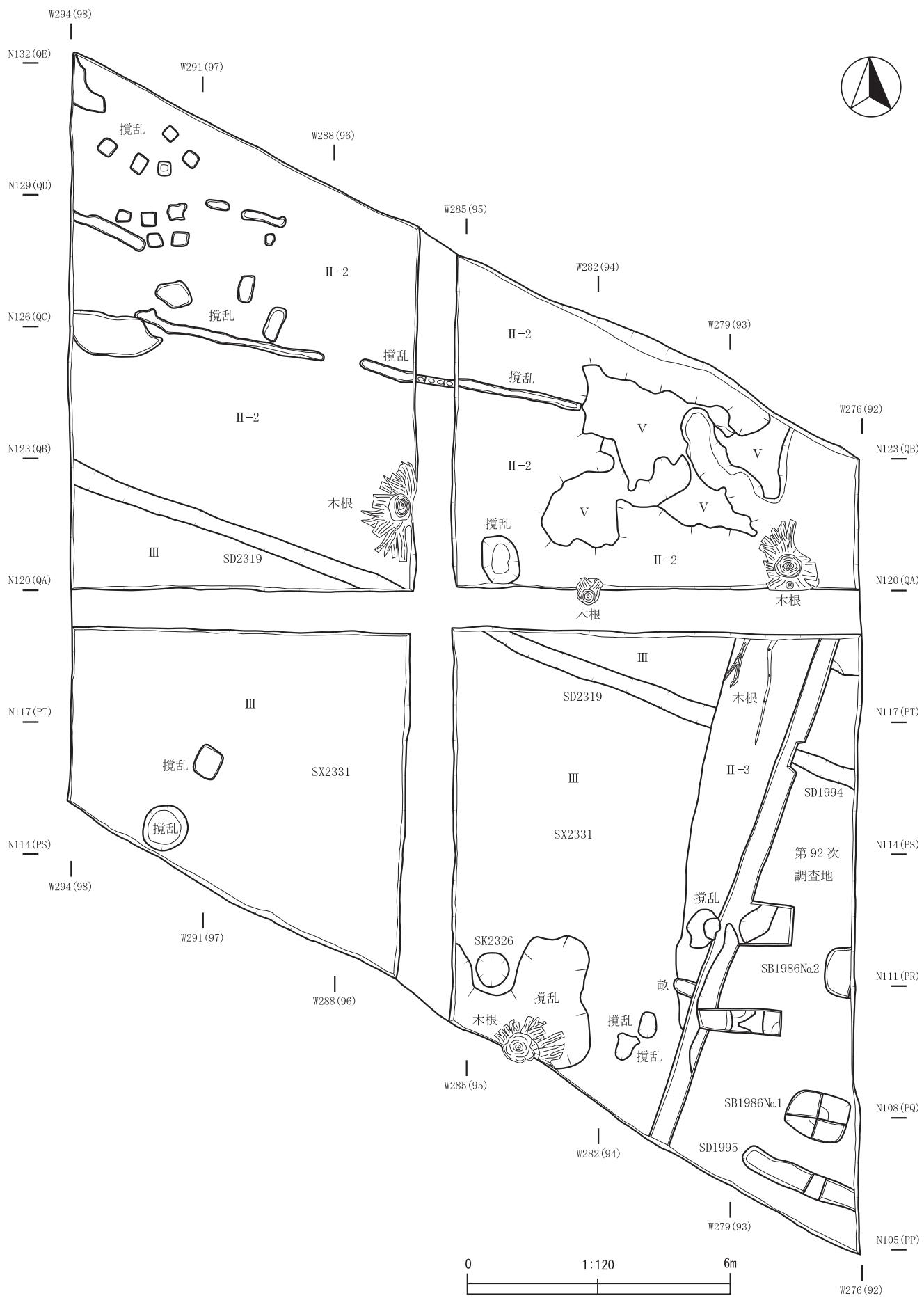
SK2326・SK2327と重複し、これらより古い。

S X 2331道路遺構出土遺物（第15図11～13、図版18）

SX2331を構成するのは基本層序の第Ⅲ層の硬化面であり、「3) A区基本層序および各層出土遺物」の第Ⅲ層の部分で述べる。

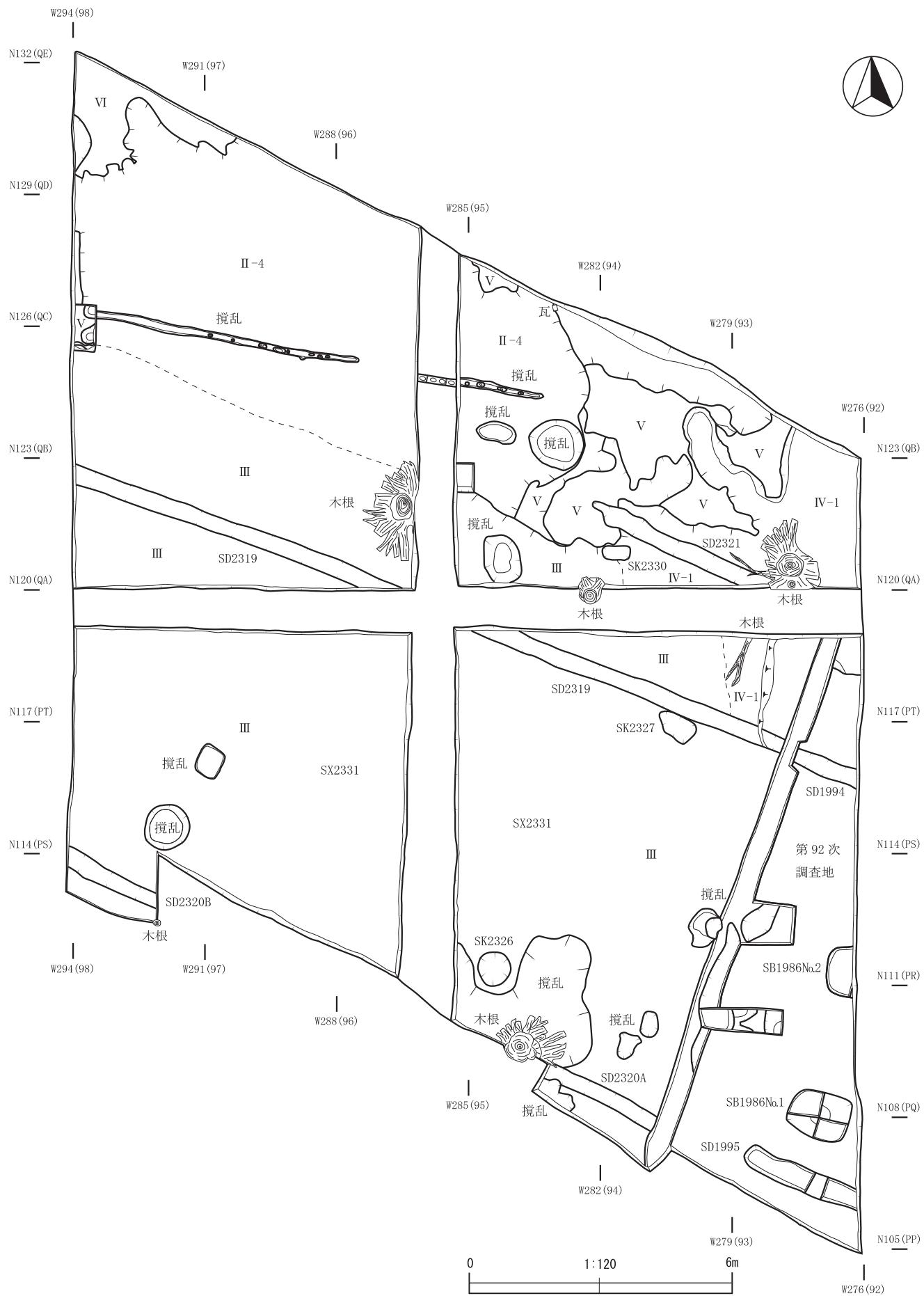
S X 2332道路遺構（第9図、図版1）

調査区中央南側の第IV-1～4層である黄褐色粘土・暗褐色土・褐色土・黄褐色土の硬化面からなる東西方向の道路跡である。硬化面の厚さは、東側で部分的に約10cm、西側で35cm遺存していた。SD2321溝跡が北側側溝、SD2322A・B溝跡が南側側溝と考えられ、これらによって区画されており、西で24度北に振れる。SD2321・SD2322A・B溝跡の方向に沿って東西16m以上にわたり確認されることが予想さ



第3図 第106次調査地A区遺構全体図（第II-2・II-3・III層面検出遺構）

II 第106次調査報告 A区

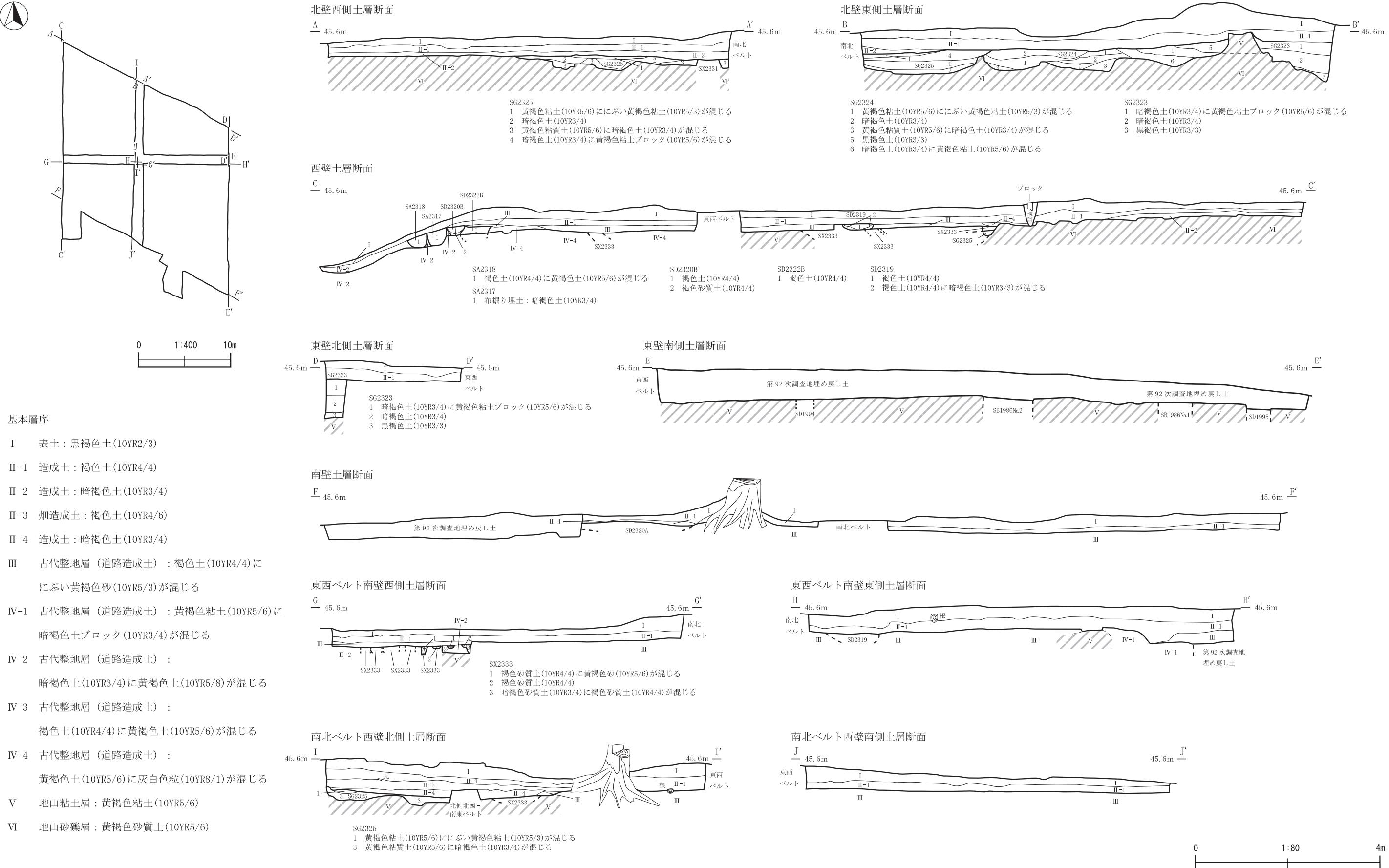


第4図 第106次調査地A区遺構全体図（第II-4・III層面検出遺構）

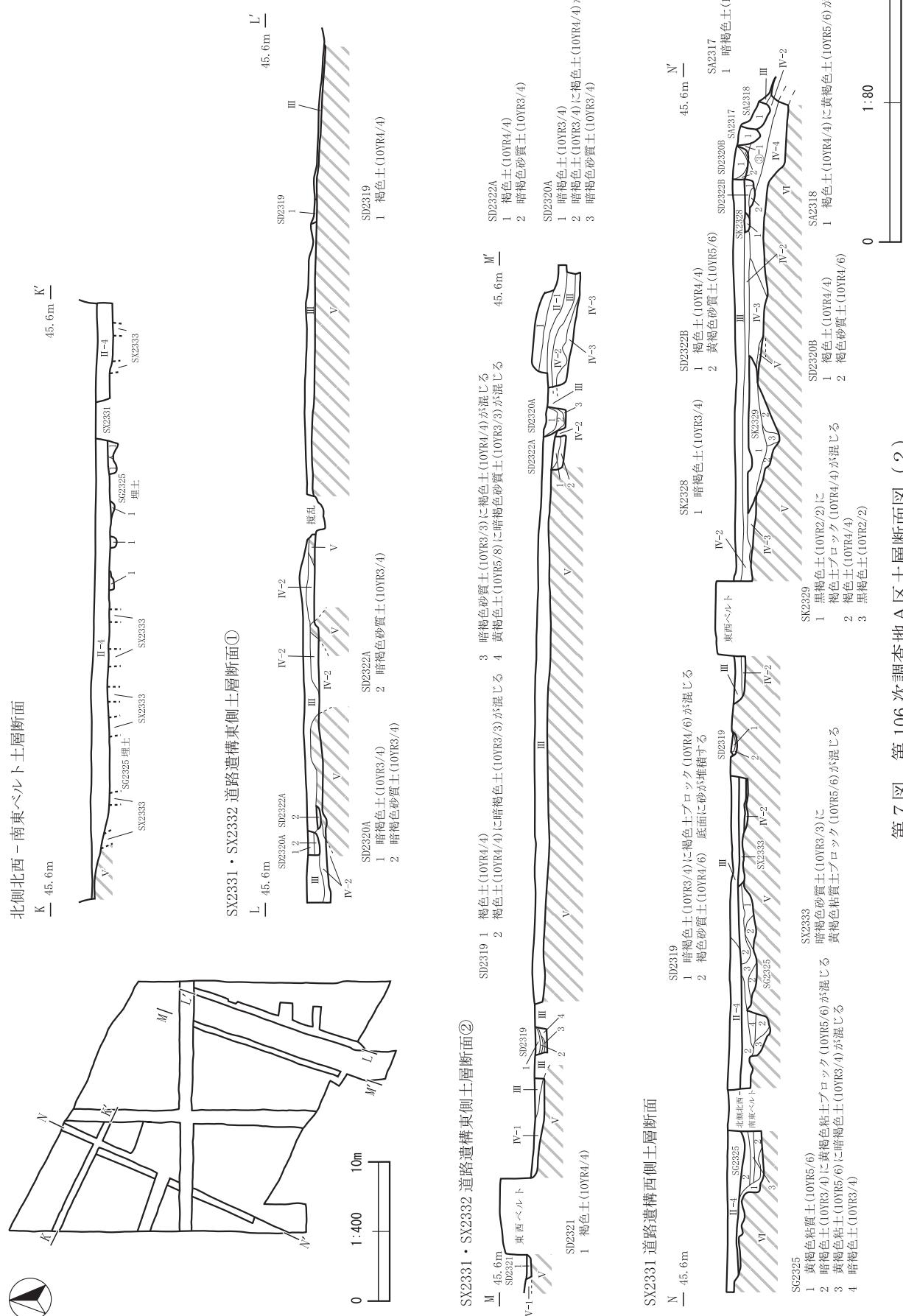
第5図 第106次調査地A区遺構全体図（第III・IV層面検出遺構）



赤：深堀り区（V層面まで）



第6図 第106次調査地A区土層断面図 (1)



第7回 第106次調査地A区土層断面図 (2)

れ、道路側溝間の距離は、道路側溝に直交する方向で計測すると溝芯々で、SD2321—SD2322A 間で11.9m、SD2321の延長線上—SD2322B 間で12.0mである。総じて約12mの幅をもつ道路遺構であると考えられる。調査区外の西側に延びる。

SK2328・SX2333と重複し、これらより古い。

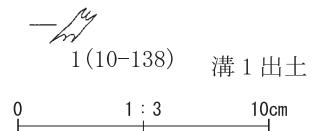
S X2333溝状遺構（第10図、図版6）

調査区西側の第IV-2層面・SG2325埋土上面で検出され、SX2331道路遺構を構成する第III層直下で確認された。幅15~40cm、深さ5~15cm、長さ0.2~4.2mの南北方向の溝跡群である。細分すると61条の溝跡が確認された。長さは3~4mのものが多く、北で3~16度東に振れる。溝方向はSX2331道路遺構にほぼ直交する。溝跡埋土上部には褐色砂が特徴的に堆積している。SX2331道路遺構造成時の整地事業として掘り込まれたものと考えられる。

SG2325・SK2329と重複し、これらより新しい。

S X2333溝状遺構出土遺物（第8図、図版18）

赤褐色土器（第8図1）：壺の体部破片である。



第8図 SX2333溝状遺構出土遺物

S X2334溝状遺構（第5・9図、図版6）

調査区東側の第V層地山粘土層面で検出された。幅10~20cm、長さ20~40cm以上の細長い不正形を呈する。不正形であるため溝方向の計測は難しいが、全体的に南北方向を示し、SX2331・SX2332道路遺構の方向に直交するものと考えられる。

②古代その他の遺構

S G2323土取り穴（第5・6図、図版7）

調査区北東部の第V層地山粘土層面で検出された。直径3.5m以上、深さ90cmの不正形を呈する。土取り穴の範囲は調査区北東方向へ広がる。

SD2321と重複し、これより古い。

S G2324土取り穴（第5・6図、図版7）

調査区中央部北側の第V層地山粘土層面で検出された。直径4m以上、深さ50cmの不正形を呈する。土取り穴の範囲は調査区北側へ広がる。

SG2325と重複し、これより古い。

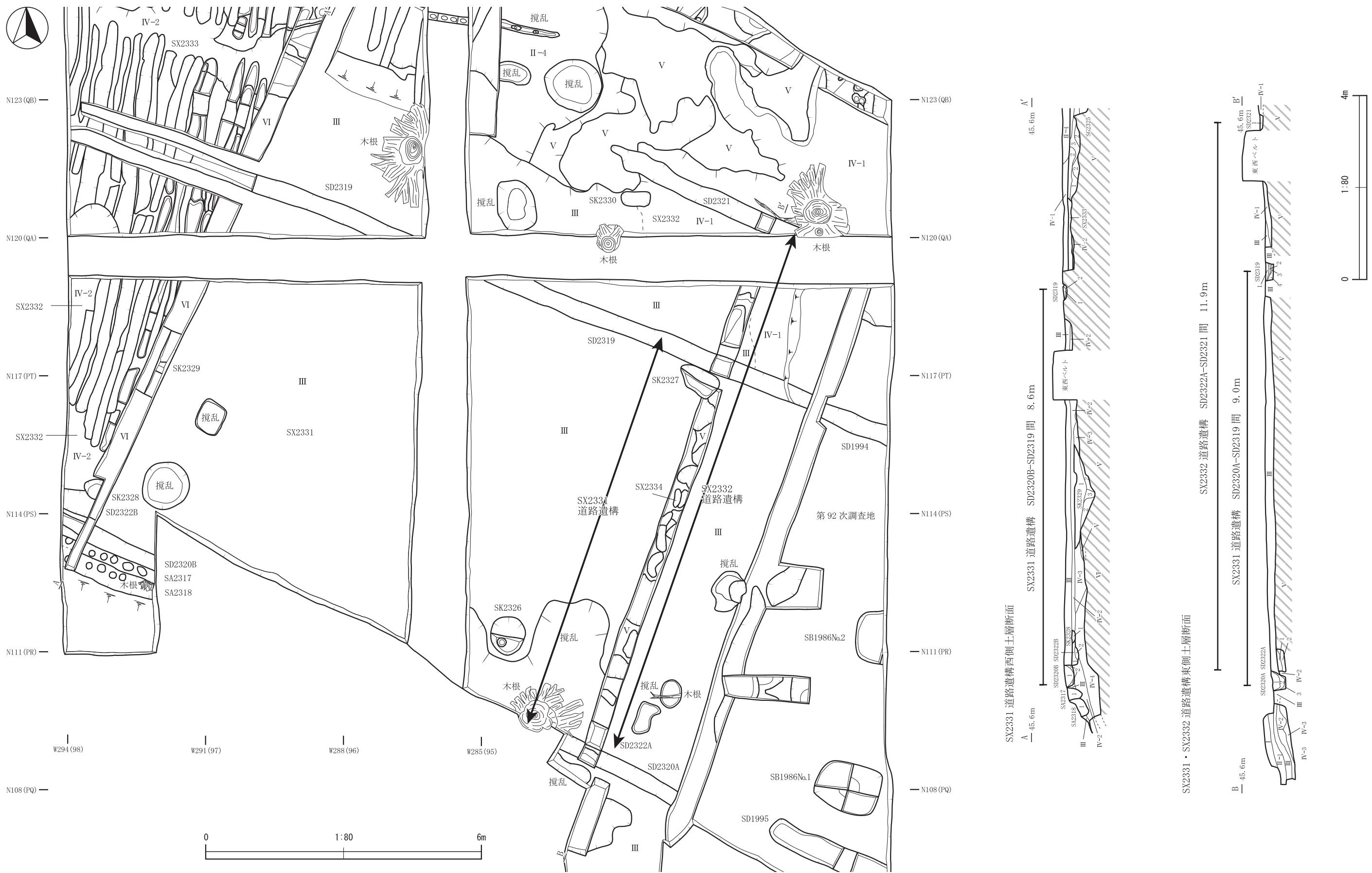
S G2325土取り穴（第5・6図、図版7）

調査区北西部の第V層地山粘土層面で検出された。直径12m以上、深さ50cmの不正形を呈する。土取り穴の範囲は調査区北壁がほぼ北側端であるが、西側端は調査区外へ広がる。

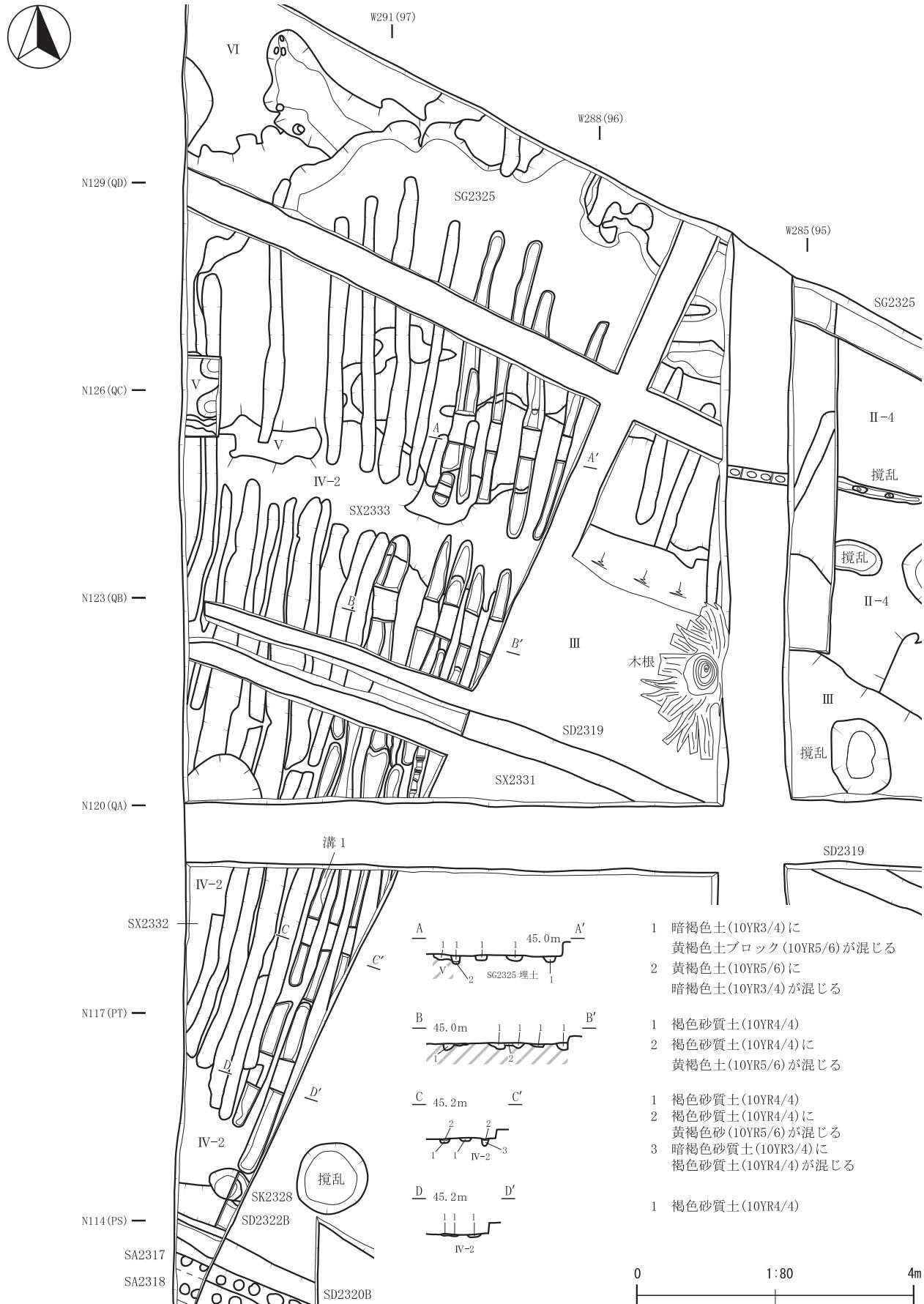
SG2324・SX2333と重複し、SG2324より新しく、SX2333より古い。特にSX2333溝状遺構は、このSG2325の埋土を掘り込む形で構築されている。

S G2325土取り穴出土遺物（第11・12図、図版18）

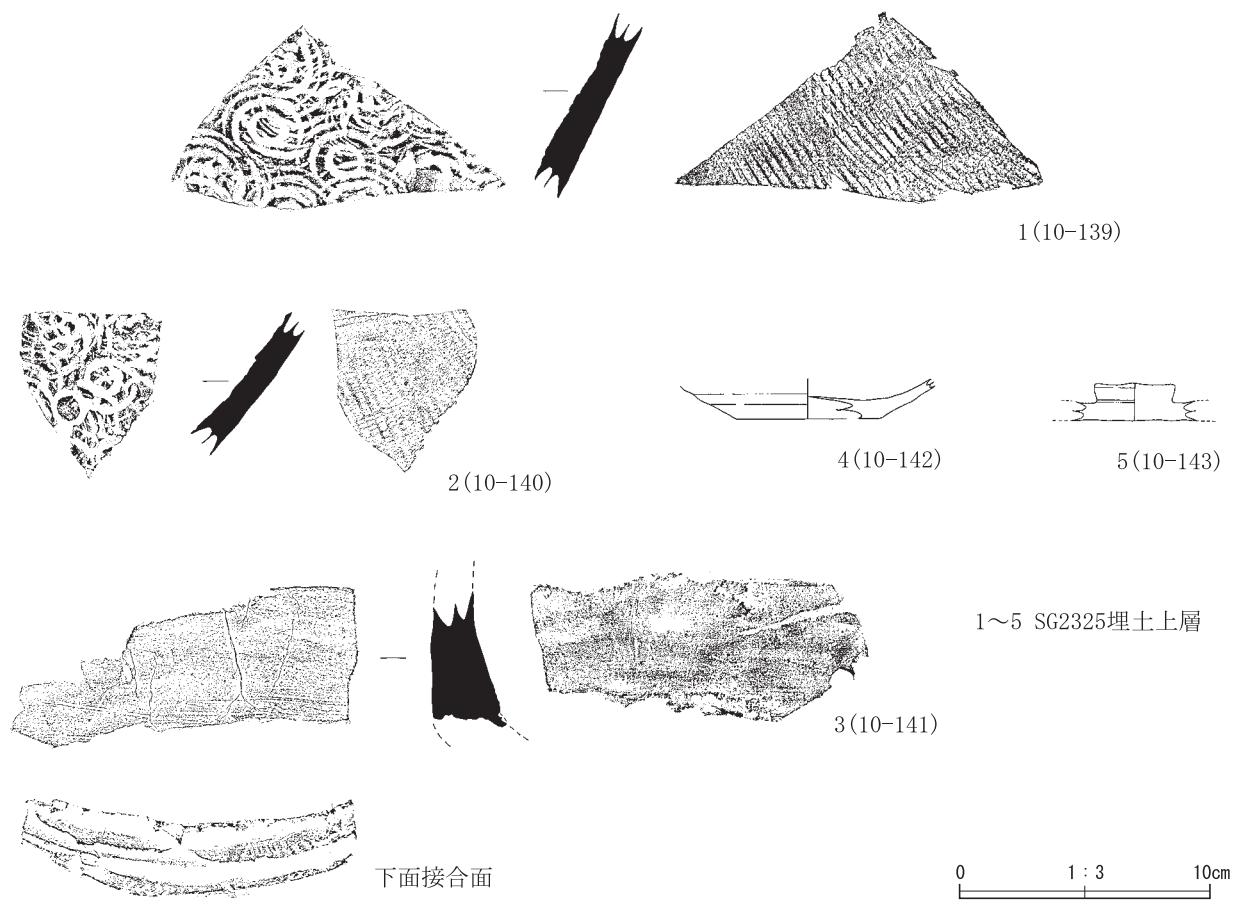
須恵器（第11図1~3）：いずれも埋土上層からの出土である。1・2は甕の体部破片であり、外面



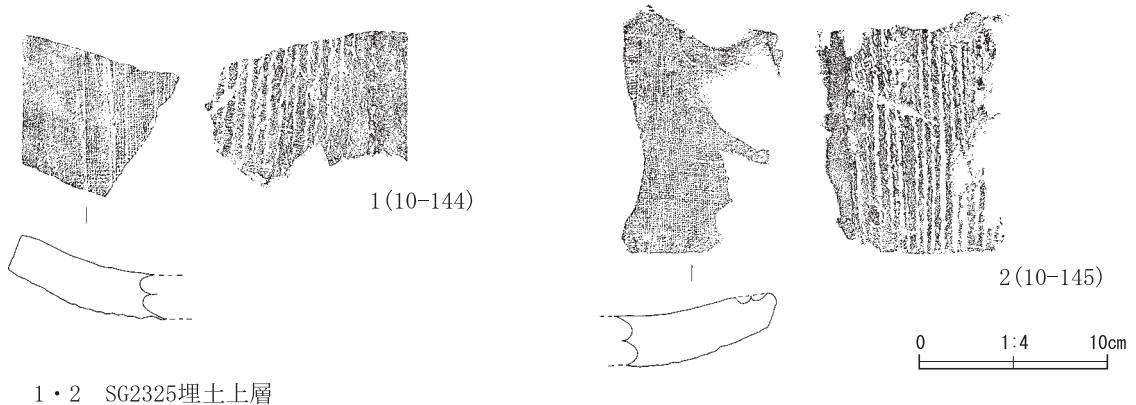
第9図 SX2331・SX2332道路遺構



第10図 SX2333 溝状遺構



第11図 SG2325土取り穴出土遺物



第12図 SG2325土取り穴出土瓦

に格子状の叩き目、内面に同心円状の当て具痕がみられる。3は大甕の頸部破片である。頸部外径で直径約37.4cmある大型のものである。頸部と体部の屈曲点のところで剥離している。内面と外面に補強のため粘土を貼り付けている。下面の接合面に凹凸がある。

赤褐色土器（第11図4・5）：いずれも埋土上層からの出土である。4は坏で、摩滅のため底部切り離しは不明である。5は蓋で、扁平な擬宝珠状のつまみの部分である。

瓦（第12図1・2）：いずれも埋土上層からの出土である。1・2は一枚作りの平瓦でいずれも凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目压痕が認められ、硬質で焼成堅緻である。1は灰色、2は暗灰～灰色である。

SK2326土坑（第13図、図版7）

調査区南西の第III層面で検出された。直径80cm、深さ30cmで、円形を呈する。底面に直径10cm、深さ20cmの小ピットを伴う。

SX2331と重複し、これより新しい。

SK2327土坑（第13図、図版7）

調査区中央部東側の第III層面で検出された。長軸90cm、短軸50cm、深さ15cmで、橢円形を呈する。

SD2319・SX2331と重複し、これらより新しい。

SK2328土坑（第13図、図版6）

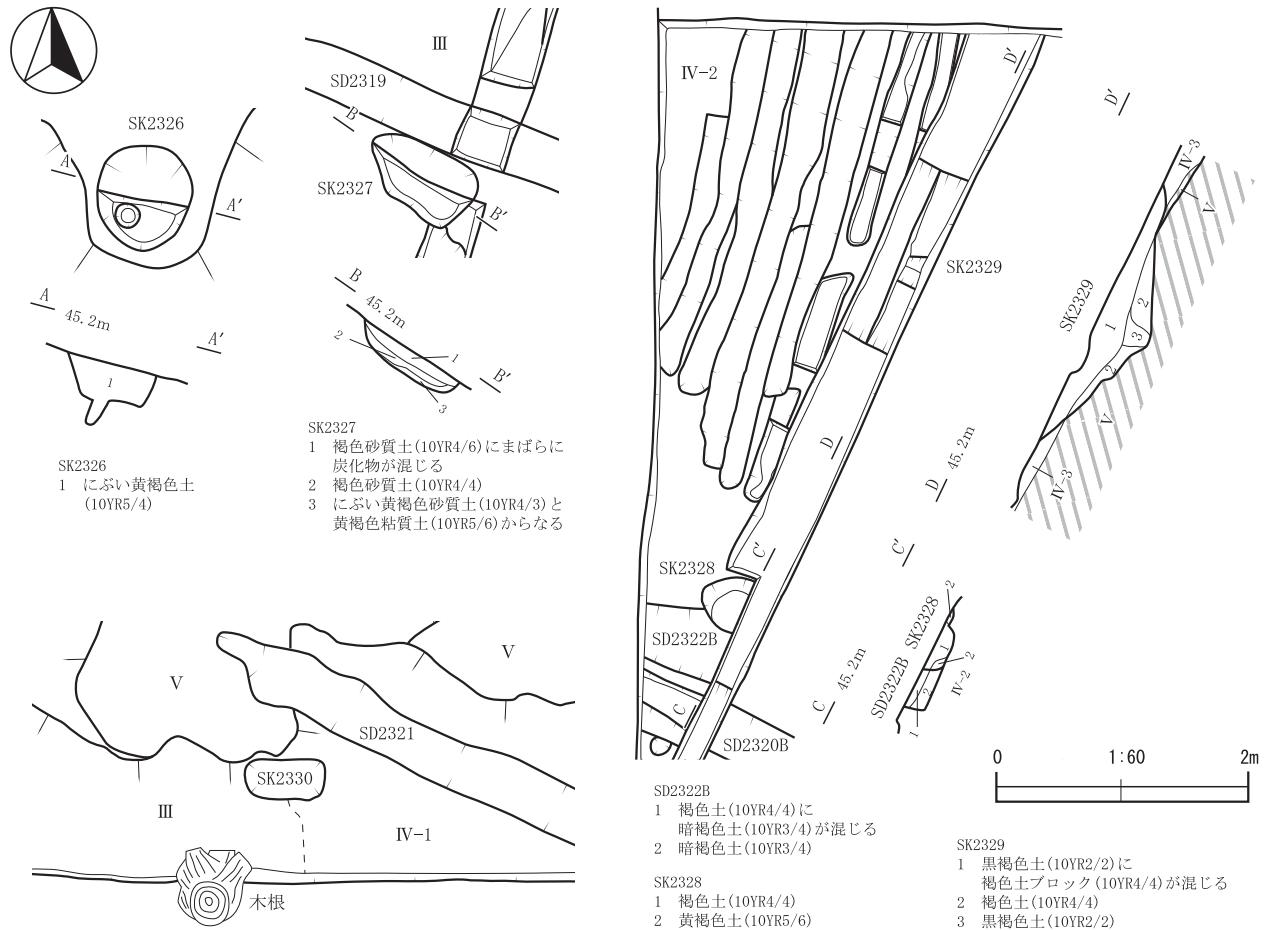
調査区南西部の第IV-2層で検出された。直径40cm、深さ10cmで、円形を呈する。

SD2322B・SX2332と重複し、これらより新しい。

SK2329土坑（第13図、図版7）

調査区南西部の第IV-3層で検出された。長軸2.2m、深さ45cmである。平面形は不明であるが、断面は擂鉢状を呈する。

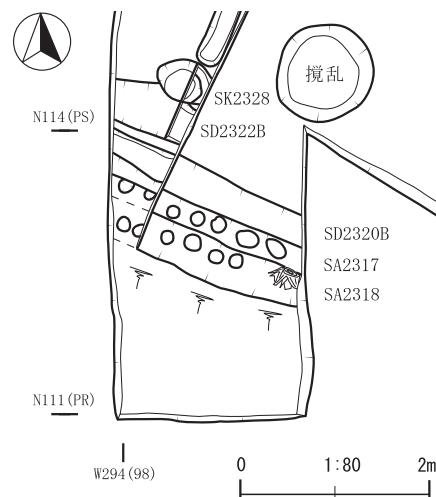
SX2333と重複し、これより古い。



第13図 SK2326～SK2330 土坑

S K2330土坑（第13図）

調査区北東部での第III・IV-1・V層面で検出された。長軸60cm、短軸30cmの橢円形を呈する。



③中世の遺構

後述するB区における所見から下記遺構については中世遺構と判断した。

S A2317材木塀跡（第14図、図版7）

調査区南西部の第III層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅15cm、深さ30cm、長さ2.1m以上で、断面はU字状を呈し、直径10~15cmの柱痕跡が伴う。西で22度北に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木塀と考えられる。

SD2322B・SA2318と重複し、SD2322Bより新しく、SA2318より古い。

S A2318材木塀跡（第14図、図版7）

調査区南西部の第III層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅20cm、深さ30cm、長さ2.1m以上で、断面はU字状を呈し、直径12cmの柱痕跡が伴う。西で22度北に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木塀と考えられる。

SA2317と重複し、これより新しい。

3) A区基本層序および各層出土遺物

第106次調査地A区はかつて宅地の庭の部分にあたり、全体的に削平を受けている。

第106次調査地A区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土：現表土。黒褐色土(10YR2/3)。調査地全体を覆う。

第II層 造成土：近世・近代・現代の旧耕作土もしくは造成土。第II-1層（造成土：褐色土(10YR4/4)）、第II-2層（造成土：暗褐色土(10YR3/4)）、第II-3層（畑造成土：褐色土(10YR4/6)）、第II-4層（造成土：暗褐色土(10YR3/4)）がある。

第II-1層は調査地全体に、第II-2層は北東部にのみ、第II-3層は南東部にのみ、第II-4層は北東部にのみ分布する。第II-2層と第II-4層は庭部分の造成土と考えられる。また、第II-3層面に畑畝跡が1条検出されている。

第III層 古代整地層（道路造成土）：褐色土(10YR4/4)ににぶい黄褐色砂(10YR5/3)が混じる。SX2331道路遺構を構成する硬化面である。調査区中央部に広がる。北西部のみ第II-4層によって削平を受けている。SA2317、SA2318、SD2319、SD2320A・B、SK2326、SK2327、SK2330が検出されている。

第IV層 古代整地層（道路造成土）：古代の整地層で SX2332道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第IV-1層 古代整地層（道路造成土）：黄褐色粘土(10YR5/6)に暗褐色土ブロック(10YR3/4)が混じる。北東部にのみ分布する。SD2321が検出されている。

第IV-2層 古代整地層（道路造成土）：暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色土(10YR5/8)が混じる。南西部にのみ分布する。SD2322A・B、SK2328、SX2333が検出されている。

第IV-3層 古代整地層（道路造成土）：褐色土(10YR4/4)に黄褐色土(10YR5/6)が混じる。南西部にのみ分布する。SK2329が検出されている。

第IV-4層 古代整地層（道路造成土）：黄褐色土(10YR5/6)に灰白色粒(10YR8/1)が混じる。南西部にのみ分布する。

第V層 地山粘土層：黄褐色粘土(10YR5/6)。SG2323、SG2324、SG2325、SX2334が検出されている。

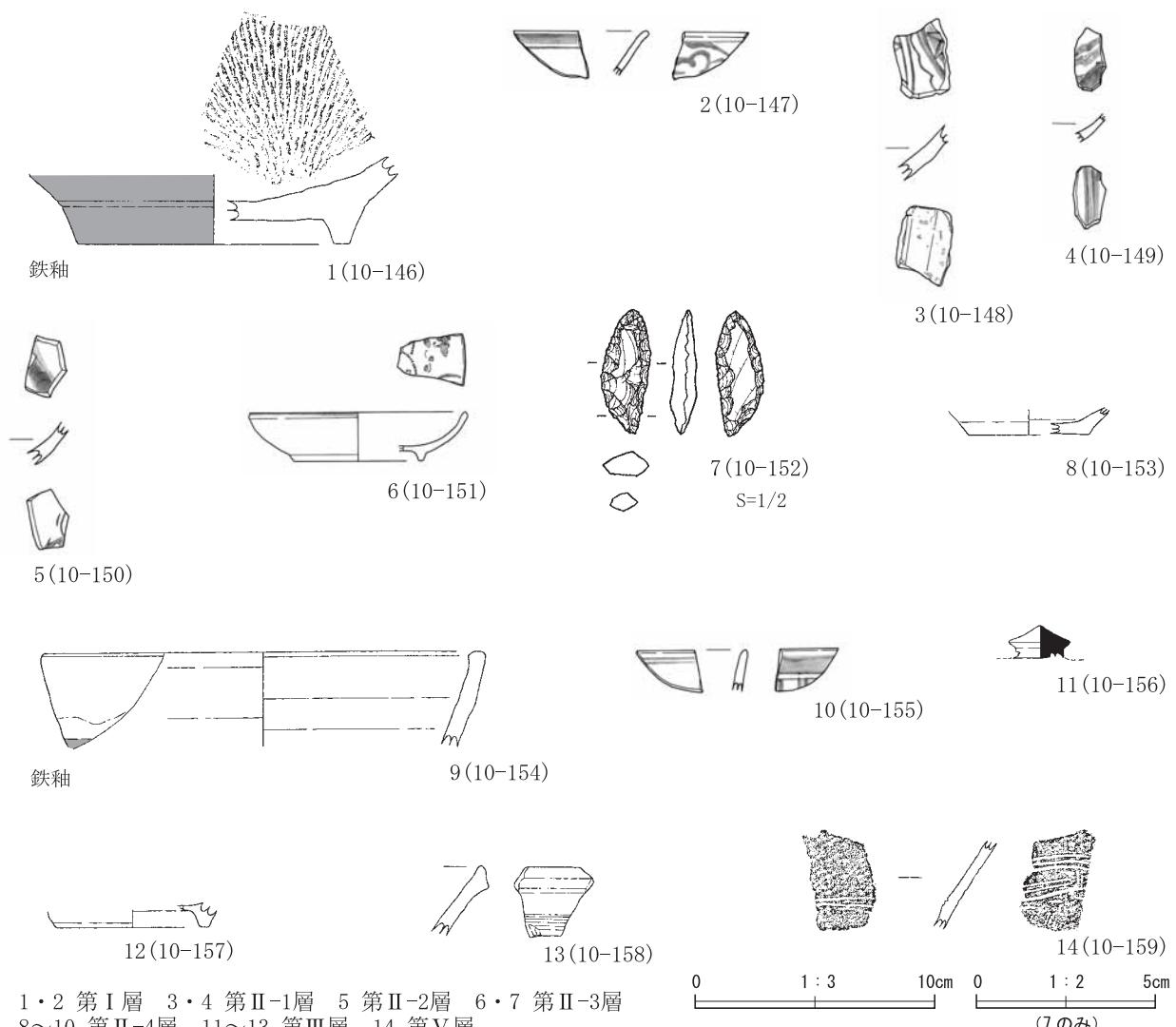
第VI層 地山砂礫層：黄褐色砂質土(10YR5/6)。

各層出土遺物

第I層 出土遺物（第15図1・2、図版18）

陶器（第15図1）：擂鉢の底部破片である。内外面に鉄釉を施している。

磁器（第15図2）：肥前系磁器染付碗である。



第15図 第106次調査地A区第I～V層出土遺物

第Ⅱ層 出土遺物（第15図3～10、図版18）

第Ⅱ-1層 出土遺物（第15図3・4、図版18）

磁器（第15図3・4）：3は中国産（漳州窯系）染付皿である。4は肥前系染付碗である。

第Ⅱ-2層 出土遺物（第15図5、図版18）

磁器（第15図5）：肥前系染付碗である。

第Ⅱ-3層 出土遺物（第15図6・7、図版18）

磁器（第15図6）：染付皿で、西洋コバルトを用いている。

石器（第15図7）：珪質頁岩製の石鏃未製品である。

第Ⅱ-4層 出土遺物（第15図8～10、図版18）

赤褐色土器（第15図8）：坏で、底部は摩滅のため切り離し不明である。

陶器（第15図9）：白岩窯産の鉢である。

磁器（第15図10）：肥前系磁器染付碗である。

第Ⅲ層 出土遺物（第15図11～13、図版18）

須恵器（第15図11）：蓋の擬宝珠状のつまみ部分の破片である。

赤褐色土器（第15図12・13）：12は台付坏の高台部分の破片である。13は甕の口縁部破片である。外面頸部と内面にロクロ利用のカキ目調整が認められる。

第Ⅴ層 出土遺物（第15図14、図版18）

弥生土器（第15図14）：鉢形土器の口縁部破片である。波状口縁で、口縁部は外反する。変形工字文と列点文を施文する。沈線は細線化されている。

4) B区検出遺構と出土遺物

B区では、道路遺構1面、土壙跡1基、材木塀跡4条、溝跡4条、竪穴住居跡1軒、土坑5基が発見された。このうち、土壙跡1基、材木塀跡4条、溝跡2条は中世遺構と考えられ、それ以外は古代遺構であると考えられる。

①古代道路遺構関係

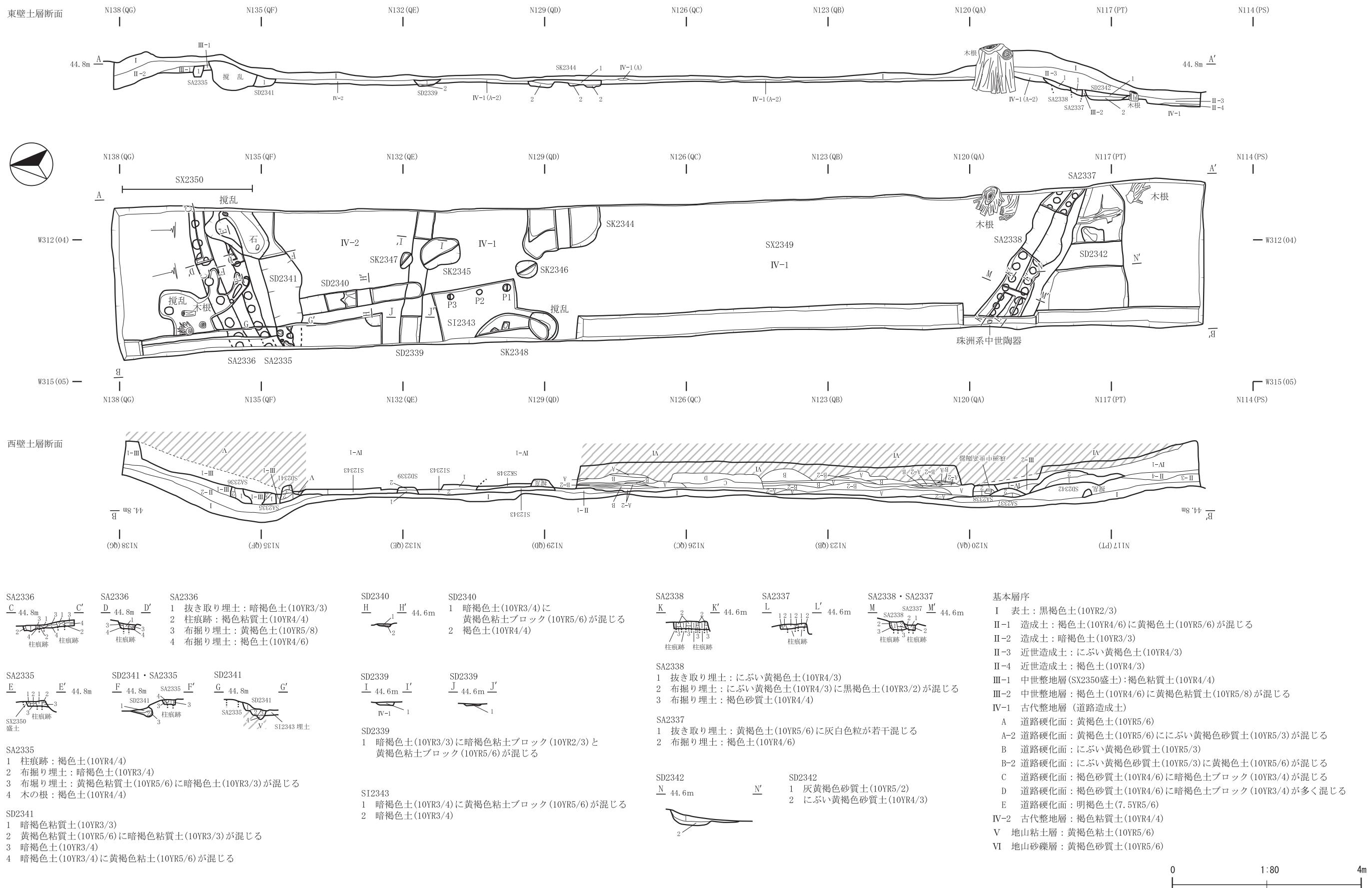
S D2339溝跡（第16図、図版1・8）

調査区北部の第IV-1・IV-2層面で検出された。幅約40cm、深さ約5cm、長さ2.8m以上の東西方向の溝跡である。断面は浅い皿状を呈し、西で8度北に振れる。調査区外の東西に延び、SX2349道路遺構の北側側溝であると考えられる。A区 SD2321溝跡の延長線上に位置する。

SD2340・SI2343・SK2345・SK2347と重複し、SI2343より新しく、SD2340・SK2345・SK2347より古い。

S X2349道路遺構（第16図、図版1・8）

調査区中央部の第IV-1層である黄褐色土等の硬化面からなる東西方向の道路跡である。硬化面の厚さは20～50cmあり、7種類の土層に細分され交互に版築状に積み重ねられている。SD2339溝跡が北側側溝と考えられる。第IV-1層はSD2339から南側に約12m分布しており、これがSX2349道路遺構の道路幅であると考えられるが、南側側溝は、後述する中世のSA2337・SA2338材木塀跡によって削平されており、検出されなかった。北側道路側溝であるSD2339溝跡の方向からみて、SX2349道路遺構は、西で8度北に振れる。調査区外の東西に延びる。



第16図 第106次調査地B区遺構全体図

SA2337・SA2338・SI2343・SK2344・SK2345・SK2346・SK2348と重複し、これらより古い。

②古代その他の遺構

S D2340溝跡（第16図、図版9）

調査区北部の第IV-2層面で検出された。幅30cm、深さ5cm、長さ2.5m以上の南北方向の溝跡である。断面は浅い皿状を呈し、北で9度西に振れる。

SD2339・SD2341・SI2343と重複し、SD2339・SI2343より新しく、SD2341より古い。

S I2343堅穴住居跡（第17図、図版9）

調査区北部の第IV-1層面で検出された堅穴住居跡である。一辺4.5mの方形を呈し、調査区外の西へ広がる。カマドの有無は不明である。西壁は北で10度西へ振れる。住居壁高は5~10cmであるが、上部は削平されていると考えられる。西壁際に側柱と考えられる直径10~20cm、深さ10cmの小ピットが3基伴う。

SD2339・SD2340・SD2341・SK2348・SX2349と重複し、SK2348・SX2349より新しく、SD2339・SD2340・SD2341より古い。

S K2344土坑（第17図、図版9）

調査区北部第IV-1層面で検出された。長軸1.7m、短軸90cm、深さ10cmで、不正形を呈する。

SX2349と重複し、これより新しい。

S K2345土坑（第17図、図版9）

調査区北部の第IV-1層面で検出された。長軸90cm、短軸60cm、深さ5cmで、楕円形を呈する。

SD2339・SX2349と重複し、これらより新しい。

S K2346土坑（第17図、図版9）

調査区北部の第IV-1層面で検出された。長軸50cm、短軸30cm、深さ10cmで、楕円形を呈する。

SX2349と重複し、これより新しい。

S K2347土坑（第17図）

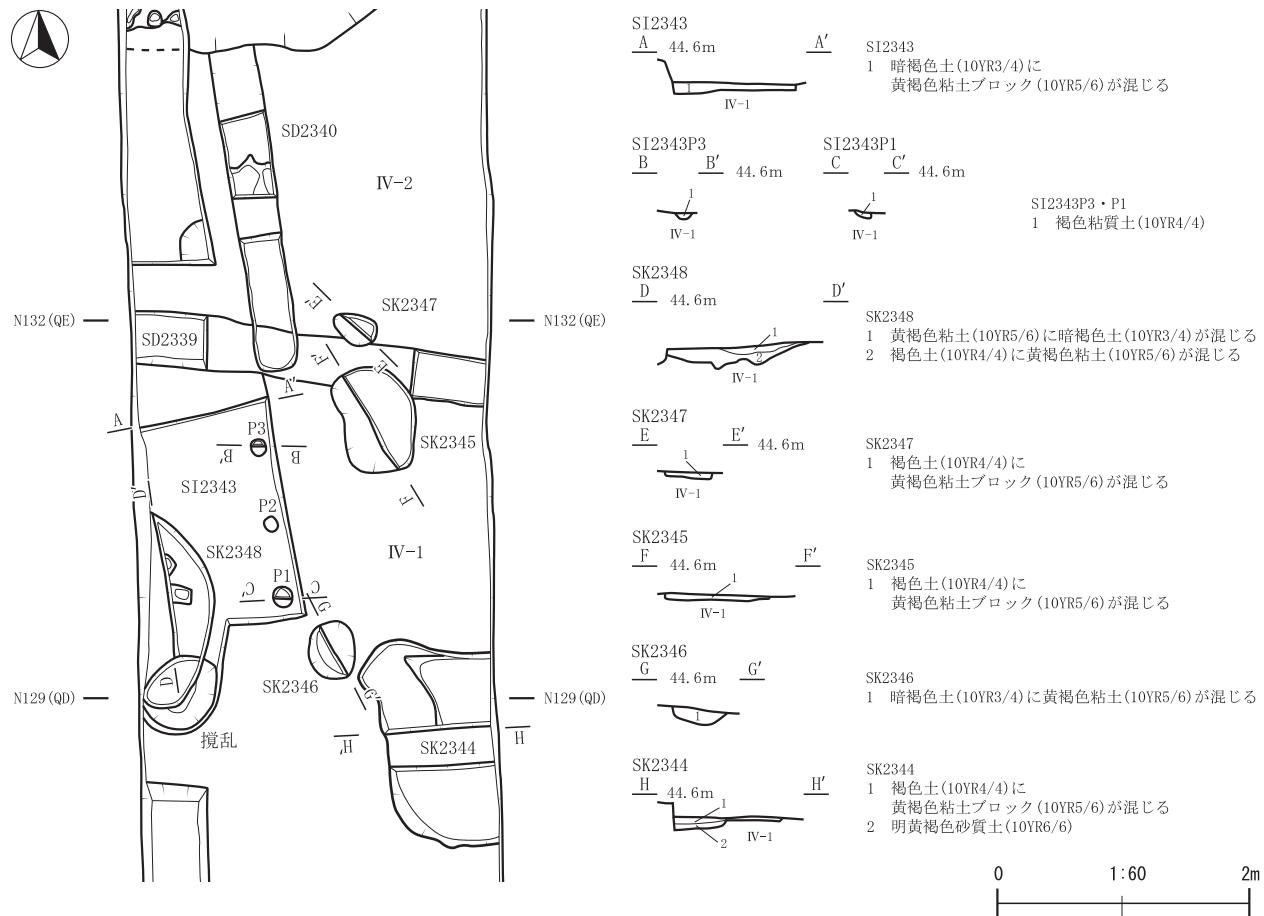
調査区北部の第IV-2層面で検出された。長軸30cm、短軸20cm、深さ5cmで、楕円形を呈する。

SD2339と重複し、これより新しい。

S K2348土坑（第17図、図版9）

調査区北部の第IV-1層面で検出された。SI2343堅穴住居跡の床面から検出された。長軸1.5m、短軸50cm、深さ15cmで、調査区外の西へ広がる。

SI2343・SX2349と重複し、SX2349より新しく、SI2343より古い。



第17図 SI2343 壇穴住居跡、SK2344～SK2348 土坑

③中世の遺構

S A2335材木壠跡（第16図、図版1・10）

調査区北部の第III-1層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅20cm、深さ10cm、長さ3.0m以上で、断面はU字状を呈し、直径8～12cmの柱痕跡が伴う。西で20度南に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木壠と考えられる。

SX2350と重複し、これより新しい。

S A2336材木壠跡（第16図、図版1・10）

調査区北部の第III-1層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅40cm、深さ10cm、長さ3.0m以上で、断面はU字状を呈し、直径10～12cmの柱痕跡が伴う。西で19度南に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木壠と考えられる。

SX2350と重複し、これより新しい。

S A2337材木壠跡（第16図、図版1・11）

調査区南部の第III-2層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅25～40cm、深さ10cm、長さ3.2m以上で、断面はU字状を呈し、直径15cmの柱痕跡が伴う。西で26度北に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木壠と考えられる。

SA2338・SX2349と重複し、これらより新しい。

S A 2338材木塀跡（第16図、図版1・11）

調査区南部の第IV-1層面で検出された東西方向の区画施設である。調査区外の東西に延びる。布掘り溝は幅25~40cm、深さ15cm、長さ3.2m以上で、断面はU字状を呈し、直径8cmの柱痕跡が伴う。西で27度北に振れる。溝内に材木を立て並べた構造の材木塀と考えられる。

SX2349・SX2350・SA2337と重複し、SX2349・SX2350より新しく、SA2337より古い。

S A 2338材木塀跡出土遺物（第18図1、図版19）

中世陶器（第18図1）：布掘り埋土からの出土である。珠洲系中世陶器大甕の口縁部破片である。外面平行叩き痕、内面無文の当て具痕が認められる。頸部内面は横方向の撫で調整をしている。

S D 2341溝跡（第16図、図版10）

調査区北部の第III-1層・IV-2層面で検出された。幅60~80cm、深さ35cm、長さ3.0m以上で調査区外の東西に延びる。西で15度南に振れる。

SD2340・SI2343・SX2350と重複し、これらより新しい。

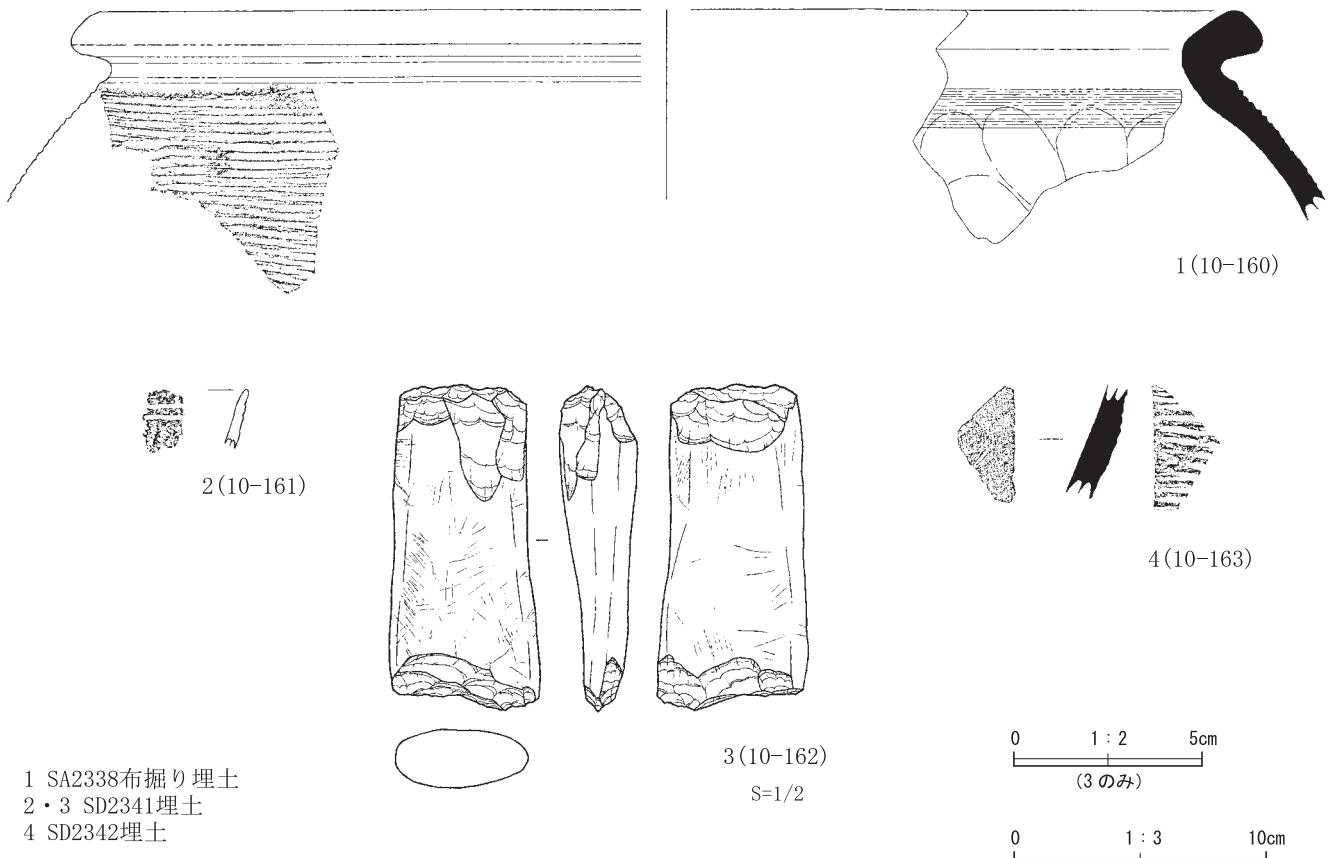
S D 2341溝跡出土遺物（第18図2・3、図版19）

弥生土器（第18図2）：鉢形土器の口縁部破片である。外面に平行沈線2条を施している。

石製品（第18図3）：安山岩製の石棒である。両端は破損している。

S D 2342溝跡（第16図、図版11）

調査区南部の第III-2層・IV-1層面で検出された。幅50~200cm、深さ35cm、長さ3.0m以上で調査区



第18図 SA2338材木塀跡、SD2341・SD2342溝跡出土遺物

外の東西に延びる。西で6度北に振れる。

S D 2342溝跡出土遺物（第18図4、図版19）

中世陶器（第18図4）：甕の体部破片である。外面平行叩き痕、内面無文の当て具痕が見られる。

S X 2350土壘（第16図、図版10）

調査区北部で検出された。土壘構築面は第V層地山面である。盛土部分は第III-1層で、厚さは50cm以上確認された。版築状の構築は認められなかった。

SA2335・SA2336・SA2338・SD2341と重複し、これらより古い。

5) B区基本層序および各層出土遺物

第106次調査地B区はかつて宅地の庭の部分にあたり、全体的に削平を受けている。

第106次調査地B区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土：現表土。黒褐色土(10YR2/3)。調査地全体を覆う。

第II層 造成土：近世～近現代の造成土。第II-1層（造成土：褐色土(10YR4/6)に黄褐色土(10YR5/6)が混じる）、第II-2層（造成土：暗褐色土(10YR3/3)）、第II-3層（近世造成土：にぶい黄褐色土(10YR4/3)）、第II-4層（近世造成土：褐色土(10YR4/3)）がある。

第II-1層は調査地全体に、第II-2層は調査区北部のSX2350土壘跡の上部にのみ、第II-3層・II-4層は調査区南部にのみ分布する。

第III層 中世整地層：明確な中世出土遺物はないが、中世出土遺物を伴うSD2342溝跡、中世遺構と考えられるSA2335・SA2336材木埠跡の構築面である。以下のように細分される。

第III-1層 中世整地層：褐色粘質土(10YR4/4)。SX2350土壘跡の盛土部分である。調査区北部にのみ分布する。SA2335・SA2336・SD2341が検出されている。

第III-2層 中世整地層：褐色土(10YR4/6)に黄褐色粘質土(10YR5/8)が混じる。調査区南部にのみ分布する。SA2337・SD2342が検出されている。

第IV層 古代整地層：古代の整地層でSX2349道路遺構を構成する造成土である。以下のように細分される。

第IV-1層 古代整地層（道路造成土）：SX2349道路遺構を構成する硬化面である。南北に約12m分布する。版築状構造を示し、次のように細分される。A：黄褐色土(10YR5/6)、A-2：黄褐色土(10YR5/6)ににぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)が混じる、B：にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)、B-2：にぶい黄褐色砂質土(10YR5/3)に黄褐色土(10YR5/6)が混じる、C：褐色砂質土(10YR4/6)に暗褐色土ブロック(10YR3/4)が混じる、D：褐色砂質土(10YR4/6)に暗褐色土ブロック(10YR3/4)が多く混じる、E：明褐色土(7.5YR5/6)。

SA2338・SD2339・SI2343・SK2345・SK2346・SK2348が検出されている。

第IV-2層 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/4)。SD2339より北側、SD2341より南側にのみ分布する。SD2340が検出されている。

第V層 地山粘土層：黄褐色粘土(10YR5/6)。SX2350の構築面である。

第VI層 地山砂礫層：黄褐色砂質土(10YR5/6)

各層出土遺物

第I層 出土遺物（第19図1～17、第20図1、図版19・20）

弥生土器（第19図1～8・11）：1～4は鉢形土器、5・11は甕形土器、6～8は壺形土器である。1は口縁部破片で、口縁部に3条の沈線を一単位とした連弧文を施し、外面に刷毛目調整を残している。2は口縁部破片で、外面に口縁部横走沈線3条と縄文原体LRの縄文を、内面に横走沈線3条を施している。3は口縁部破片で、波状口縁で口縁部内外面に2条の沈線を一単位とした連弧文を施し、外面口縁部に縄文原体LRの縄文を施している。4は口縁部破片で、縄文原体LRの縄文を施し、菱形文を施している。また、菱形文の間に列点を施している。5は口縁部破片で、外面口縁部に縄文原体LRの縄文を施し、縦方向の刷毛目調整後、横走沈線1条を施している。6は口縁部破片で、外面頸部沈線2条を施し、ミガキ調整を施している。内面刷毛目調整後ミガキ調整を施している。7は肩部破片で、外面菱形の区画に縄文原体LRの縄文を充填している。8は頸部破片で外面沈線2条、内外面横方向のミガキ調整を施している。11は撓乱出土である。波状口縁で、外面口縁部縄文原体LRの縄文施文の後、縦方向の刷毛目調整、横方向のミガキ調整、横走沈線3条を施している。内面は横方向の刷毛目調整後、横方向のミガキ調整を施している。

中世陶器（第19図9）：瀬戸・美濃系中世陶器瓶子の体部破片である。粘土紐輪積み成形である。

磁器（第19図10）：染付輪花皿で、西洋コバルトを用いている。

瓦（第20図1）：一枚作りの平瓦で凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められ、灰色、硬質で焼成堅緻である。

第II層 出土遺物（第19図12～19、図版19・20）

第II-1層 出土遺物（第19図12、図版19）

中世陶器（第19図12）：珠洲系中世陶器甕の体部破片である。外面平行叩き痕、内面無文の当て具痕が認められる。

なお、第II-1層からはこの他にガラス片などの現代の遺物が出土している。

第II-2層 出土遺物（第19図13～15、図版19）

弥生土器（第19図13～15）：13・14は鉢形土器、15は壺形土器の破片である。13は口縁部破片で、外面に重菱形文を施している。14は底部破片で、外面縄文原体LRの縄文、内面は刷毛目調整が施されている。15は体部破片で、外面沈線2条とミガキ調整、内面は横方向の刷毛目調整が施されている。

なお、第II-2層からはこの他にガラス片などの現代の遺物が出土している。

第II-3層 出土遺物（第19図16～19、図版20）

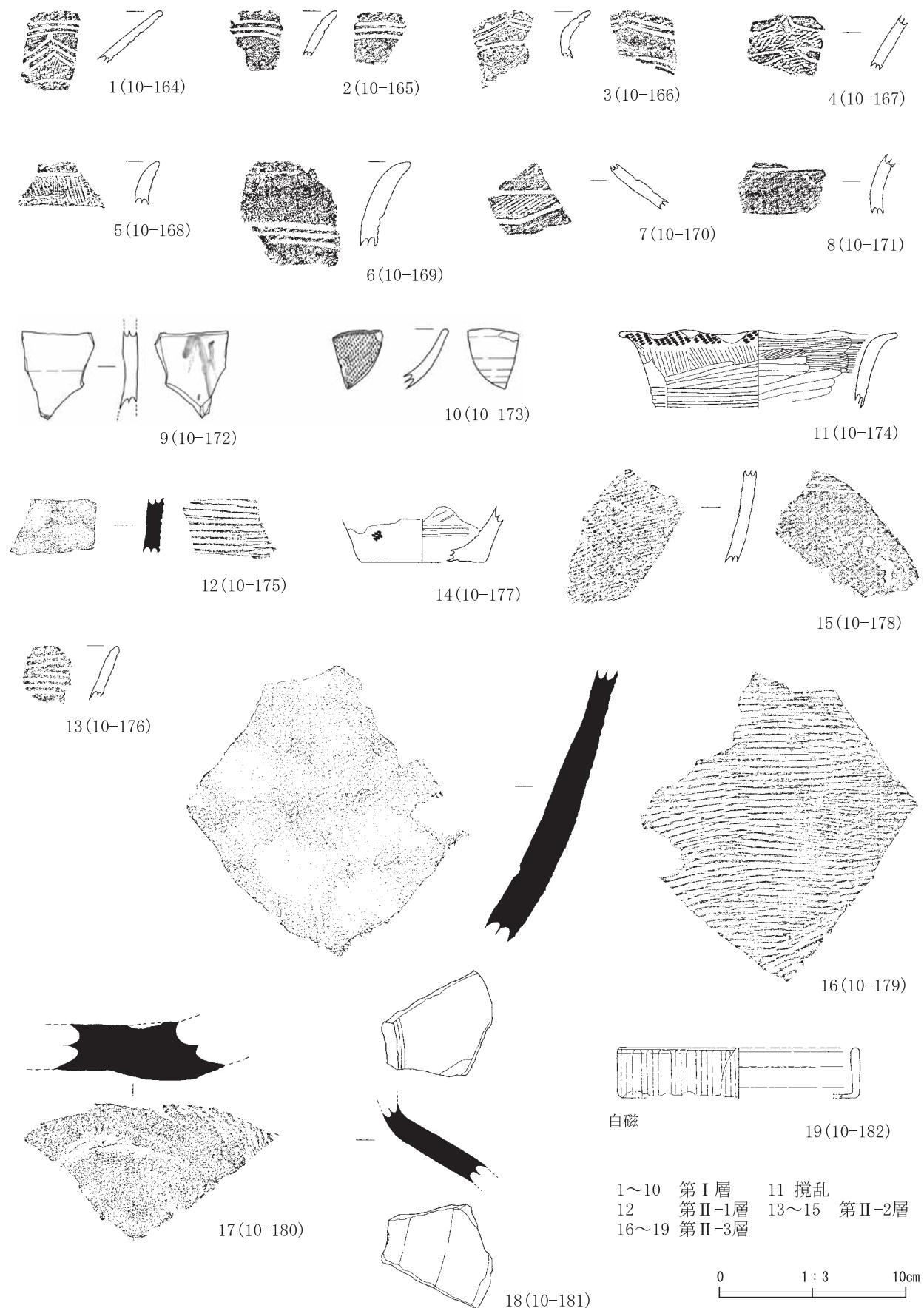
中世陶器（第19図16～18）：16は珠洲系中世陶器甕の体部破片で、外面平行叩き痕、内面無文の当て具痕が認められる。17は珠洲系中世陶器大甕の底部破片で、底面外面は砂の付着、外面体部下端には平行叩き痕が認められる。18は国産瓷器系陶器壺の肩部破片である。

磁器（第19図19）：白磁合子で、底面無釉である。

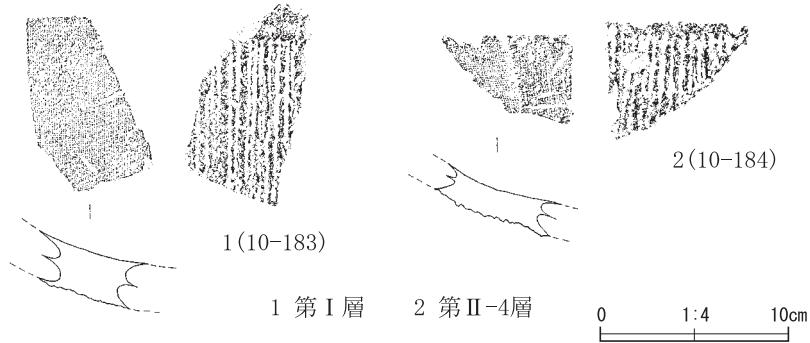
第II-4層 出土遺物（第20図2、図版20）

瓦（第20図2）：一枚作りの平瓦で、凸面縄目の叩き痕、凹面布目圧痕が認められ、灰色、硬質で焼成堅緻である。凸面に砂の付着が多く認められる。

なお、第II-4層からはガラス片など現代の遺物が出土している。



第19図 第106次調査地B区第I～II-3層出土遺物



第20図 第106次調査地B区第I・II-4層出土瓦

6) C区検出遺構と出土遺物

C区では、溝跡1条、築地塀跡1基、土取り穴3基が発見された。いずれも古代遺構であると考えられる。

S D2351溝跡（第21図、図版12）

調査区東側の第III層地山面で検出された。幅50～120cm、深さ10～30cm、長さ4.0m以上で、調査区外の南北に延びる。断面は皿状を呈し、北で7度東に振れる。

SG2354と重複し、これより新しい。

S D2351溝跡出土遺物（第23図1、図版20）

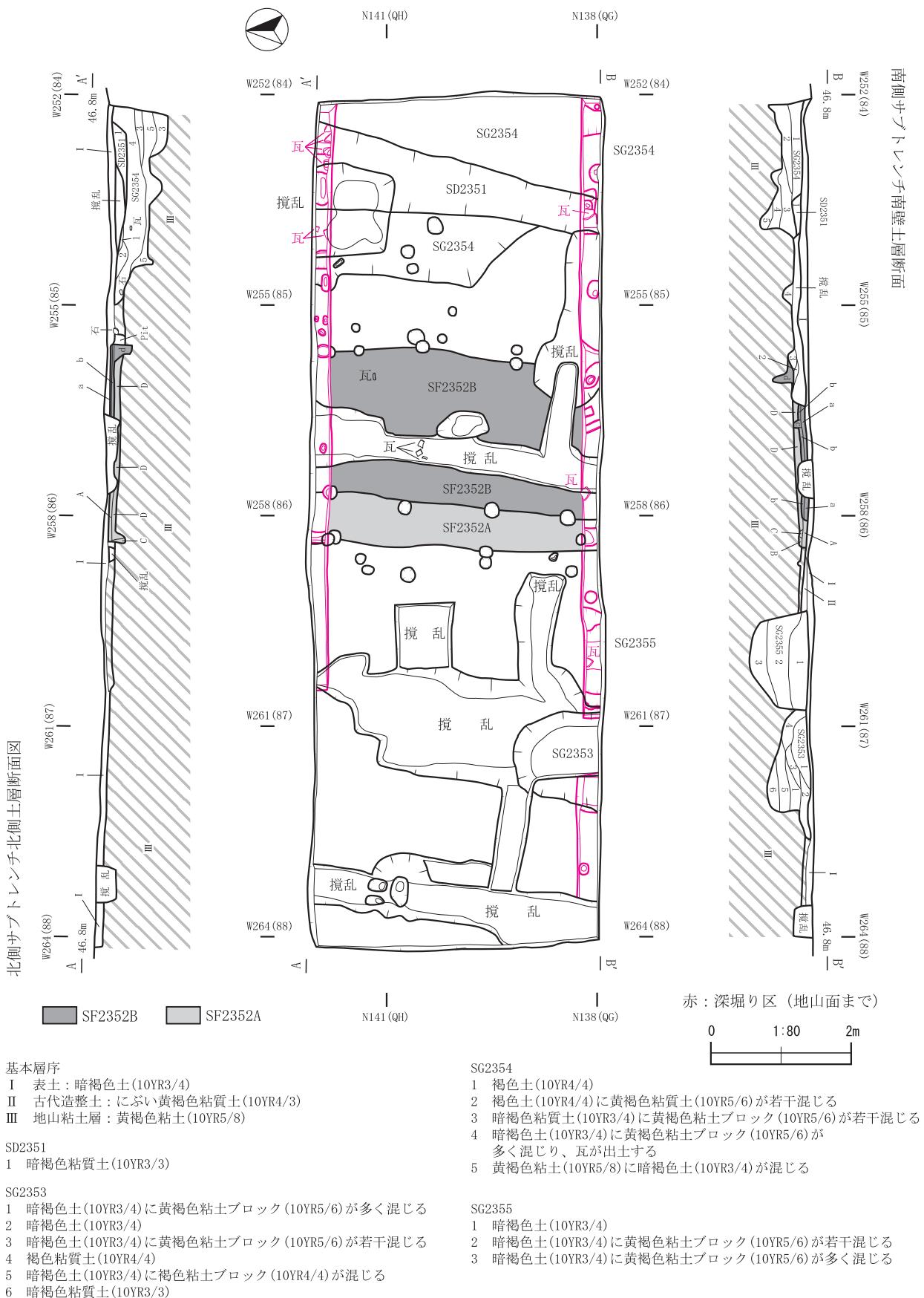
須恵器（第23図1）：甕の体部破片である。外面平行叩き痕、内面平行の当て具痕が認められる。

S F2352A・B築地塀跡（第21・22図、図版2・12・13）

調査区中央部の第III層面地山で検出された南北方向の区画施設である。北で3度東に振れる。平面プランおよび土層断面の観察から SF2352築地塀跡は新旧2時期の変遷があり、最初に構築された SF2352A と、新しい SF2352B に区分される。

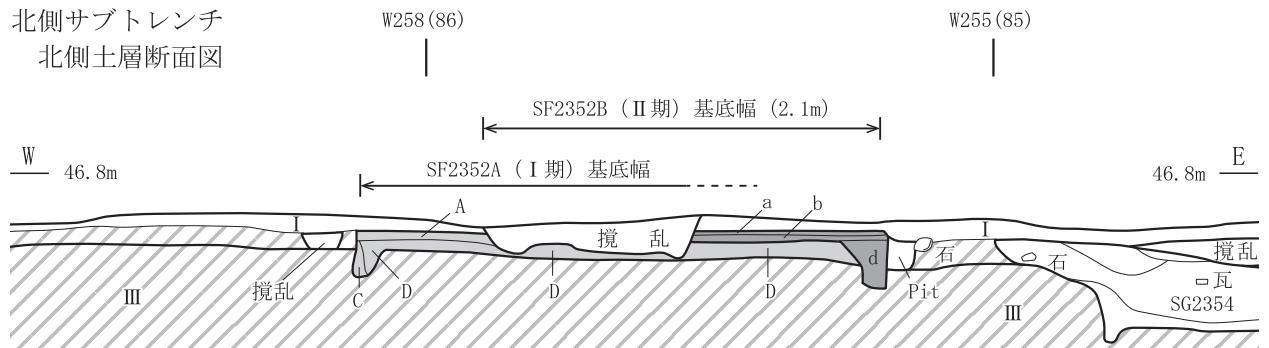
SF2352A 築地塀跡は、第22図の土層断面でいえば、積み土はAの部分である。北側および南側サブトレーナーの断面において、SF2352A 築地塀跡の西端が検出されているが、西端は幅約20cm、深さ5～15cmの深く掘り下げた部分がある（B・C）。この掘り下げ部分を仮に「基底部端掘り下げ部分」と呼称しておく。特にCの暗褐色粘土の部分は幅約6cmの板状のものがあった痕跡と考えられる。また、これらの掘り下げ部分の東側には、約10～20cm、第III層の地山面を全体的に溝状に掘り込んでいる（D部分）。このDに相当する「基底部掘り込み溝」の東西の幅は、北側サブトレーナー部分で、2.6m以上に及んでおり、通常の築地塀の基底幅2.1mよりも広く確認されている。E・F部分は寄柱の埋土と考えられる。以上、SF2352A 築地塀跡の断面の観察により、構築順序は次のように考えられる。まず、地山面を全体的に溝状に掘り込む（基底部掘り込み溝、D）、この際、築地塀の端にあたる部分はさらに深く掘り下げ板状と想定される構造物を据えている（C）。なお、この板状と推定される構造物はそのまま埋められていたものと考えられる（B）。こうした基底部掘り込み溝および基底部端掘り下げ部分を構築した後に、築地塀積み土（A）が積まれ、寄柱が据えられる（E・F）。

SF2352B 築地塀跡は、第22図の土層断面でいえば、積み土がa・bの部分で2段の版築が認められた。積み土の端には寄柱と考えられる小ピットがみられる（d）。北側サブトレーナー南側断面図のP1からP2のピット芯々で2.1mを測ることから、SF2352B の基底幅は2.1mであると考えられる。SF2352B 築

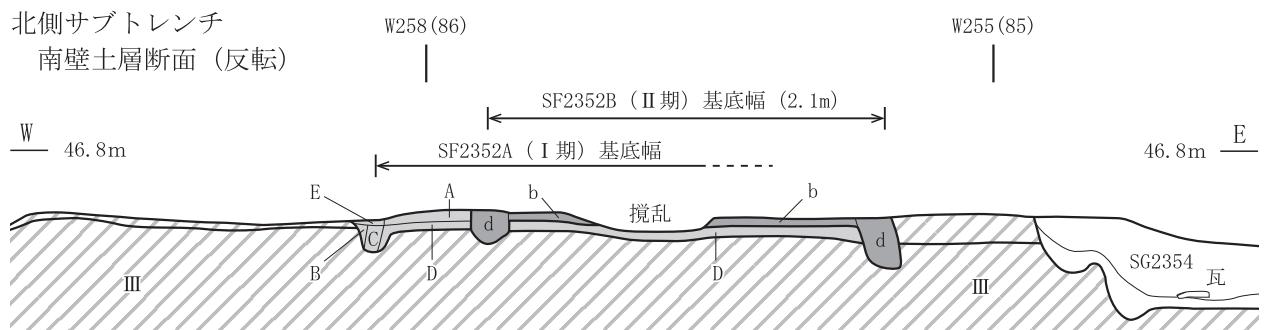


第21図 第106次調査地C区遺構全体図

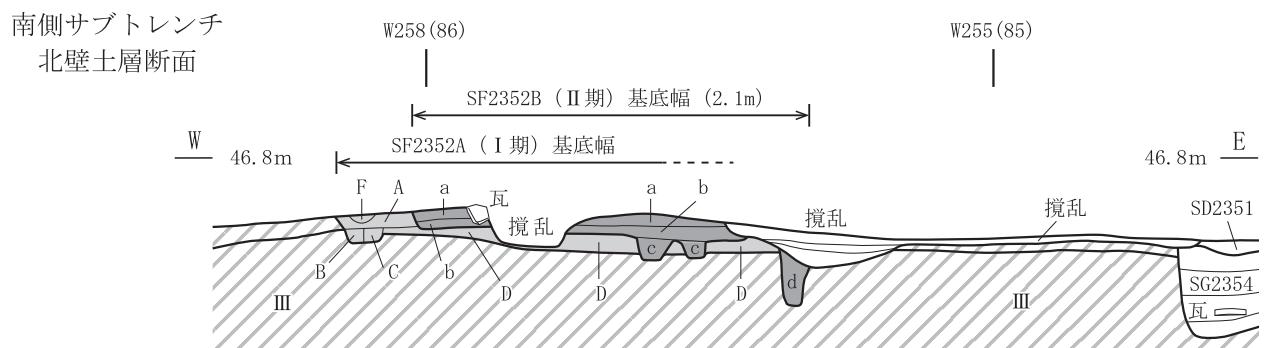
北側サブトレンチ
北側土層断面図



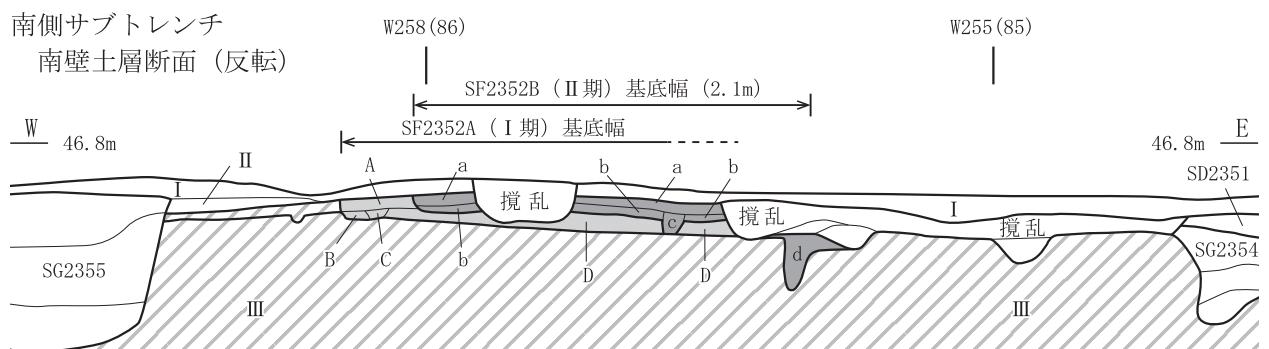
北側サブトレンチ
南壁土層断面 (反転)



南側サブトレンチ
北壁土層断面



南側サブトレンチ
南壁土層断面 (反転)



SF2352B

- a 積み土：暗褐色粘質土(10YR3/3)
- b 積み土：褐色粘質土(10YR4/4)
- c 灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
- d 寄柱埋土：褐色粘土(10YR4/6)

SF2352A

SF2352A

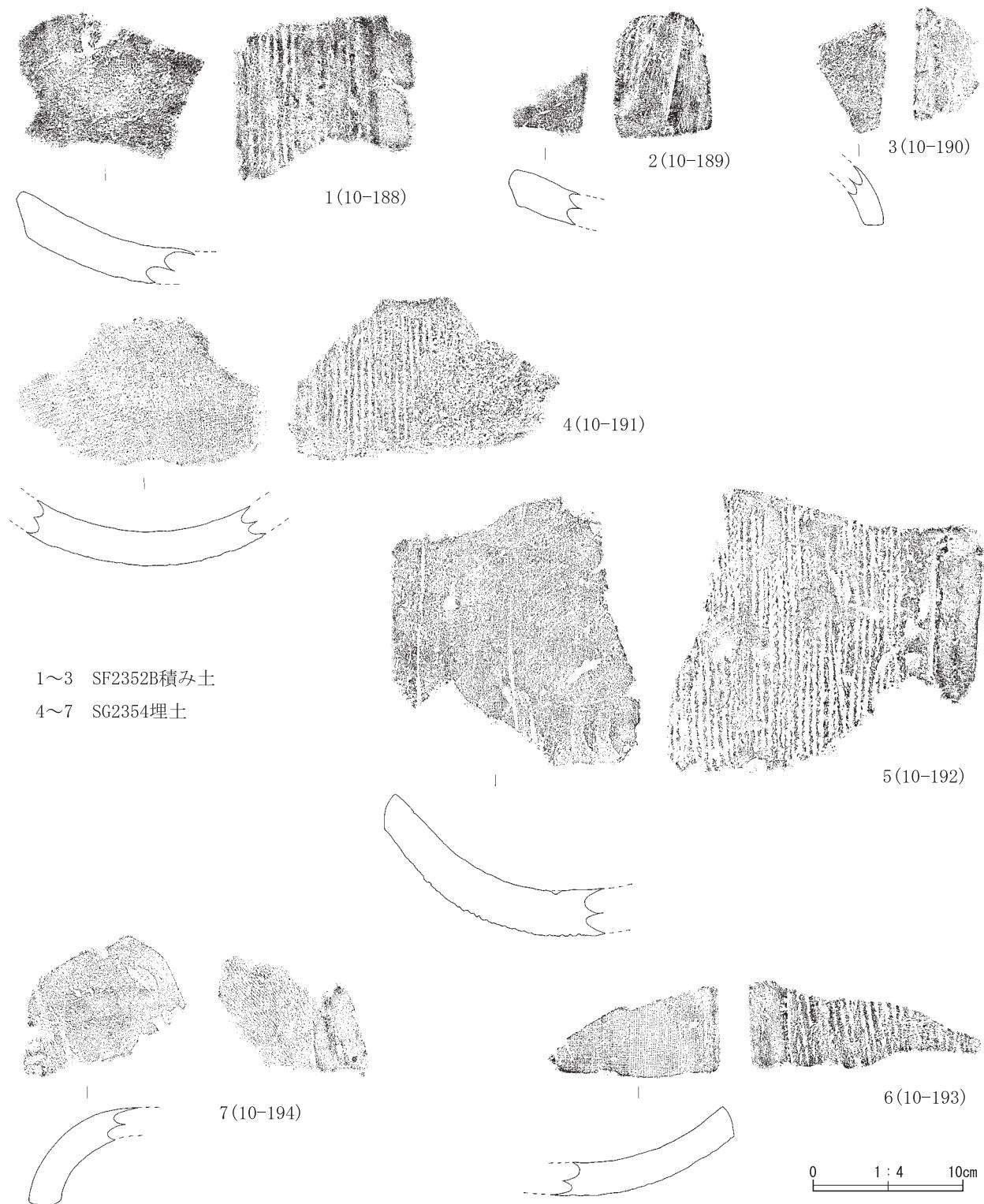
- A 積み土：暗褐色粘質土(10YR3/4)
- B 基底部端掘り込み埋土：黄褐色粘土(10YR5/6)に褐色粘土(10YR4/6)が混じる
- C 基底部端掘り込み埋土：暗褐色粘土(10YR3/3)
- D 基底部掘り込み溝埋土：黄褐色粘土(10YR5/6)に暗褐色粘質土(10YR3/4)が混じる
- E 寄柱埋土：灰黄褐色砂質土(10YR4/2)
- F 寄柱埋土：暗褐色土(10YR3/3)

0 1:40 2m

第22図 SF2352A・B 築地塀跡土層断面図



第23図 SD2351溝跡、SG2354土取り穴出土遺物



第24図 SF2352B築地坪跡、SG2354土取り穴出土瓦

地堀構築の際は、新たに基底部掘り込み溝は構築されず、先行する SF2352A 築地堀跡の基底部掘り込み溝を利用して積み土が開始されており、その後、寄柱を据えている。SF2353B 築地堀跡は、先行する SF2353A 築地堀跡よりも40～60cm（平均して約50cm）、東側の城内側に寄って構築されている。

S F2352B 築地堀跡出土遺物（第24図1～3、図版21）

瓦（第24図1～3）：いずれも積み土からの出土で、摩耗している。1・2は一枚作りの平瓦で、凸面縄目の叩き痕、凹面布目圧痕が認められ、灰白色、軟質、焼成やや不良である。3は丸瓦で、凸面撫で調整、凹面布目圧痕が認められる。灰色、軟質、焼成やや不良である。分割沈線が認められる。

S G2353土取り穴（第21図、図版12・13）

調査区南西部の第Ⅲ層地山面で検出された。直径1.2m以上、深さ60cmの土取り穴で、調査区南側へ広がる。

SG2355と重複し、これより古い。

S G2354土取り穴（第21図、図版12・13）

調査区東側の第Ⅲ層地山面で検出された。直径2.5m以上、深さ80cmの土取り穴で、調査区南北、東側へ広がる。埋土中間部分（埋土4）から瓦が多数出土している。

SD2351と重複し、これより古い。

S G2354土取り穴出土遺物（第23図2・3、第24図4～7、図版20・21）

土師器（第23図2・3）：2は口縁部破片である。非ロクロ成形、口縁部外面に縦方向の刷毛目調整後、横方向のナデ調整を施している。3は頸部破片である。非ロクロ成形で、頸部に段を有し、横方向のナデ調整を施している。

瓦（第24図4～7）：いずれも埋土4からの出土である。4～6は一枚作りの平瓦である。いずれも凸面縄目の叩き痕、凹面布目圧痕が認められる。4は灰白色、軟質、焼成やや不良で、摩滅している。5は青灰色、硬質、焼成堅緻である。凸面に砂の付着が多い。糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は右下から左上である。6は灰色、軟質、焼成良好である。糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は下から上である。7は丸瓦で、凸面に撫で調整、凹面に布目圧痕が認められる。灰白色、軟質で焼成不良、摩耗している。

S G2355土取り穴（第21図、図版12・13）

調査区南西部の第Ⅱ層面で検出された。直径1.5m以上、深さ80cmの土取り穴で、調査区南側へ広がる。

SG2353と重複し、これより新しい。

7) C区基本層序および各層出土遺物

第106次調査地C区はかつて住宅が建っており、上部は削平を受けている。

第106次調査地C区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第Ⅰ層 表土：現地表面。暗褐色土(10YR3/4)。調査地全体を覆う。

第Ⅱ層 古代整地層：古代整地層。にぶい黄褐色粘質土(10YR4/3)。調査区南中央部のみにしか分布しない。ほとんどは宅地造成の際に削平されてしまったものと考えられる。SG2355が検出されている。

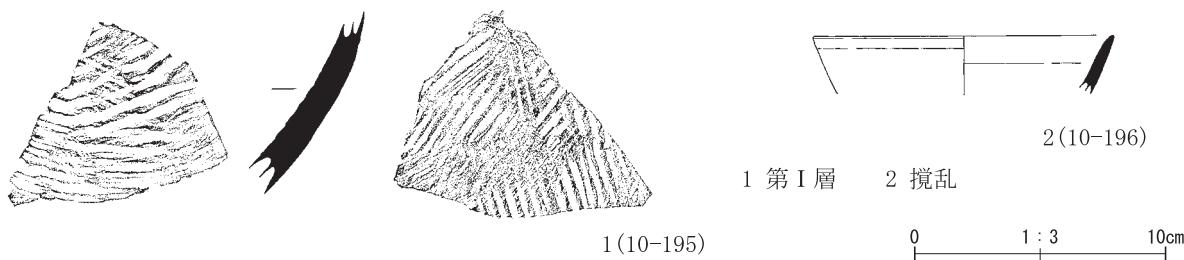
第Ⅲ層 地山粘土層：黄褐色粘土(10YR5/8)。SD2351、SF2352A・B、SG2353、SG2354が検出されている。

各層出土遺物

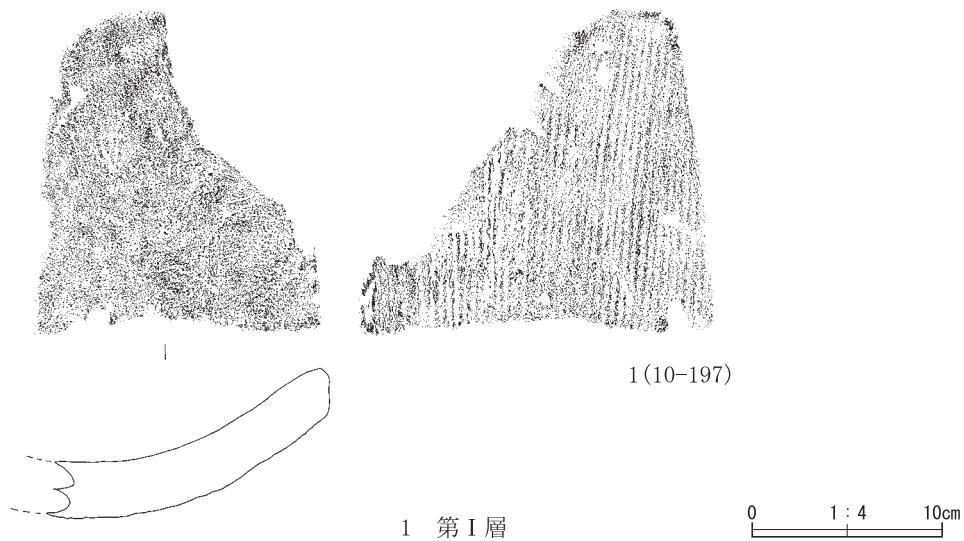
第I層 出土遺物（第25・26図、図版21）

須恵器（第25図1・2）：1は甕の体部破片である。外面平行叩き痕、内面平行当て具痕が認められる。2は攪乱出土で、壺の口縁部破片である。

瓦（第26図1）：一枚作りの平瓦で、凸面に縄目の叩き痕がみられる。凹面は摩耗により不明である。黒色（いぶし）で、軟質、焼成やや不良である。



第25図 第106次調査地C区第I層出土遺物



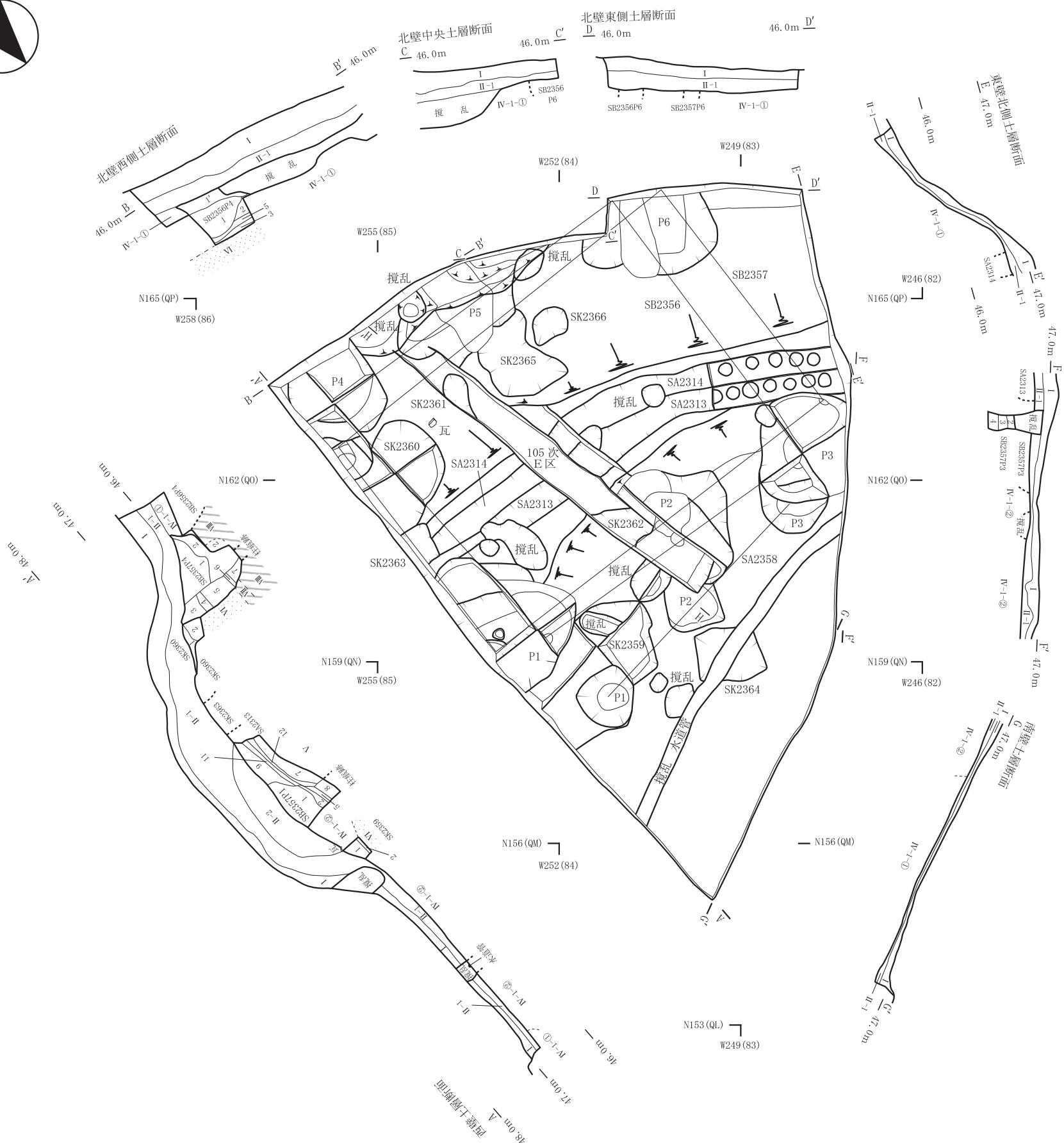
第26図 第106次調査地C区第I層出土瓦

8) D区検出遺構と出土遺物

D区では、掘立柱建物跡2棟、材木塀跡2条、柱列跡1列、築地塀跡1基、土坑8基が発見された。いずれも古代遺構であると考えられる。

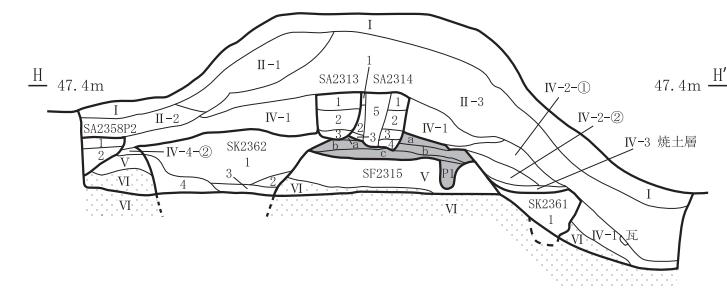
S B2356掘立柱建物跡（第27～29図、図版2・14・15）

調査区中央の第IV-1-①・②層面で検出された。梁間1間（5.2m）、桁行2間（2.6m+2.6m）の北東－南西棟の掘立柱建物である。建物の方位は桁行南側柱筋が東で北に35度振れる。柱掘り方は直径約1.5mの歪んだ円形であり、柱痕跡は約32cmで、抜き取りを受けている。



第27図 第106次調査地D区遺構全体図

第105次調査地E区西壁土層断面



基本層序

- I 表土：にぶい黄褐色土(10YR4/3)
- II-1 造成土：にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)と明黄褐色粘土(10YR6/6)からなる
- II-2 造成土：暗褐色粘土質土(10YR3/4)
- II-3 造成土：褐色粘質土(10YR4/4)
- IV-1-① 古代整地層：にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)
- IV-1-② 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/4)に黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる
- IV-2-① 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/6)に黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる
- IV-2-② 古代整地層：黄褐色粘土(10YR5/6)
- IV-3 古代整地層：黒褐色土(10YR2/3)に部分的に赤褐色土(5YR4/8)混じる
- IV-4-① 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/6)を主体とし褐色砂(10YR4/4)が混じる
- IV-4-② 古代整地層：暗褐色砂質土(10YR3/3)
- V 旧表土：黒褐色砂質土(10YR2/3)
- VI 地山飛砂層：明黄褐色砂(10YR6/6)
- VII 地山腐植土層：黒褐色粘土(10YR2/2)
- VIII 地山粘土層：黄褐色粘土(10YR5/6)

SK2359 SK2360
1 暗褐色砂質土(10YR3/4) 1 暗褐色粘質土(10YR3/4)
2 褐色砂質土(10YR4/4) 2 褐色粘質土(10YR4/4)

SB2357P1
1 挖き取り埋土：黄褐色粘質土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)が混じる
2 挖き取り埋土：暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
5 挖き取り埋土：暗褐色粘質土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が若干混じる
8 柱痕跡：暗褐色土(10YR3/4)に褐色粘土ブロック(10YR4/6)と黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
7・9 挖り方埋土：暗褐色砂質土(10YR3/4)に黄褐色土(10YR5/6)と炭化物が混じる
11 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に炭化物と黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が若干混じる
12 挖り方埋土：黄褐色粘土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)と炭化物が混じる

SB2357P4
1 挖き取り埋土：暗褐色粘質土(10YR3/6)
2 挖き取り埋土：暗褐色砂質土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)と炭化物が混じる
3 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
4 挖り方埋土：黄褐色粘質土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)が混じる
5 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)と黒褐色粘土ブロック(10YR2/3)が混じる
6 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
7 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に褐色粘土ブロック(10YR4/6)と黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる

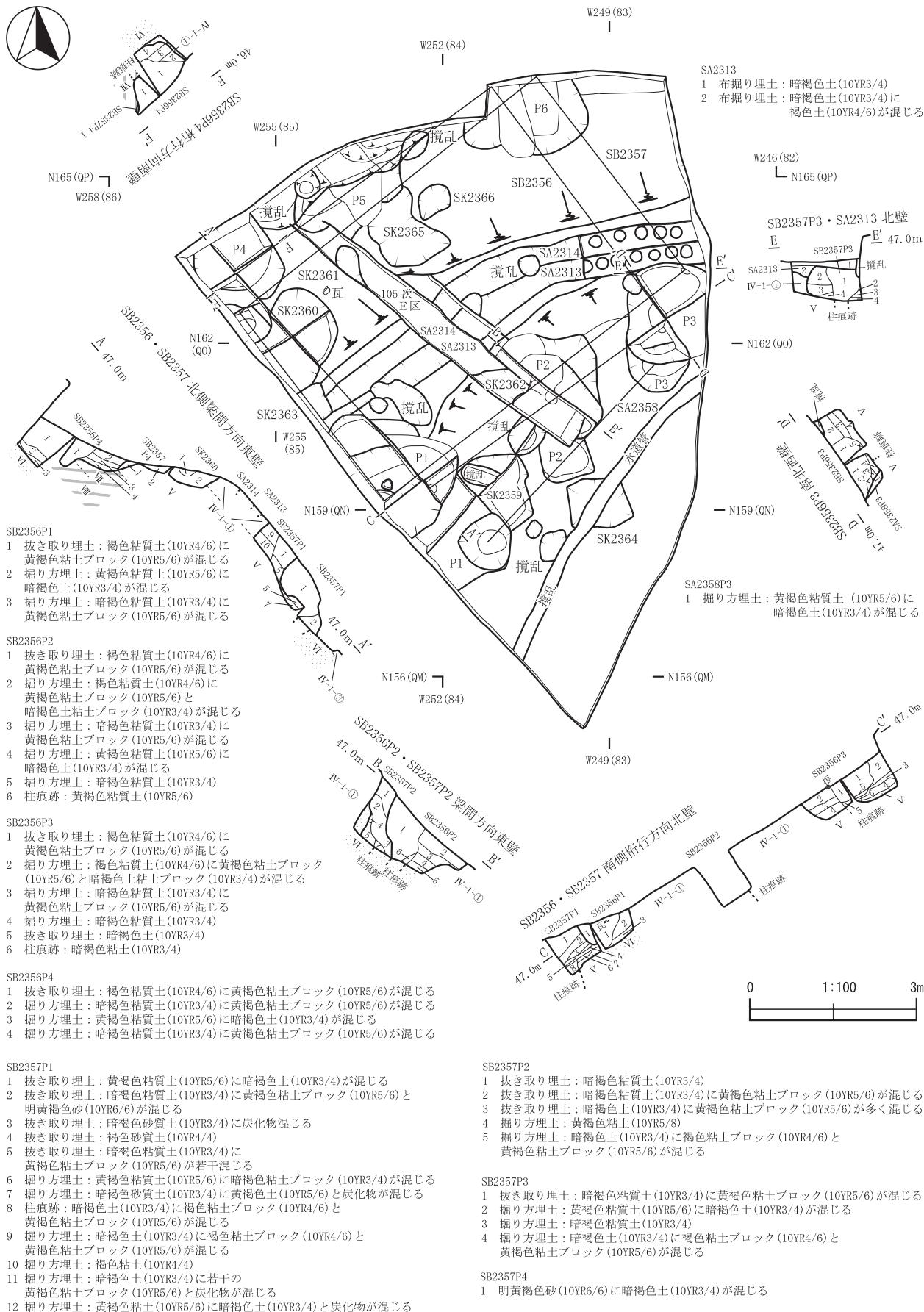
SB2356P4
1' 挖き取り埋土：褐色粘質土(10YR4/6)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)と暗褐色土(10YR3/4)が若干混じる
1 挖き取り埋土：褐色粘土(10YR4/6)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
2 挖り方埋土：暗褐色粘質土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
3 挖り方埋土：黄褐色粘土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)が混じる
5 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に褐色粘土ブロック(10YR4/6)と黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる

SB2357P3
1 挖き取り埋土：暗褐色粘質土(10YR3/4)に黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる
2 挖り方埋土：黄褐色粘質土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)が混じる
3 挖り方埋土：暗褐色粘土(10YR3/4)
4 挖り方埋土：暗褐色土(10YR3/4)に褐色粘土ブロック(10YR4/6)と黄褐色粘土ブロック(10YR5/6)が混じる

SK2362
1 褐色粘質土(10YR4/6)ににぶい黄褐色粘土(10YR5/4)がブロック状に混じる
2 褐色砂質土(10YR4/4)に黒褐色砂質土(10YR2/2)と黄褐色砂(10YR5/6)が少量混じる
3 褐色粘質土(10YR4/6)
4 褐色砂質土(10YR4/6)と暗褐色砂(10YR3/3)からなる

SK2361
1 褐色粘質土(10YR4/6)を主体とし褐色砂(10YR4/4)が混じる

0 1:80 4m



第28図 SB2356・SB2357掘立柱建物跡



第29図 SB2356・SB2357掘立柱建物跡検出状況

SB2357・SA2313・SA2358・SK2359・SK2365と重複し、これらより新しい。建物形態と検出位置、遺構の切り合い関係からみて、SA2313を跨ぐ檜状建物になると考えられる。

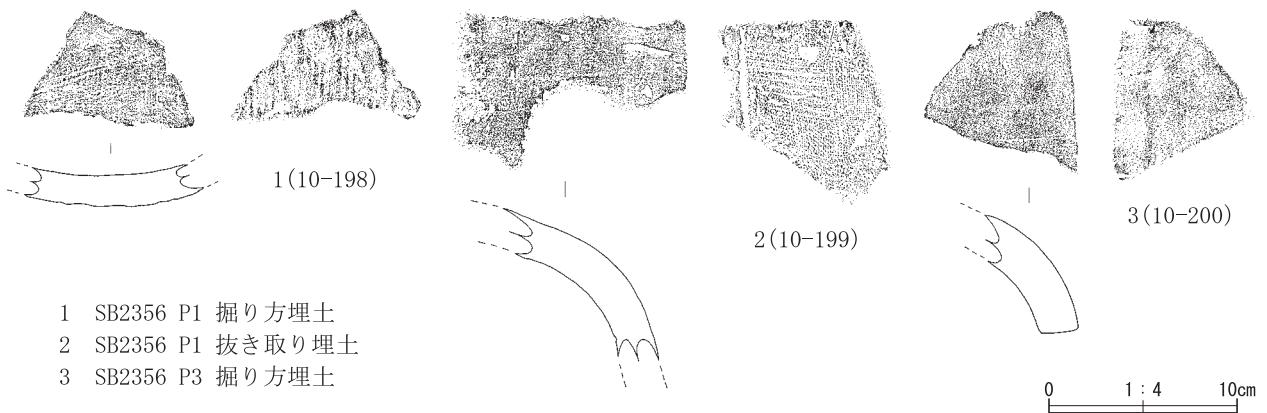
S B2356掘立柱建物跡出土遺物（第30図、図版22）

瓦（第30図1～3）：1はP1掘り方埋土、2はP1抜き取り埋土、3はP3掘り方埋土出土である。1は一枚作りの平瓦で、凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められ、灰色、軟質で焼成やや不良である。糸切り痕が確認され、広端部を上にした場合、糸切り方向は上から下である。2・3は丸瓦で、灰白色、軟質で焼成やや不良で、摩耗している。

S B2357掘立柱建物跡（第27～29図、図版2・14・15）

調査区中央の第IV-1-①・②層面で検出された。梁間1間（4.2m）、桁行2間（3.4m+3.4m）の北東—南西棟の掘立柱建物である。建物の方位は桁行南側柱筋が東で北に38度振れる。柱掘り方は直径約1.5mの歪んだ円形であり、柱痕跡は約35cmで、抜き取りを受けている。

SB2356・SA2313・SK2360と重複し、SK2360より新しく、SA2356・SA2313より古い。建物形態と検出



第30図 SB2356掘立柱建物跡出土瓦

位置、遺構の切り合い関係からみて、SA2314を跨ぐ櫓状建物になると考えられる。

S A2313材木塀跡（第27図、図版2・14）

調査区中央の第IV-1-①層面で検出された北東-南西方向の区画施設である。第105次調査地E区で検出されており、本調査で広く平面的に確認した。東で10~36度北に振れる。布掘り溝の幅は40~50cm、深さ50cm、断面はU字状を呈し、直径約15cmの柱痕跡が伴う。抜き取り痕がある。溝内に密に材木を立て並べた構造の材木列塀跡と考えられる。

SB2357・SB2356・SA2314・SF2315・SK2362・SK2363と重複し、SB2357・SA2314・SF2315・SK2362より新しく、SB2356・SK2363より古い。

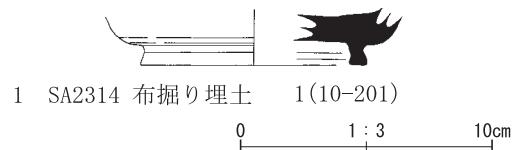
S A2314材木塀跡（第27図、図版2・14）

調査区中央の第IV-1-①層面で検出された北東-南西方向の区画施設である。第105次調査地E区で検出されており、本調査で広く平面的に確認した。東で10~38度北に振れる。布掘り溝の幅は40~50cm、深さ57cm、断面はU字状を呈し、直径約15cmの柱痕跡が伴う。抜き取り痕がある。溝内に間隔をあけて材木を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。

SA2313・SF2315・SK2363と重複し、SF2315より新しく、
SA2313・SK2363より古い。

S A2314材木塀跡出土遺物（第31図、図版22）

須恵器（第31図1）：台付壺の破片である。底部切り離しは欠損により不明である。



第31図 SA2314材木塀跡出土遺物

S A2358柱列跡（第27図、図版2・14）

調査区中央の第IV-1-①・②層面で検出された。柱掘り方は一辺約90cmの隅丸方形もしくは歪んだ円形で、柱間間隔は2.2m+2.2mである。柱筋が東で46度北に振れる。

SB2356・SK2359と重複し、SK2359より新しく、SB2356より古い。

S F2315築地塹跡（第27図）

第105次調査地E区断面で確認されていた北東－南西方向の区画施設である。第V層面を基盤として褐色粘土・黄褐色粘土・暗褐色粘土の積み土A・B・Cの3段の積み土がみられる。基底部北側にP1がみられ、直径約20cm、深さ約30cmのピット状の落ち込みがある。

SA2313・SA2314・SK2362と重複し、これらより古い。

S K2359土坑（第32図、図版16）

調査区南西部のV層面で検出された。長軸2.4m以上、短軸1.5m、深さ15～25cmの不正形を呈する。

SB2356・SA2358と重複し、これらより古い。古代の可能性が高いが、V層面検出のため古代以前の可能性もある。

S K2360土坑（第32図、図版16）

調査区北西部の第IV-1-①層面で検出された。直径約1.5m、深さ25cmの歪んだ円形を呈する。

SB2357・SK2363と重複し、これらより古い。

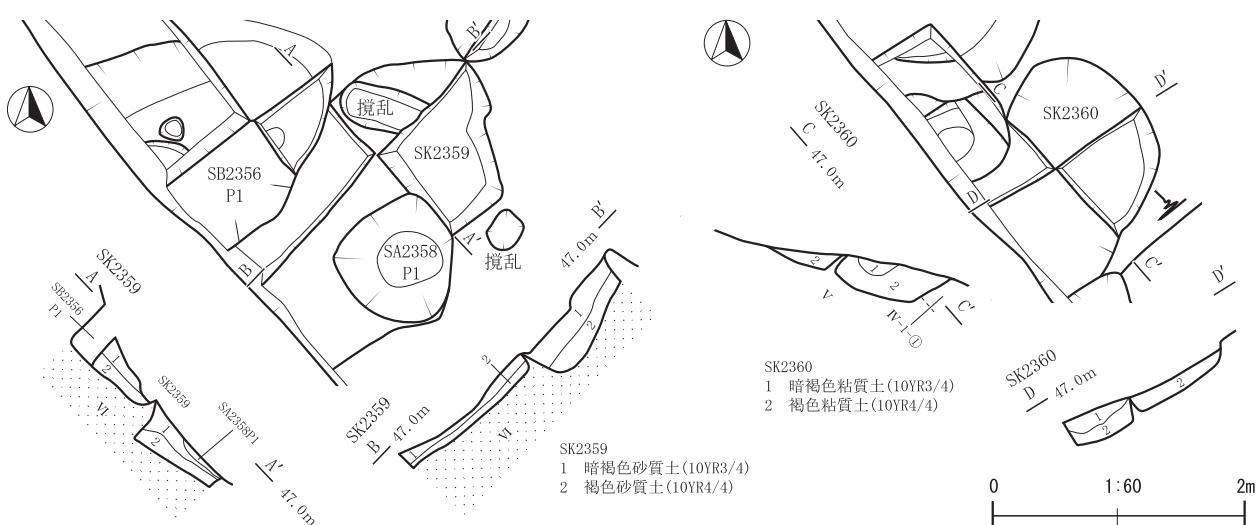
S K2361土坑（第27図、図版16）

調査区北東部の第V層面で検出された。直径90cm以上、深さ50cm以上である。第105次調査地E区のトレンチ断面での確認のため、平面形は不明である。第105次調査地E区では第IV-4-①層として認識していたが、改めて土坑であると確認した。古代の可能性が高いが、V層面検出のため古代以前の可能性もある。

S K2362土坑（第27図、図版16）

調査区中央部の第IV-4-②層面で検出された。直径2m、深さ60cm以上である。第105次調査地E区のトレンチ断面でSX2316性格不明遺構として確認されていたが、改めて土坑であると確認した。

SF2315・SA2313と重複し、SF2315より新しく、SA2313より古い。



第32図 SK2359・SK2360 土坑

S K2363土坑 (第27図、図版2)

調査区北西部の第IV-1-①層面で検出された。直径60cm以上の歪んだ円形である。

SA2313・SA2314・SK2360と重複し、これらより新しい。

S K2364土坑 (第27図、図版2)

調査区南部の第IV-1-①層面で検出された。長軸1.0m、短軸90cmの隅丸方形を呈する。

S K2365土坑 (第27図、図版2)

調査区北部の第IV-1-①層面で検出された。長軸1.3m、短軸80cmの不正形を呈する。

SB2356と重複し、これより古い。

S K2366土坑 (第27図、図版2)

調査区北部の第IV-1-①層面で検出された。長軸70cm、短軸50cmの不正形を呈する。

9) D区基本層序および各層出土遺物

第106次調査地D区は現況で、SA2313・SA2314・SF2315の部分が土手状に盛り上がっており、これを頂点として南北に傾斜する地形である。特に北側調査区外は急傾斜地となっている。第106次調査地D区の基本層序をまとめると以下のようになる。なお、本調査区は第105次調査地E区にあわせ層序名をつけている。

第I層 表土：現表土。にぶい黄褐色土(10YR4/3)。調査区全体を覆う。

第II層 造成土：近世から現代にかけての造成土。第II-1層（造成土：にぶい黄褐色粘土(10YR5/3)に明黄褐色粘土(10YR6/6)が混じる）と第II-2層（造成土：暗褐色粘質土(10YR3/4)）、第II-3層（造成土：褐色粘質土(10YR4/4)）に細分される。第106次D区では第II-1層と第II-2層のみが確認された。第II-2層には拳大の礫が多く混じる。

第IV層 古代整地層：古代の整地層である。下記のように細分される。

第IV-1層 古代整地層である。なお、第105次調査地E区の時は、第IV-1層でまとめて扱っていたが、第106次調査D区では①と②に細分した。

第IV-1-①層 古代整地層：にぶい黄褐色粘土(10YR4/3)。層中に含まれるにぶい黄褐色粘土はSF2315築地塙跡の崩壊土が含まれていると考えられる。SB2356・SB2357・SA2313・SA2314・SA2358・SK2360・SK2361・SK2363～2366が検出されている。

第IV-1-②層 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/4)に黄褐色粘質土(10YR5/6)が混じる。層中に含まれるにぶい黄褐色粘土はSF2315築地塙跡の崩壊土が含まれていると考えられる。

第IV-2層 古代整地層：下記のように細分される。これらの層中に含まれる粘土・粘質土はSF2315築地塙跡の崩壊土が含まれていると考えられる。第105次調査E区の断面のみで確認。

第IV-2-①層 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/6)に黄褐色粘土(10YR5/6)が混じる。第105次調査E区の断面のみで確認。

第IV-2-②層 古代整地層：黄褐色粘土(10YR5/6)。第105次調査E区の断面のみで確認。

第IV-3層 古代整地層：黒褐色土(10YR2/3)に部分的に赤褐色土(5YR4/8)が混じる。炭化物が混じる焼土層である。第105次調査E区の断面のみで確認。

第IV-4層 古代整地層：下記のように細分される。第105次調査E区の断面のみで確認。

第IV-4-①層 古代整地層：褐色粘質土(10YR4/6)を主体とし褐色砂(10YR4/4)が混じる。

第IV-4-②層 古代整地層：暗褐色砂質土(10YR3/3)。SK2362が検出されている。

第V層 旧表土：黒褐色砂質土(10YR2/3)。SF2315・SK2359が検出されている。

第VI層 地山飛砂層：明黄褐色砂(10YR6/6)。

第VII層 地山腐植土層：黒褐色粘土(10YR2/2)。

第VIII層 地山粘土層：黄褐色粘土(10YR5/6)。

各層出土遺物

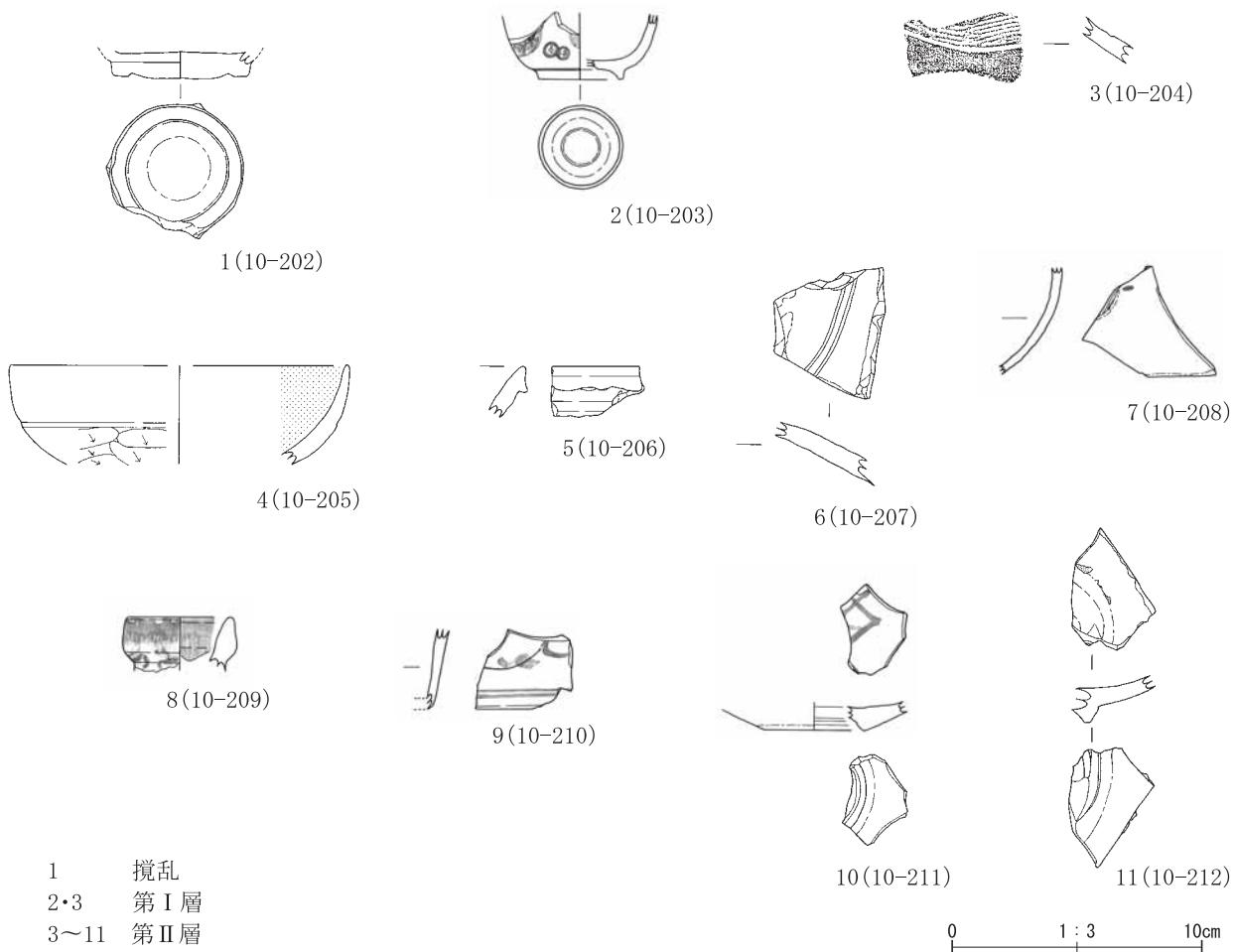
第I層 出土遺物 (第33図1～3、第34図1、図版22)

中世陶器 (第33図1)：搅乱出土である。瀬戸・美濃系中世陶器の平碗である。高台内の削り込みが浅い輪高台である。

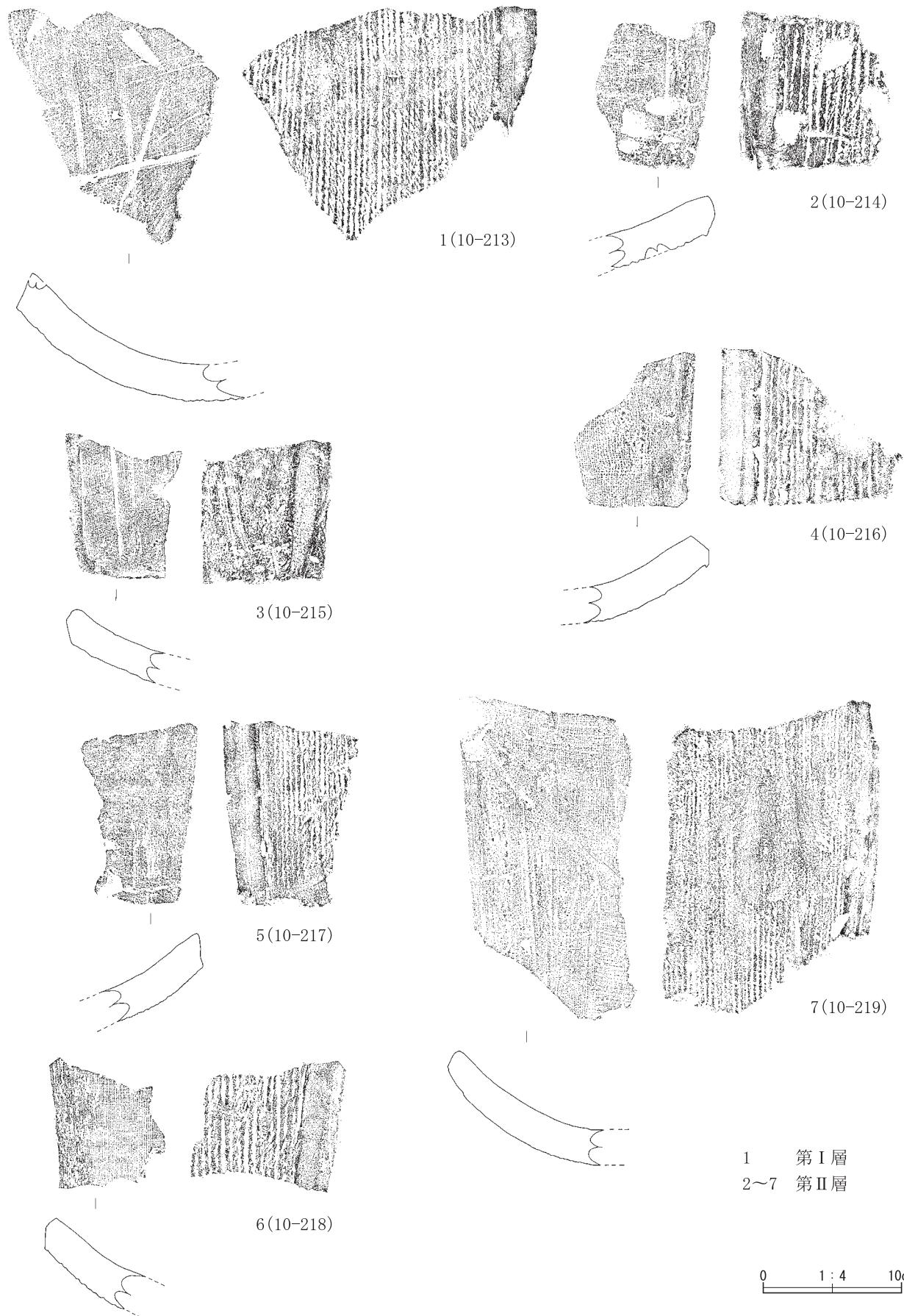
磁器 (第33図2)：肥前系磁器の染付小杯である。

弥生土器 (第33図3)：壺の肩部破片である。変形工字文が施文されていると考えられる。縄文原体LRの縄文を充填している。

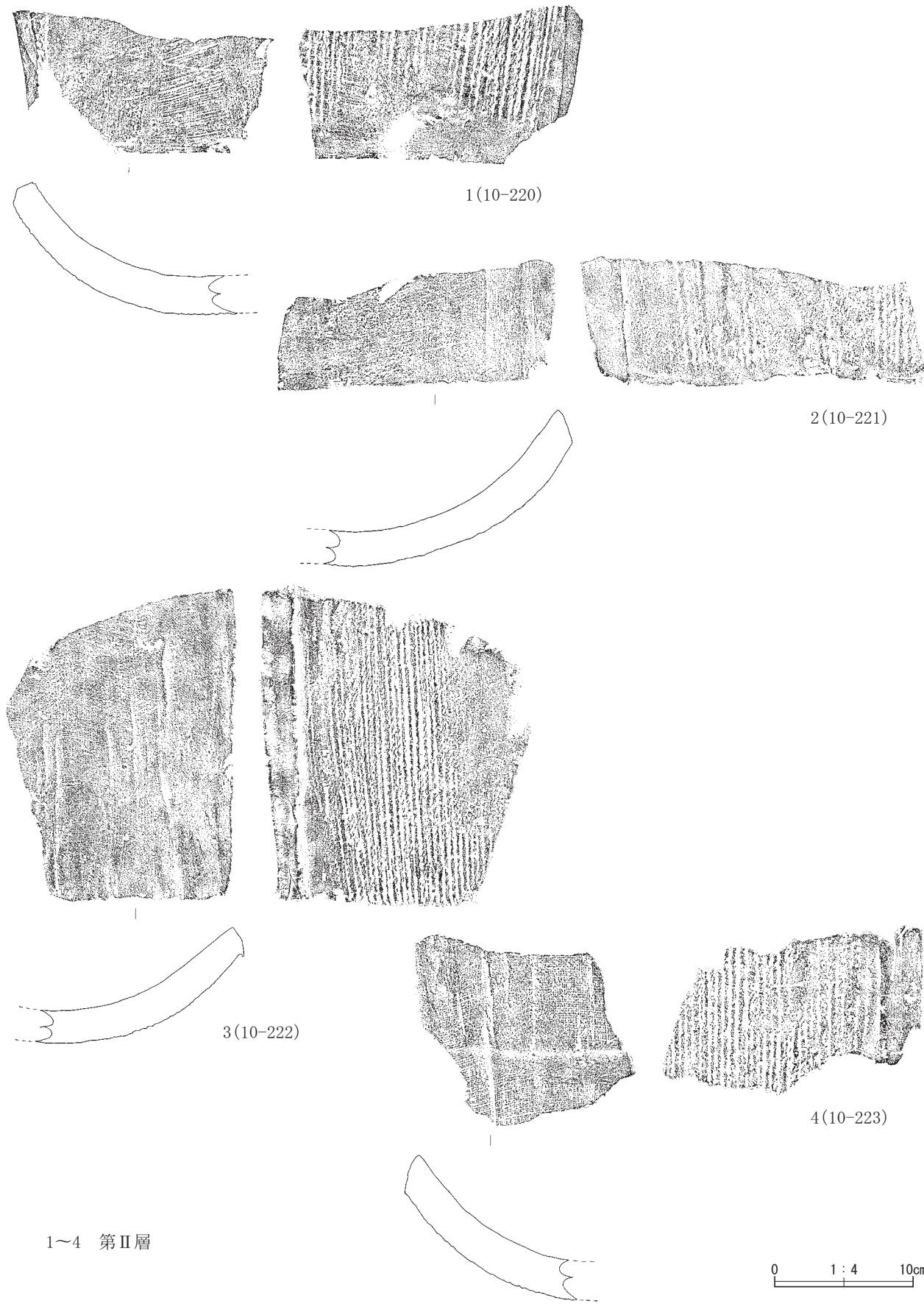
瓦 (第34図1)：一枚作りの平瓦である。凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められ、灰黄色、



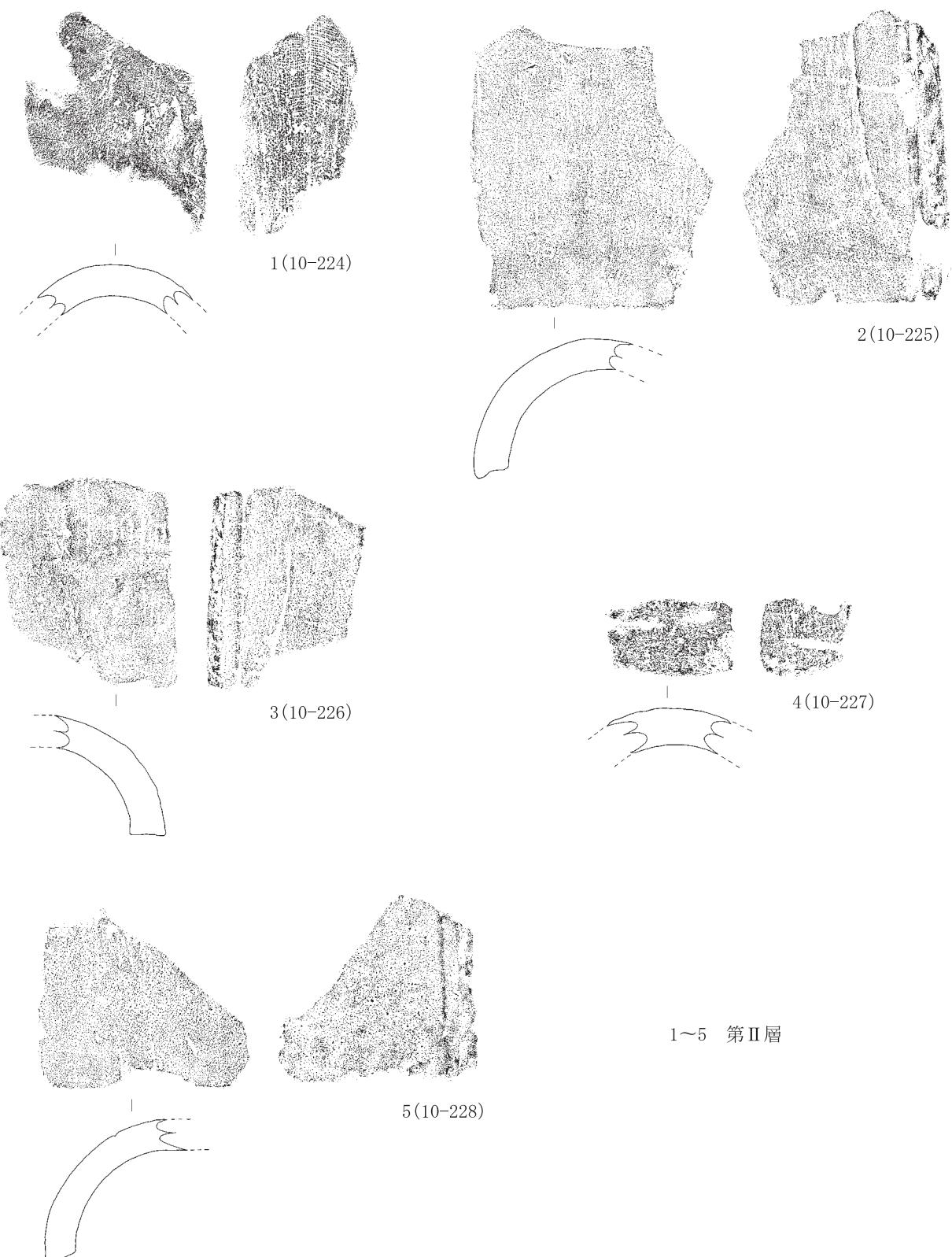
第33図 第106次調査地D区第I～II層出土遺物



第34図 第106次調査地D区第I～II層出土瓦



第35図 第106次調査地D区第II層出土瓦



0 1 : 4 10cm

第36図 第106次調査地D区第II層出土瓦

硬質、焼成良好である。糸切り痕が認められ、糸切り方向は広端部を上にした場合、右下から左上である。

第Ⅱ層 出土遺物（第33図4～11、第34図2～36図5、図版22～24）

土師器（第33図4）：非口クロ成形で、有段丸底の壺である。外面下半に手持ちヘラ削り調整が認められる。被熱している。

赤褐色土器（第33図5）：小型甕の口縁部破片である。口縁部端面を上方につまみ上げ成形している。

陶器（第33図6～9）：6は瀬戸・美濃系中世陶器の瓶類の破片である。7は寺内窯と考えられる土瓶である。外面は化粧釉、外面体部下半と内面に鉄釉を施す。注口部は欠損している。8は白岩窯産の瓶子口縁部破片である。内外面になまこ釉を施している。9は寺内窯産と考えられる陶胎染付碗である。外面に草花を染めつけている。

磁器（第33図10・11）：10は中国産の染付皿で、底部は碁笥底である。見込みは欠損しているが「寿」を染付けるタイプと考えられる。11は肥前系磁器の白磁皿である。蛇の目釉剥ぎを施している。

瓦（第34図2～7、第35図、第36図）：第34図2～7、第35図1～4は一枚作りの平瓦である。いずれも凸面に縄目の叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。第34図6、第35図1～4は凸面に縄目の叩き痕後、板状工具で撫で調整が施されている。第34図2・3は灰色、軟質、焼成良好である。第34図4～7、第35図1・2は暗灰色、硬質で焼成良好または堅緻である。第35図3・4は灰黄色、硬質で焼成良好である。第34図2・5・7、第35図1～4は糸切り痕が認められ、糸切り方向は、広端部を上にした場合、第34図2・7は上から下、第34図5・第35図4は右下から左上、第35図1は左上から右下、第35図2は下から上、第35図3は右下から左上である。第36図1～5は丸瓦である。第36図1・2・4は凸面に撫で調整、凹面に布目圧痕が認められる。第36図3は凸面は摩耗し不明で、凹面に布目圧痕が認められ、第36図5は凸面・凹面ともに摩耗し不明である。第36図1は灰色、軟質で焼成やや不良、第36図2は黒色（いぶし）、軟質で焼成良好、第36図3・4は橙色、軟質で焼成やや不良、第36図5は黄灰色、軟質で焼成やや不良である。第36図2・5は分割沈線が認められる。

10) E区検出遺構と出土遺物

E区では、材木塙跡2条、築地塙跡1基が発見された。いずれも古代遺構であると考えられる。調査区東側は現代の園路を構築する際に大きく搅乱を受けている。

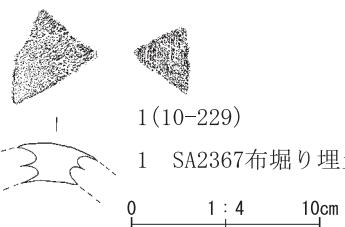
SA2367材木塙跡（第38図、図版16・17）

第III-1-②層面で検出された東西方向の区画施設である。東で12度南に振れる。布掘り溝の幅は40cm、深さ15cm、断面はU字状を呈し、直径12～14cmの柱痕跡が伴う。抜き取り痕がある。溝内に密に材木を立て並べた構造の材木塙跡と考えられる。

SA2368と重複し、これより新しい。

SA2367材木塙跡出土遺物（第37図、図版25）

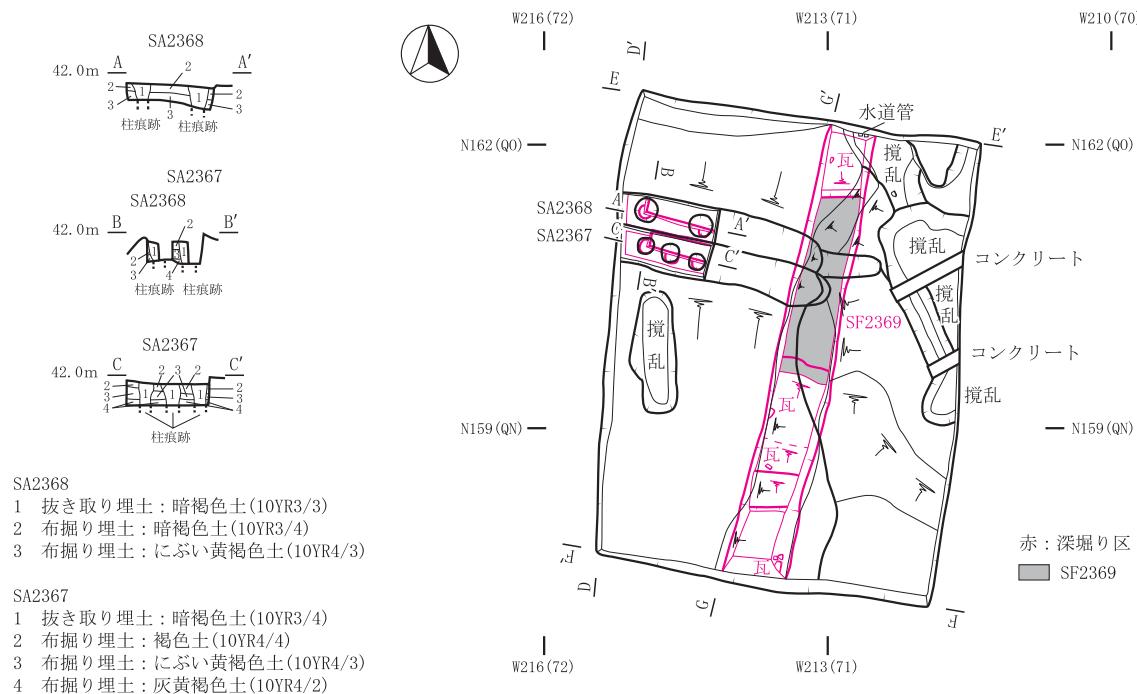
瓦（第37図1）：丸瓦で、凸面は摩耗により不明、凹面に布目圧痕が認められる。黄灰色、軟質、焼成やや不良である。



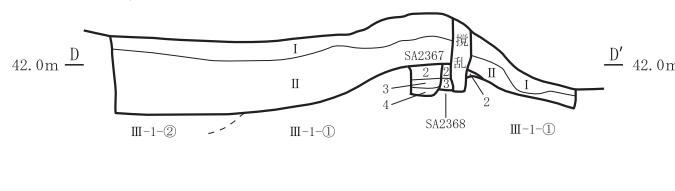
SA2368材木塙跡（第38図、図版16・17）

第37図 SA2367材木塙跡出土瓦

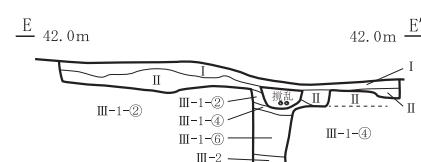
第III-1-①層面で検出された東西方向の区画施設である。東で12度南に振れる。布掘り溝の幅は40cm、



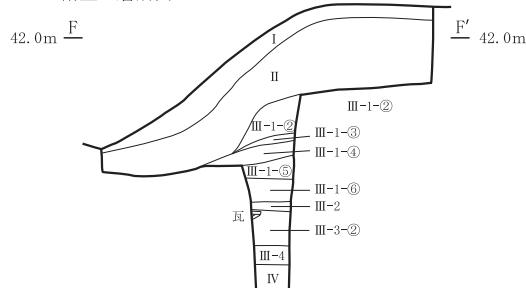
西壁土層断面



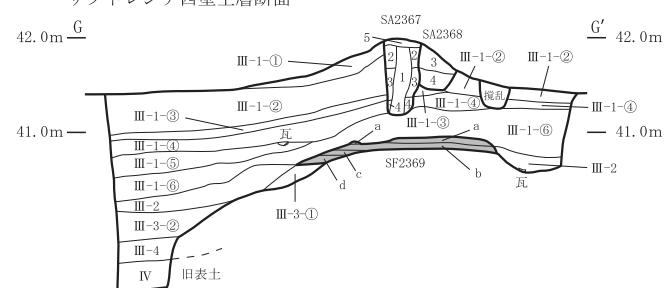
北壁土層断面



南壁土層断面



サブトレンチ西壁土層断面



基本層序

- | | |
|---|--|
| I 表土: 黒褐色土(10YR2/3) | |
| II 近世造成土: 暗褐色土(10YR3/4) | |
| III-1-① 古代整地層: 褐色土(10YR4/4) | |
| III-1-② 古代整地層: 暗褐色土(10YR3/4) | |
| III-1-③ 古代整地層: 暗褐色砂質土(10YR3/4) | |
| III-1-④ 古代整地層: 褐色砂質土(10YR4/4) | |
| III-1-⑤ 古代整地層: 暗褐色土(10YR3/3) | |
| III-1-⑥ 古代整地層(築地崩壊土): 黄褐色粘質土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)が若干混じる | |
| III-2 古代整地層: 暗褐色土(10YR3/4) | |
| III-3-① 古代整地層: 褐色砂質土(10YR4/4) | |
| III-3-② 崩壊瓦層: にぶい黄褐色土(10YR4/3)に炭化物が混じり、瓦が多く出土する | |
| III-4 古代整地層: 暗褐色土(7.5YR3/4) | |
| IV 旧表土: 黒褐色砂質土(10YR2/3) | |

SF2369

- | | |
|---|--|
| a 積み土: 黄褐色粘質土(10YR5/6) | |
| b 積み土: 褐色粘質土(10YR4/4)に灰白色土ブロック(10YR8/1)が混じる | |
| c 積み土: 褐色粘質土(10YR4/4) | |
| d 積み土: 暗褐色粘質土(10YR3/4)に褐色粘質土(10YR4/4)が混じる | |

0 1:80 4m

第38図 第106次調査地E区遺構全体図

深さ20cm、断面はU字状を呈し、直径12cmの柱痕跡が伴う。抜き取り痕がある。溝内に間隔をあけて材木を立て並べた構造の柱列塀と考えられる。

SA2367と重複し、これより古い。

S F 2369築地塀跡（第38図、図版16・17）

第III-3-①層面で検出された東西方向の区画施設である。東で12度南に振れる。第III-5-③層面を基盤として、黄褐色粘質土・褐色粘質土・暗褐色土の4段の積み土（a・b・c・d）がみられる。特に積み土bには灰白色土のブロックが混じる。積み土が確認された範囲は南北に2.1mの幅で、築地塀の基底幅と考えられる。また、SF2371築地塀跡の南側および北側に堆積している第III-2層は、段を形成しており築地塀の犬走り部分であると考えられる。また、この第III-2層の下層にあたる第III-3-②層は瓦が多数出土する崩壊瓦層であると考えられる。基底部掘り込み溝はこの地点では確認することができなかった。築地塀積み土の遺存が少なく、改修の痕跡も確認することができなかった。

11) E区基本層序および各層出土遺物

第106次調査E区の現況は、調査区西半は土手状に盛り上がっており、東半は西から東に傾斜している。

第106次調査地E区の基本層序をまとめると以下のようになる。

第I層 表土：現表土。黒褐色土(10YR2/3)。調査区全体を覆う。

第II層 近世造成土：近世の造成土。暗褐色土(10YR3/4)。

第III層 古代整地層：古代整地層である。第III層以下は、調査区中央のサブトレンチ内の断面で確認した。

第III-1層：古代最上層の整地層である。SF2369築地塀跡より上位で、SA2367・SA2368材木塀跡の構築面までを覆う整地層で、現況の土手状の高まりを構成している主要部分である。特に第III-1-⑥層は黄褐色粘質土で構成されており、築地崩壊土であると考えられる。下記のように細分される。

第III-1-①層 古代整地層：褐色土(10YR4/4)。SA2368の南側にのみ分布する。SA2368が検出されている。

第III-1-②層 古代整地層：暗褐色土(10YR3/4)。調査区全体に分布する。SA2369が検出されている。

第III-1-③層 古代整地層：暗褐色砂質土(10YR3/4)。調査区南側にのみ分布する。

第III-1-④層 古代整地層：褐色砂質土(10YR4/4)。調査区全体に分布する。

第III-1-⑤層 古代整地層：暗褐色土(10YR3/3)。調査区南側にのみ分布する。

第III-1-⑥層 古代整地層（築地崩壊土）：黄褐色粘質土(10YR5/6)に暗褐色土(10YR3/4)が若干混じる。層中に含まれる黄褐色粘質土はSF2369築地塀跡の崩壊土と考えられる。調査区全体に分布する。

第III-2層 古代整地層：暗褐色土(10YR3/4)。SF2369築地塀跡の南側と北側に分布し、特に南側では段状の地形を形成している。SF2369築地塀跡の犬走り部分であると考えられる。

第III-3層 古代整地層：SF2369築地塀跡の構築面である。下記のように細分される。特に第III-3-②層は瓦が多く出土し、崩壊瓦層であると考えられる。

第III-3-①層 古代整地層：褐色砂質土(10YR4/4)。SF2369が検出されている。

第III-3-②層 崩壊瓦層：にぶい黄褐色土(10YR4/3)に炭化物が混じり、瓦が多く出土する。

第III-4層 古代整地層：暗褐色土(7.5YR3/4)。上位の層よりもやや赤みがある。創建期整地層であると考えられる。

第IV層 旧表土：黒褐色砂質土(10YR2/3)。

各層出土遺物

第II層 出土遺物 (第39図1・2、第40図1、図版25)

土師器 (第39図1)：非ロクロ成形の甕の体部破片である。外面に縦方向のミガキ調整、内面に横方向のミガキ調整を施す。

中世陶器 (第39図2)：株洲系中世陶器擂鉢の口縁部破片である。口縁部内面に櫛目状文帯がめぐる。

瓦 (第40図1)：一枚作りの平瓦である。凸面に縄目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。黄灰色、軟質で焼成やや良である。糸切り痕が認められ、広端部を上にした場合、糸切り方向は下から上である。

第III層 出土遺物 (第39図3～7、第40図2～4、図版25・26)

第-1層 出土遺物 (第39図3・4、図版25)

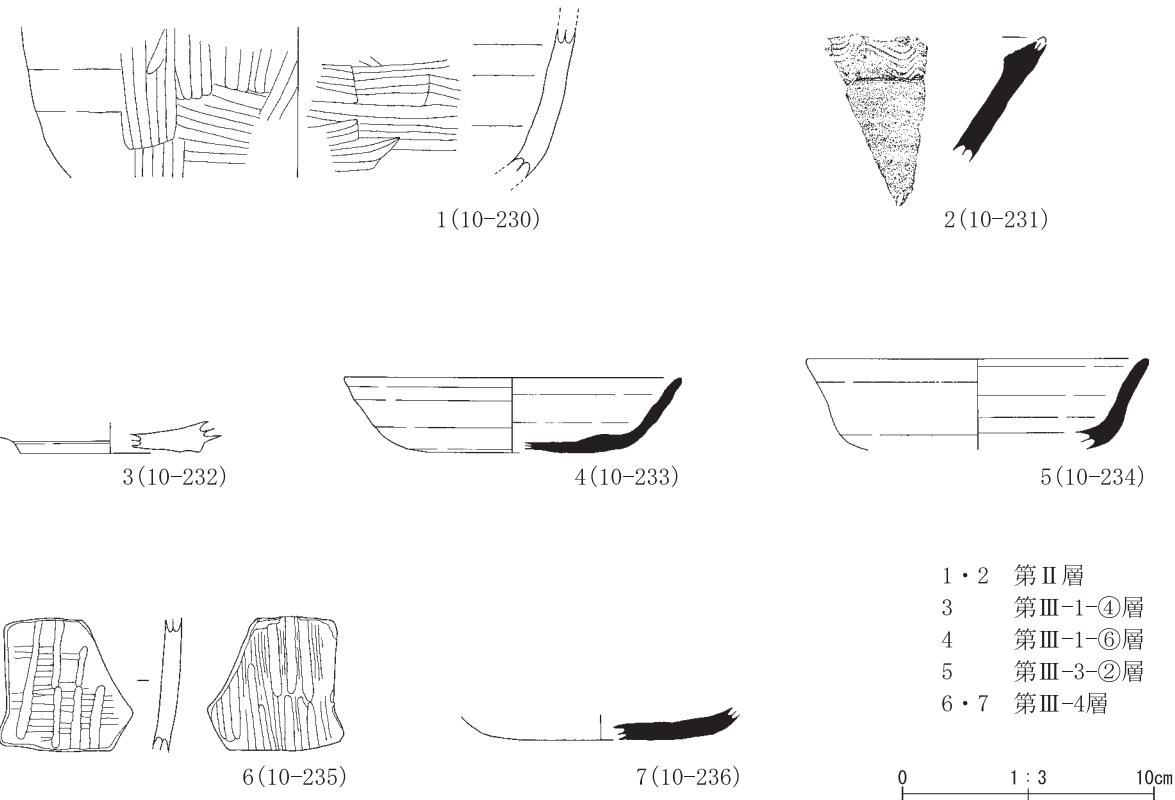
第III-1-④層と第III-1-⑥層から遺物が出土している。

第III-1-④層 (第39図3、図版25)

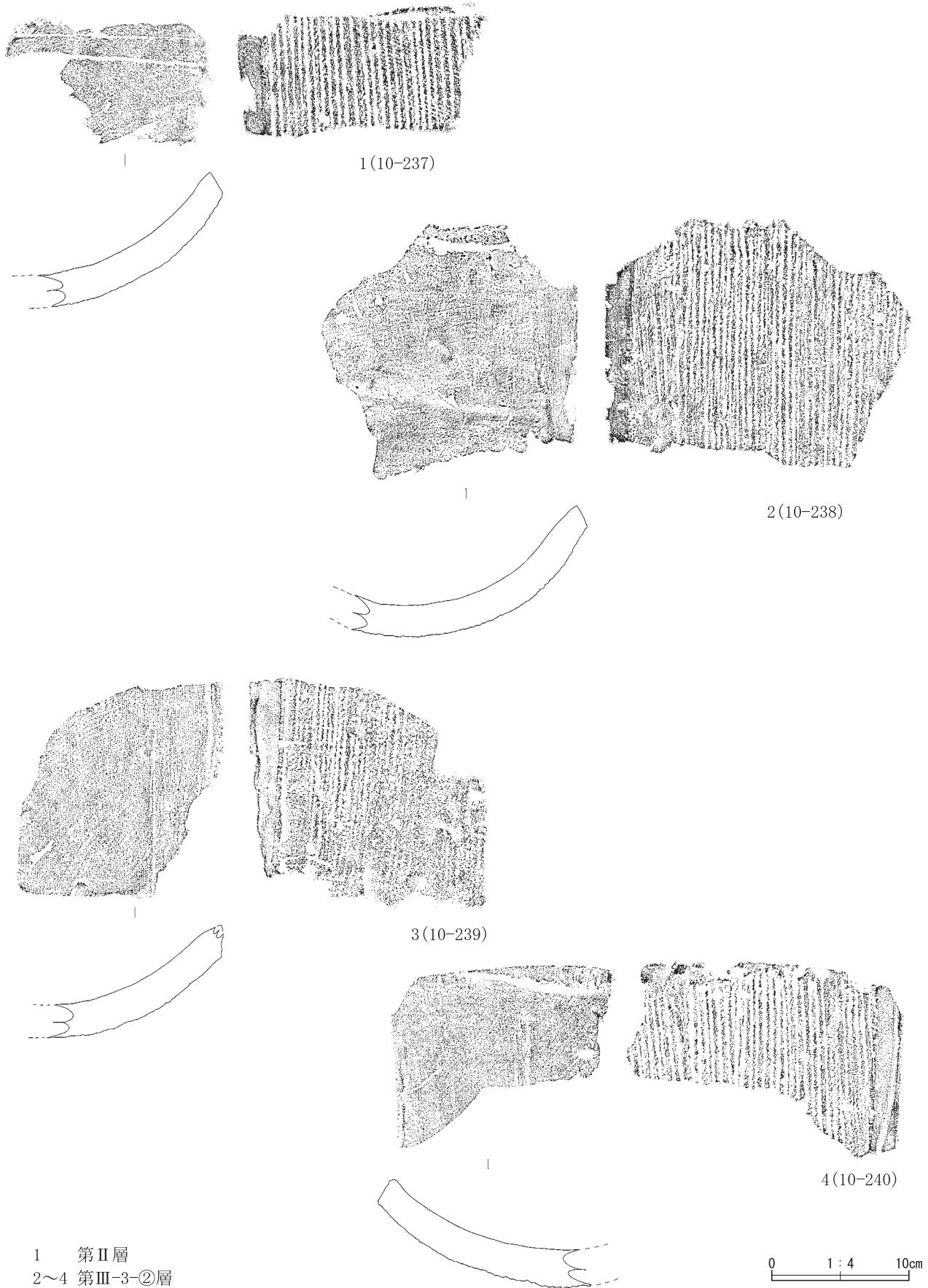
赤褐色土器 (第39図3)：台付壺で、糸切り後、低い高台部を貼り付けている。

第III-1-⑥層 (第39図4、図版25)

須恵器 (第39図4)：ヘラ切り後軽い撫で調整を施す壺である。底部は丸底風である。被熱している。



第39図 第106次調査地E区第II～III-4層出土遺物



第40図 第106次調査地E区第II・III-3-②層出土瓦

第III-3層 出土遺物（第39図5、第40図2～4、第41図1～3、図版25・26）

第III-3-②層から遺物が出土し、瓦が多く出土している。これらは築地壙の崩壊瓦と考えられる。

第III-3-②層（第39図5、第40図2～4、第41図1～3、図版25・26）

須恵器（第39図5）：ヘラ切り後軽い撫で調整を施す坏である。底部は丸底風である。胎土に3～9mmの凝灰岩粒が混じる。

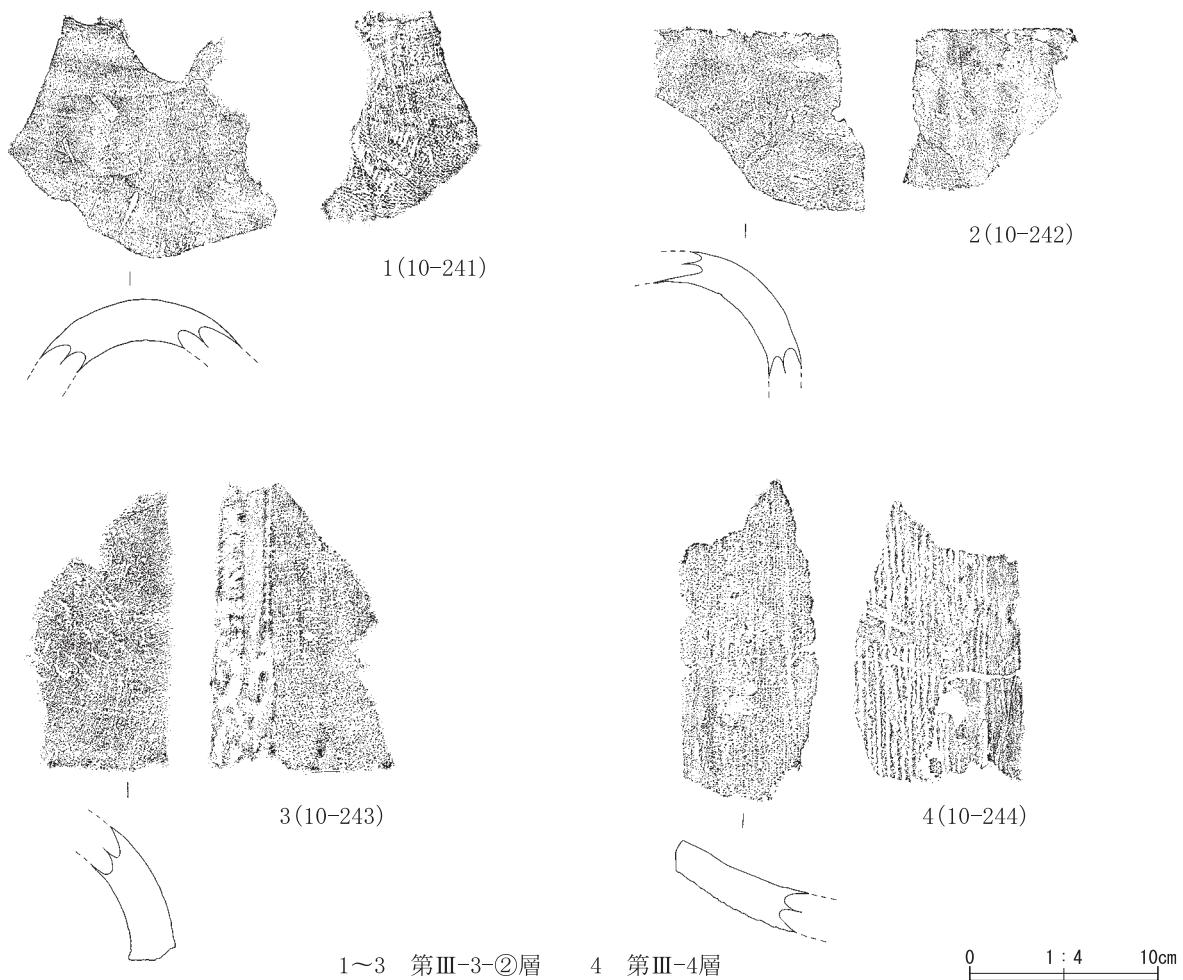
瓦（第40図2～4、第41図1～3）：第40図2～4は一枚作りの平瓦である。いずれも凸面に縄目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。灰色、硬質で焼成良好ないし堅緻である。凸面に砂の付着が多い。糸切り痕が認められ、広端部を上にした場合、糸切り方向は、第40図2は下から上、第40図3は右下から左上、第40図4は左上から右下である。第41図1～3は丸瓦である。いずれも凸面に撫で調整、凹面に布目圧痕が認められる。第41図1・2は灰色、軟質で焼成良好である。第41図3は黒色（いぶし）、軟質で焼成やや不良、分割沈線が認められる。

第III-4層（第39図6・7、第41図4、図版25・26）

土師器（第39図6）：甕の体部破片である。外面に縦方向の刷毛目調整後、縦方向のヘラミガキ調整、内面に横方向の刷毛目調整後、縦方向のヘラミガキ調整を施す。内面に煤が付着している。

須恵器（第39図7）：ヘラ切りの坏である。摩耗している。

瓦（第41図4）：一枚作りの平瓦である。凸面に縄目叩き痕、凹面に布目圧痕が認められる。灰色、軟質で、焼成良好である。



第41図 第106次調査地E区第III-3-②・III-4層出土瓦

表3 第106次調査地検出遺構一覧（1）

A区

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SA2317	第14図	III	中世	SD2322B→ →SA2318	幅15cm、深さ30cm、長さ2.1m以上。直径10~15cmの柱痕跡。西で22° 北に振れる。
SA2318	第14図	III	中世	SA2317→	幅20cm、深さ30cm、長さ2.1m以上。直径12cmの柱痕跡。西で22° 北に振れる。
SD2319	第3・4・5・9図	III	古代	→SK2327	幅40cm、深さ5~30cm、長さ16.6m以上。西で23° 北に振れる。SX2331北側側溝。92次A区SD1994の延長。
SD2320A	第4・5・9図	III	古代		幅40cm、深さ30cm、長さ2.4m以上。西で23° 北に振れる。SX2331南側側溝1。
SD2320B	第4・5・9図	III	古代	SD2322B→ →SA2317	幅45cm、深さ15cm、長さ2.1m以上。西で23° 北に振れる。SX2331南側側溝2。
SD2321	第4・5・9図	IV-1	古代	SG2323→	幅40cm、深さ5cm、長さ4.2m以上。西で24° 北に振れる。SX2332北側側溝。
SD2322A	第5・9図	IV-2	古代		幅50cm、深さ15cm、長さ20cm以上。西で24° 北に振れる。SX2332南側側溝1。92次A区SD1995の延長か。
SD2322B	第5・9図	IV-2	古代	→SA2317・SK2328・SD2320B	幅50cm、深さ15cm、長さ40cm以上。西で24° 北に振れる。SX2332南側側溝2。92次A区SD1995の延長か。
SG2323	第5・6図	V	古代	→SD2321	直径3.5m以上、深さ90cm。
SG2324	第5・6図	V	古代	→SG2325	直径4m以上、深さ50cm。
SG2325	第5・6図	V	古代	SG2324→ →SX2333	直径12m以上、深さ50cm。
SK2326	第13図	III	古代	SX2331→	直径80cm、円形。深さ30cm。底面に直径10cm、深さ20cmの小ピットを伴う。
SK2327	第13図	III	古代	SD2319・SX2331→	長軸90cm、短軸50cm楕円形。深さ15cm
SK2328	第13図	IV-2	古代	SD2322B・SX2332→	直径40cm、円形。深さ10cm。
SK2329	第13図	IV-3	古代	→SX2333	直径2.2m。深さ45cm。擂鉢状。
SK2330	第13図	III	古代		長軸60cm、短軸30cm、楕円形。
SX2331	第9図		古代	→SK2326・SK2327	道路幅8.6~9.0m。西で23° 北に振れる。
SX2332	第9図		古代	→SK2328・SX2333	道路幅11.9~12.0m。西で24° 北に振れる。
SX2333	第10図	IV-2	古代	SG2325・SK2329→	幅15~40cm、深さ5~15cm、長さ0.2~4.2m。北で3~16° 東に振れる。
SX2334	第5・9図	V	古代		幅10~20cm。不正形のものもある。

B区

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備考
SA2335	第16図	III-1	中世	SX2350→	幅20cm、深さ10cm、長さ3.0m以上。直径8~12cmの柱痕跡。西で20° 南に振れる。
SA2336	第16図	III-1	中世	SX2350→	幅40cm、深さ10cm、長さ3.0m以上。直径10~12cmの柱痕跡。西で19° 南に振れる。
SA2337	第16図	III-2	中世	SA2338・SX2349→	幅25~40cm、深さ10cm、長さ3.2m以上。直径15cmの柱痕跡。西で26° 北に振れる。
SA2338	第16図	IV-1	中世	SX2349・SX2350→ →SA2337	幅25~40cm、深さ15cm、長さ3.2m以上。直径8cmの柱痕跡。西で27° 北に振れる。
SD2339	第16図	IV-1・IV-2	古代	SI2343→ →SD2340・SK2345・SK2347	幅40cm、深さ5cm、長さ2.8m以上。西で8° 北に振れる。SX2349北側側溝。
SD2340	第16図	IV-2	古代	SD2339・SI2343→ →SD2341	幅30cm、深さ5cm、長さ2.5m以上。北で9° 西に振れる。
SD2341	第16図	III-1・IV-2	中世	SD2340・SI2343・SX2350→	幅60~80cm、深さ35cm、長さ3.0m以上。西で15° 南に振れる。
SD2342	第16図	III-2・IV-1	中世		幅50~200cm、深さ35cm、長さ3.0m以上。西で6° 北に振れる。
SI2343	第17図	IV-1	古代	SK2348・SX2349→ →SD2339・SD2340・SD2341	1辺4.5mの方形。深さ5~10cm。西壁は北で10° 西へ振れる。小ピット3基あり。
SK2344	第17図	IV-1	古代	SX2349→	長軸1.7m、短軸0.9m以上、深さ10cm。
SK2345	第17図	IV-1	古代	SD2339・SX2349→	長軸90cm、短軸60cm、深さ5cm。
SK2346	第17図	IV-1	古代	SX2349→	長軸50cm、短軸30cm、深さ10cm。
SK2347	第17図	IV-2	古代	SD2339→	長軸30cm、短軸20cm、深さ5cm。
SK2348	第17図	IV-1	古代	SX2349→ →SI2343	長軸1.5m、短軸50cm以上、深さ15cm。

表4 第106次調査地検出遺構一覧（2）

B区

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備 考
SX2349	第16図		古代	→SA2337・SA2338・SI2343・SK2344・SK2345・SK2346・SK2348	道路幅推定約12m。西で8° 北に振れる。硬化面厚さ20～50cm。
SX2350	第16図	V	中世	→SA2335・SA2336・SX2338・SD2341	西で15° 南に振れる。

C区

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備 考
SD2351	第21図	III	古代	SG2354→	幅50～120cm、深さ10～30cm、長さ4.0m以上、北で7度東へ振れる。
SF2352B	第21・22図	III	古代	SF2352A→	北で3° 東に振れる。基底幅2.1m。
SF2352A	第21・22図	III	古代	→SF2352B	北で3° 東に振れる。
SG2353	第21図	III	古代	→SG2355	直径1.2m以上、深さ60cm。
SG2354	第21図	III	古代	→SD2351	直径2.5m以上、深さ80cm。
SG2355	第21図	II	古代	SG2353→	直径1.5m以上、深さ80cm。

D区

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備 考
SB2356	第27・28・29図	IV-1-①・②	古代	SB2357・SA2313・SA2358・SK2359・SK2365→	掘り方直径約1.5m前後の歪んだ円形。柱痕跡約32cm (P2)。梁間5.2m、桁行2.6m+2.6m。桁行南側柱筋が東で北に35° 振れる。
SB2357	第27・28・29図	IV-1-①・②	古代	SK2360→ →SB2356・SA2313	掘り方直径約1.5m前後の歪んだ円形。柱痕跡約35cm (P2)。梁間4.2m、桁行3.4m+3.4m。桁行南側柱筋が東で北に38° 振れる。
SA2313	第27図	IV-1-①	古代	SB2357・SA2314・SF2315・SK2362→ →SB2356・SK2363	105次E区で検出。幅40～50cm、深さ50cm。直径約15cmの柱痕跡。東で10～36° 北に振れる。材木列壙。
SA2314	第27図	IV-1-①	古代	SF2315→ →SA2313・SK2363	105次E区で検出。幅40～50cm、深さ57cm、直径約15cmの柱痕跡。東で10～38° 北に振れる。柱列壙。
SA2358	第27図	IV-1-①・②	古代	SK2359→ →SB2356	直径約90cmの隅丸方形・不正形。2.2m+2.2m。柱筋が東で北に46° 振れる。
SF2315	第27図	V	古代	→SA2313・SA2314・SK2362	105次E区で検出。基底部北側に小ピットあり。
SK2359	第32図	V	(古代)	→SB2356・SA2358	長軸2.4m以上、短軸1.5m、深さ15～25cmの楕円形。
SK2360	第32図	IV-1-①	古代	→SB2357・SK2363	直径1.5m、深さ25cmの歪んだ円形。
SK2361	第27図	V	(古代)		直径90cm以上、深さ50cm以上。平面形不明。
SK2362	第27図	IV-4-②	古代	SF2315→ →SA2313	105次E区でSX2316としたもの。直径2m、深さ60cm以上。平面形不明。
SK2363	第27図	IV-1-①	古代	SA2313・SA2314・SK2360→	直径60cm以上。平面形歪んだ円形
SK2364	第27図	IV-1-①	古代		長軸1m、短軸90cmの隅丸方形。
SK2365	第27図	IV-1-①	古代	→SB2356	長軸1.3m、短軸80cmの不正形。
SK2366	第27図	IV-1-①	古代		長軸70cm、短軸50cmの不正円形。

E区

遺構No.	図面番号	検出面	時期	重複遺構新旧関係	備 考
SA2367	第38図	III-1-②	古代	SA2368→	幅40cm、深さ15cm。直径12～14cmの柱痕跡。東で12° 南へ振れる。材木列壙。
SA2368	第38図	III-1-①	古代	→SA2367	幅40cm、深さ20cm。直径12cmの柱痕跡。東で12° 南へ振れる。柱列壙。
SF2369	第38図	III-3-①	古代		東で12° 南へ振れる。基底幅2.1m。

〔重複遺構新旧関係凡例〕

- 例1 SA0001→ 当該遺構がSA0001よりも新しい。
 例2 →SA0001 当該遺構がSA0001よりも古い。

II 第106次調査報告

表5 第106次調査地出土遺物属性表（1）

A区

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-138	第8図1	図版18-1	SX2333	A区	赤褐色土器	壺	-	-	-	溝1の埋土出土。
10-139	第11図1	図版18-2	SG2325 埋土上層	A区	須恵器	甕	-	-	-	外面格子状の叩き目、内面同心円状の当て具痕。
10-140	第11図2	図版18-3	SG2325 埋土上層	A区	須恵器	甕	-	-	-	外面格子状の叩き目、内面同心円状の当て具痕。
10-141	第12図1	図版18-6	SG2325 埋土上層	A区	須恵器	大甕	-	-	-	頸部外径で直径約37.4cm。外外面に補強のための粘土を貼り付け。下面の接合面には凹凸がある。
10-142	第11図3	図版18-4	SG2325 埋土上層	A区	赤褐色土器	壺	-	6.0	-	底部摩滅、切り離し不明。
10-143	第11図4	図版18-5	SG2325 埋土上層	A区	赤褐色土器	蓋	-	-	-	
10-144	第12図2	図版18-7	SG2325 埋土上層	A区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目压痕。灰色。硬質。焼成堅緻。
10-145	第12図3	図版18-8	SG2325 埋土上層	A区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目压痕。暗灰～灰色。硬質。焼成堅緻。
10-146	第15図1	図版18-9	A区 I層	PQ93	陶器	擂鉢	-	高台径 11.4	-	産地不明。外外面鉄釉。
10-147	第15図2	図版18-10	A区 I層	PT93	磁器	染付碗	-	-	-	肥前系磁器。
10-148	第15図3	図版18-11	A区 II-1層	PR93	磁器	染付皿	-	-	-	中国産（漳州窯系）。
10-149	第15図4	図版18-12	A区 II-1層	QC96	磁器	染付碗	-	-	-	肥前系磁器。
10-150	第15図5	図版18-13	A区 II-2層	QC97	磁器	染付碗	-	-	-	肥前系磁器。
10-151	第15図6	図版18-14	A区 II-3層	QC96	磁器	染付皿	-	-	-	西洋コバルト。
10-152	第15図7	図版18-15	A区 II-3層	QC96	石器	石鏸	-	-	-	未製品。長さ34.8mm、幅13.7mm、厚さ7.2mm。3.4g。珪質頁岩製。
10-153	第15図8	図版18-16	A区 II-4層	QC96	赤褐色土器	壺	-	-	-	底部摩滅、切り離し不明。
10-154	第15図9	図版18-17	A区 II-4層	QD97	陶器	鉢	18.4	-	-	白岩窯産。
10-155	第15図10	図版18-18	A区 II-4層	QB94	磁器	染付碗	-	-	-	肥前系磁器。
10-156	第15図11	図版18-19	A区 III層	PS94	須恵器	蓋	-	-	-	擬宝珠状のつまみ。
10-157	第15図12	図版18-20	A区 III層	PS97	赤褐色土器	台付壺	-	9.4	-	
10-158	第15図13	図版18-21	A区 III層	PS97	赤褐色土器	甕	-	-	-	小型甕。
10-159	第15図14	図版18-22	A区 V層	QA93	弥生土器	鉢	-	-	-	波状口縁。口縁部外反。変形工字文。列点あり。細線化された沈線。

B区

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-160	第18図1	図版19-1	SA2338 布掘り埋土	B区	中世陶器	大甕	約45	-	-	珠洲系中世陶器。IV期。外外面平行叩き痕。内面無文の当て具痕。頸部内面撫で調整。
10-161	第18図2	図版19-2	SD2341埋土	B区	弥生土器	鉢	-	-	-	平行沈線2条。縄文LR。
10-162	第18図3	図版19-3	SD2341埋土	B区	石製品	石棒	-	-	-	長さ85.4mm、幅39.7mm、厚さ20.7mm。82.3g。安山岩製。両端は破損している。
10-163	第18図4	図版19-4	SD2342埋土	B区	中世陶器	甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。外外面平行叩き痕。内面無文の当て具痕。
10-164	第19図1	図版19-5	B区 I層	QF04	弥生土器	鉢	-	-	-	口縁部に3条の沈線を一単位とした連弧文を施す。刷毛目調整を残す。
10-165	第19図2	図版19-6	B区 I層	QF04	弥生土器	鉢	-	-	-	外外面口縁部横走沈線3条、縄文LR施文。内面横走沈線3条。
10-166	第19図3	図版19-7	B区 I層	QF04	弥生土器	鉢	-	-	-	波状口縁。口縁部内外間に2条の沈線を一単位とした連弧文を施す。外外面口縁部に縄文LR。
10-167	第19図4	図版19-8	B区 I層	QF04	弥生土器	鉢	-	-	-	縄文LRを施文し、菱形文を施す。菱形文の間に列点を施す。
10-168	第19図5	図版19-9	B区 I層	QF04	弥生土器	甕	-	-	-	外外面口縁部縄文LR。縦方向の刷毛目調整後、横走沈線1条を施す。
10-169	第19図6	図版19-10	B区 I層	QF04	弥生土器	壺	-	-	-	外外面頸部沈線2条、ミガキ調整。内面刷毛目調整後ミガキ調整。

表6 第106次調査地出土遺物属性表（2）

B区

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-170	第19図7	図版19-11	B区 I 層	QF04	弥生土器	壺	-	-	-	外面菱形の区画に充填縄文LRを施す。
10-171	第19図8	図版19-12	B区 I 層	QF04	弥生土器	壺	-	-	-	外面沈線2条。外面横方向ミガキ。
10-172	第19図9	図版19-13	B区 I 層	QF04	中世陶器	瓶子	-	-	-	瀬戸・美濃系中世陶器。古瀬戸中期様式。粘土紐輪積み。
10-173	第19図10	図版19-14	B区 I 層	PT04	磁器	染付皿	-	-	-	輪花皿。西洋コバルト。
10-174	第19図11	図版19-15	B区搅乱	QF04	弥生土器	甕	15.0	-	-	波状口縁。外面口縁部縄文LR施文後、縦方向刷毛目調整、横方向ミガキ、横走沈線3条を施す。内面横方向刷毛目調整後、横方向ミガキを施す。
10-175	第19図12	図版19-16	B区 II-1 層	PT04	中世陶器	甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。IV期カ。外面平行叩き痕。内面無文の當て具痕。
10-176	第19図13	図版19-17	B区 II-2 層	QF04	弥生土器	鉢	-	-	-	外面重菱形文を施す。
10-177	第19図14	図版19-18	B区 II-2 層	QF04	弥生土器	鉢	-	6.6	-	外面縄文LR。内面刷毛目調整。
10-178	第19図15	図版19-19	B区 II-2 層	QF04	弥生土器	壺	-	-	-	外面沈線2条、ミガキ調整。内面横方向刷毛目調整。
10-179	第19図16	図版20-1	B区 II-3 層	PT04	中世陶器	甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。IV期カ。外面平行叩き痕。内面無文の當て具痕。
10-180	第19図17	図版20-2	B区 II-3 層	PT04	中世陶器	大甕	-	-	-	珠洲系中世陶器。IV～V期。底面砂が付着。体部下端平行叩き痕。
10-181	第19図18	図版20-3	B区 II-3 層	PT04	中世陶器	壺	-	-	-	国産瓷器系陶器。
10-182	第19図19	図版20-4	B区 II-3 層	PT04	磁器	合子	-	-	-	产地不明。白磁。底面無釉。
10-183	第20図1	図版20-5	B区 I 層	QF04	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰色。硬質。焼成堅緻。凸面に砂の付着が多い。
10-184	第20図2	図版20-6	B区 II-4 層	PT04	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰色。硬質。焼成堅緻。凸面に砂の付着が多い。

C区

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-185	第23図1	図版20-7	SD2351埋土	C区	須恵器	甕	-	-	-	外面平行叩き痕、内面平行當て具痕。
10-186	第23図2	図版20-8	SG2354埋土	C区	土師器	甕	-	-	-	非クロ口成形。口縁部縦方向刷毛目調整後、横方向撫で調整。
10-187	第23図3	図版20-9	SG2354埋土	C区	土師器	甕	-	-	-	非クロ口成形。頸部に段を有し、横方向撫で調整。
10-188	第24図1	図版20-10	SF2352B 積み土	C区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰白色。軟質。焼成やや不良。摩耗している。
10-189	第24図2	図版21-1	SF2352B 積み土	C区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰白色。軟質。焼成やや不良。摩耗している。
10-190	第24図3	図版21-2	SF2352B 積み土	C区	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目圧痕。灰色。軟質。焼成やや不良。分割沈線あり。摩耗している。
10-191	第24図4	図版21-3	SG2354埋土4	C区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰白色。軟質。焼成やや不良。摩耗している。
10-192	第24図5	図版21-4	SG2354埋土4	C区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。青灰色。硬質。焼成堅緻。凸面に砂多い。糸切り方向右下から左上。
10-193	第24図6	図版21-5	SG2354埋土4	C区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰色。軟質。焼成良好。糸切り方向下から上。
10-194	第24図7	図版21-6	SG2354埋土4	C区	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目圧痕。灰白色。軟質。焼成不良。摩耗している。分割沈線不明。
10-195	第25図1	図版21-7	C区 I 層	QG87	須恵器	甕	-	-	-	外面平行叩き痕、内面平行當て具痕。
10-196	第25図2	図版21-8	C区搅乱	QG85	須恵器	壺	12.0	-	-	
10-197	第26図1	図版21-9	C区 I 層	QG87	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面不明。黒色(いぶし)。軟質。焼成やや不良。摩耗している。

表7 第106次調査地出土遺物属性表（3）

D区

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-198	第30図1	図版22-1	SB2356 P1 掘り方埋土	D区	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕、凹面布目圧痕。にぶい黄灰色。軟質。やや不良。糸切り痕上から下。
10-199	第30図2	図版22-2	SB2356 P1 抜き取り埋土	D区	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整、凹面布目圧痕。灰白色。軟質。やや不良。摩耗している。
10-200	第30図3	図版22-3	SB2356 P3 掘り方埋土	D区	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整、凹面布目圧痕。灰白色。軟質。やや不良。摩耗している。
10-201	第31図1	図版22-4	SA2314 布掘り埋土	D区	須恵器	台付壺	-	9.0	-	
10-202	第33図1	図版22-5	搅乱	-	陶器	平碗	-	高台径 5.4	-	瀬戸・美濃系中世陶器。古瀬戸後期様式。 後期Ⅱ～Ⅲ期。高台内の削り込みが浅い輪高台。
10-203	第33図2	図版22-6	D区 I層	-	磁器	染付小杯	-	3.4	-	肥前系磁器。肥前IV～V期。
10-204	第33図3	図版22-7	D区 I層	-	弥生土器	壺	-	-	-	変形工字文。繩文LRを充填する。
10-205	第33図4	図版22-8	D区 II層	-	土師器	壺	約13.6	-	-	非クロコ成型。有段丸底。内面黒色処理。 外面下半手持ちヘラ削り調整。被熱している。
10-206	第33図5	図版22-9	D区 II層	-	赤褐色土器	甕	-	-	-	小型甕口縁部。口縁部端面を上方につまみ上げる。
10-207	第33図6	図版22-10	D区 II層	-	陶器	瓶類	-	-	-	瀬戸・美濃系中世陶器。古瀬戸中～後期。
10-208	第33図7	図版22-11	D区 II層	-	陶器	土瓶	-	-	-	寺内窯カ。外面化粧釉、体部下半鉄釉。注口部分欠損。内面鉄釉。
10-209	第33図8	図版22-12	D区 II層	-	陶器	瓶子	-	-	-	白岩窯。内外面なまこ釉。
10-210	第33図9	図版22-13	D区 II層	-	陶器	染付碗	-	-	-	寺内窯カ。陶胎染付。草花を染付ける。
10-211	第33図10	図版22-14	D区 II層	-	磁器	染付皿	-	4.0	-	中国産。染付皿C群。碁笥底。見込みは「寿」染付けるカ。
10-212	第33図11	図版22-15	D区 II層	-	磁器	白磁皿	-	-	-	肥前系磁器。蛇の目釉剥ぎ。肥前IV期。
10-213	第34図1	図版22-16	D区 I層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰黄色。硬質。焼成良好。糸切り痕右下から左上。
10-214	第34図2	図版23-1	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰色。軟質。焼成良好。糸切り痕上から下。
10-215	第34図3	図版23-2	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰色。軟質。焼成良好。摩耗している。
10-216	第34図4	図版23-3	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成良好。
10-217	第34図5	図版23-4	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成堅緻。糸切り痕右下から左上。
10-218	第34図6	図版23-5	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕後、板状工具で撫で調整。凹面布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成堅緻。
10-219	第34図7	図版23-6	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成堅緻。糸切り痕上から下。
10-220	第35図1	図版23-7	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕後、板状工具で撫で調整。凹面布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成堅緻。糸切り痕左上から右下。
10-221	第35図2	図版23-8	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕後、板状工具で撫で調整。凹面布目圧痕。暗灰色。硬質。焼成堅緻。糸切り痕下から上。
10-222	第35図3	図版24-1	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕後、板状工具で撫で調整。凹面布目圧痕。灰黄色。硬質。焼成良好。糸切り痕右下から左上。
10-223	第35図4	図版24-2	D区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目の叩き痕。凹面布目圧痕。灰黄色。硬質。焼成良好。糸切り痕右下から左上。
10-224	第36図1	図版24-3	D区 II層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目圧痕。灰白色。軟質。焼成やや不良。摩耗している。
10-225	第36図2	図版24-4	D区 II層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目圧痕。黒色（いぶし焼成）。軟質。焼成良好。分割沈線あり。
10-226	第36図3	図版24-5	D区 II層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面摩耗により不明。凹面布目圧痕。橙色。軟質。焼成やや不良。摩耗している。分割沈線あり。
10-227	第36図4	図版24-6	D区 II層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目圧痕。橙色。軟質。焼成やや不良。
10-228	第36図5	図版24-7	D区 II層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面・凹面摩滅により不明。黄灰色。軟質。焼成やや不良。分割沈線あり。

表8 第106次調査地出土遺物属性表（4）

E区

遺物No.	図番号	写真図版	出土地点 ・層位	グリ ッド	種別	器種	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	備 考
10-229	第37図1	図版25-1	SA2367 布堀り埋土	E区	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面摩耗により不明。凹面布目压痕。黄灰色。軟質。焼成やや不良。
10-230	第39図1	図版25-2	E区 II層	-	土師器	甕	-	-	-	非クロロ成形。外面縦方向のミガキ調整。内面横方向のミガキ調整。
10-231	第39図2	図版25-3	E区 II層	-	中世陶器	擂鉢	-	-	-	珠洲系中世陶器。V期。口縁部内面に櫛目状文帯がめぐる。
10-232	第39図3	図版25-4	E区 III-1-④層	-	赤褐色土器	台付壺	高台径 7.2	-	-	糸切り。
10-233	第39図4	図版25-5	E区 III-1-⑥層	-	須恵器	壺	13.4	7.8	3.0	ヘラ切り後軽い撫で調整。被熱している。
10-234	第39図5	図版25-6	E区 III-3-②層	-	須恵器	壺	13.6	-	3.6	ヘラ切り後軽い撫で調整。胎土に3~9mmの凝灰岩粒が混じる。
10-235	第39図6	図版25-7	E区 III-4層	-	土師器	甕	-	-	-	外面縦方向刷毛目調整後、縦方向ヘラミガキ。内面横方向刷毛目調整後、縦方向ヘラミガキ。
10-236	第39図7	図版25-8	E区 III-4層	-	須恵器	壺	-	9.0	-	ヘラ切り。摩耗している。
10-237	第40図1	図版25-9	E区 II層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕。凹面布目压痕。黄灰色。軟質。焼成やや良。糸切り痕下から上。
10-238	第40図2	図版25-10	E区 III-3-②層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕。凹面布目压痕。灰色。硬質。焼成良好。凸面に砂の付着が多い。糸切り痕下から上。
10-239	第40図3	図版26-1	E区 III-3-②層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕。凹面布目压痕。灰色。硬質。焼成良好。凸面に砂の付着が多い。糸切り痕右下から左上。
10-240	第40図4	図版26-2	E区 III-3-②層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕。凹面布目压痕。暗灰色。硬質。焼成堅綴。凸面に砂の付着が多い。糸切り痕左上から右下。
10-241	第41図1	図版26-3	E区 III-3-②層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目压痕。灰色。軟質。焼成良好。
10-242	第41図2	図版26-4	E区 III-3-②層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目压痕。灰色。軟質。焼成良好。
10-243	第41図3	図版26-5	E区 III-3-②層	-	瓦	丸瓦	-	-	-	凸面撫で調整。凹面布目压痕。黒色（いぶし）。軟質。焼成やや不良。分割沈線あり。
10-244	第41図4	図版26-6	E区 III-4層	-	瓦	平瓦	-	-	-	一枚作り。凸面縄目叩き痕。凹面布目压痕。灰色。軟質。焼成良好。

III 考 察

第106次調査地は焼山地区北西部、政庁の北西約250mの外郭西門周辺である。調査区はA～E区の5箇所を設定した。A・B区は外郭西門から城外に延びる道路遺構、C・D・E区は外郭西門北側の外郭区画施設の実体把握を目的とし、今後の環境整備事業に向けて調査を実施した。

調査の結果、A区では道路遺構2面、溝状遺構2箇所、材木埠跡2条、溝跡4条、土取り穴3基、土坑5基が検出された。B区では道路遺構1面、土壙跡1基、材木埠跡4条、溝跡4条、竪穴住居跡1軒、土坑5基が検出された。C区では、溝跡1条、築地埠跡1基、土取り穴3基が検出された。D区では、掘立柱建物跡2棟、材木埠跡2条、柱列跡1列、築地埠跡1基、土坑8基が検出された。E区では、材木埠跡2条、築地埠跡1基が検出された。

これらの遺構については、出土遺物や検出層位、重複関係などから、年代や新旧関係の把握が可能である。遺物包含層や検出遺構の年代について各調査区で検討を行った上で、全体の利用状況と変遷について以下にまとめる。

1 第106次調査A区について

1) A区の各遺物包含層の年代について

A区の層序については、第II章3の基本層序で述べた。各層出土の年代比定資料をみていく。第I・II-1～4層は18世紀代～19世紀代に位置づけられる肥前系磁器染付碗（第15図2・4・5・10）が出土している（註1、以下、遺物の年代比定における「～に位置づけられる」の表記は、「～の」と表記する）。また、第II-2層からは西洋コバルトを用いた染付皿（第15図6）や第I・II-1～4層からはガラス片なども出土する。これらのことから、第I・II層までは江戸時代後期以降で、現代に近い年代の造成土であると考えられる。かつてA区周辺では宅地の庭が造られており、庭の造成土であると考えられる。ただし、第II-1層で16世紀末～17世紀初めの漳州窯産磁器染付皿（第15図3、註2）が出土し、中世末の遺物が含まれていることは当該地周辺の中世後期における利用を考える上では注意すべきである。

第III層以下は近世陶磁器・現代の遺物を含まず古代以前の遺物しか出土しないことから、古代以前の整地層であると考えられる。第III層からは、8世紀四半期の擬宝珠状のつまみの須恵器蓋、9世紀前半の赤褐色土器台付壺、小型甕の口縁部が出土している（第15図11～13、註3）。このことから、第III層は8世紀末～9世紀前半の平安時代の整地層であると考えられる。

第IV層からは出土遺物がなく年代は不明であるが、出土遺物がほとんどないことから、秋田城創建期の整地層の可能性が高い。

第V層地山面からは弥生時代中期中葉の弥生土器の鉢形土器が出土している（第15図14、註4）。

2) A区の各遺構の年代について

遺構内からの出土遺物は少ないが、SX2333溝状遺構とSG2325土取り穴から遺物が出土している。第IV-2層面検出のSX2333溝状遺構の一つから赤褐色土器壺の破片が出土している（第8図1）。小片であるため詳細な時期判定は難しいが、赤褐色土器壺は8世紀末以降のものであり、おおむね平安期以降であると考えられる。SG2325土取り穴の上層からは9世紀第2四半期の赤褐色土器壺と蓋が出土している（第11図4・5）。また、8世紀末・9世紀初頭以降の3-1群瓦が出土している（第12図1・2、註5）。これらのことからSG2325土取り穴は9世紀前半までに埋まりきっていると考えられる。しかし、

SG2325土取り穴の下層や SG2323・SG2324土取り穴からは遺物が出土しないことから、これらの土取り穴の構築時期は秋田城創建期段階であり、道路造成のために埋め戻しているものと考えられ、完全に埋まりきるのが9世紀前半であると考えられる。SX23331道路遺構およびそれに付随する道路側溝 SD2319、SD2320A・B溝跡は、道路硬化面である第Ⅲ層の出土遺物の年代からみて8世紀末～9世紀前半で、平安期のものであると考えられる。また、先にみた SX2333溝状遺構も平安期のものと考えられることから、SX2331道路遺構を造成する際の道路整地のための掘り込み溝と考えることができる。さらに下層の第Ⅳ層面で確認されている SX2332道路遺構およびそれに付随する道路側溝 SD2321、SD2322A・B溝跡については、道路造成土と考えられる第Ⅳ層からは遺物が全く出土しなかつたため、年代は不明であるが、秋田城創建期で奈良期の可能性が高い。また、第Ⅴ層地山面掘り込みの SX2334溝状遺構は、調査区西側の SX2333溝状遺構と平面形や検出層位が異なることから、SX2332道路遺構を造成する際の道路整地のための掘り込み溝で、奈良期の可能性が高い。

以上のことから、その他、第Ⅲ層面検出の SK2326・SK2327・SK2330土坑は平安期以降、第Ⅳ-2・3層面検出の SK2328・SK2329土坑は奈良期のものと考えられる。

なお、SA2317・SA2318材木塀跡は平安期道路の南側側溝である SD2322B溝跡よりも新しい。これらについては、遺構の特徴および遺構配置からみて、後述するB区南側の SA2337・SA2338材木塀の延長と考えられ、中世遺構の可能性が高い。

2 第106次調査B区について

1) B区の各遺物包含層の年代について

B区の層序については、第Ⅱ章5の基本層序で述べた。各層出土の年代比定資料をみていく。第Ⅰ層からは近代の西洋コバルトを用いた染付皿（第19図10）、第Ⅱ-3層で江戸後期の白磁合子（第19図19）など近世・近代の遺物が出土している。また、第Ⅰ・Ⅱ-1～4層からはいずれもガラス片が出土している。これらのことから第Ⅰ・Ⅱ-1～4層は近世から現代の堆積層であると考えられる。その他、第Ⅰ・Ⅱ層からは弥生時代前期（第19図6）、中期中葉（第19図1・3～5・7）、中期中葉～後葉（第19図2・11）、中期後葉（第19図13・15）の土器が出土している。また、第Ⅰ層から古瀬戸中期様式の瓶子（第19図9）、第Ⅱ-3層からは珠洲系中世陶器IV期の甕（第19図16）、IV～V期の大甕底部（第19図17）の中世陶器が出土している。このように、第Ⅰ・Ⅱ層から近現代の出土遺物に混じりながら弥生土器、中世陶器が出土することは当該地周辺の古代以外の利用状況を知る上で注意しておきたい。

第Ⅲ層からは遺物の出土はなく年代は不明であるが、後述するように中世出土遺物を伴う SD2342溝跡の構築面は第Ⅲ-2層であり、中世遺構と考えられる SA2335・SA2336材木塀跡の構築面が第Ⅲ-1層であることから、中世造成土と考えられる。

第Ⅳ層からは遺物の出土はなく年代は不明であるが、後述する SX2349道路遺構を構成する造成土であり、版築構造がみられることから古代の道路遺構の造成土であると考えられる。

2) B区の各遺構の年代について

遺構内からの出土遺物は少ないが、SA2338材木塀跡と SD2341・SD2342溝跡から出土している。調査区南側で検出された SA2338材木塀跡からは1280～1370年代の珠洲系中世陶器IV期の大甕が出土している（第18図1）。またこれと隣接する SD2342溝跡からも珠洲系中世陶器の甕の体部破片が出土している（第18図4）。また、SA2338材木塀よりも切り合い関係で新しい SA2337材木塀跡は少なくとも14世紀

III 考 察

代以降であると言える。したがって調査区南側で検出された SA2337・SA2338材木塀跡、SD2342溝跡の一連の区画施設は中世後期のものと考えられる。一方で、調査区北側で検出された SD2341溝跡からは弥生時代遺物しか出土しないが（第18図2・3）、切り合い関係としては周辺の遺構よりも最も新しい。したがって、SD2341溝跡、SA2335・SA2336材木塀跡、SX2350土壙跡の調査区北側の遺構群は、遺構配置からみて、調査区南側の SA2337・SA2338材木塀跡、SD2342溝跡の中世後期の遺構と対になるものと考えられ、中世遺構であると判断できる。

第IV層面で検出されている SD2339・SD2340溝跡、SI2343堅穴住居跡、SK2344～2348土坑は、出土遺物はないが、検出層位からいずれも古代と考えられる。特に SD2339溝跡はA区の奈良期道路遺構（SX2332）の北側側溝である SD2321溝跡の延長線上に位置する。また、SX2349道路遺構も出土遺物を伴わず第VI層地山砂礫層に版築状に造成されている。これらのことから、SX2349道路遺構および SD2339溝跡は秋田城創建期段階で奈良期のものと考えられる。SX2349道路遺構の南側側溝は、中世の SA2338材木塀跡により削平され検出できなかったと考えられる。また、A区で確認された平安期の SX2331道路遺構は、B区においては調査区全体が削平を受けているため検出されなかつたと考えられる。

その他、SI2343堅穴住居跡は道路側溝である SD2339溝跡よりも古い。道路造営時における仮設の作業小屋と考えられ、秋田城創建期の頃のものと考えられる。また SI2343堅穴住居跡より古い SK2348も秋田城創建期頃と考えられる。SD2339溝跡より新しい SD2340溝跡、SK2345・SK2347土坑は少なくとも奈良期の SX2349道路遺構よりは新しいと言える。SK2344・SK2346土坑も検出層位からみて同様である。

3 第106次調査C区について

1) C区の各遺物包含層の年代について

C区の層序については、第II章7の基本層序で述べた。C区は宅地造成のため、著しく削平を受けており、ほとんどの部分で第I層表土の直下は第III層地山面となっている。わずかに調査区南中央部に第II層が遺存しており、出土遺物はないがこの面から SG2355土取り穴が検出されており、古代整地層であると考えられる。

2) C区の各遺構の年代について

SD2351溝跡、SG2354土取り穴、SF2352B 築地塀跡から遺物が出土している。SG2354土取り穴からは、土師器甕が出土しており（第23図2・3）、いずれも8世紀後半に位置づけられる。また、SG2354土取り穴の中間部分である埋土4からは瓦がまとまって出土しており、秋田城創建期の1-1群瓦（第24図4・7）、1-2群瓦（第24図6）が多くみられ、1点のみ8世紀後半の2群瓦（第24図5）がみられる。これらのことから、SG2354土取り穴は築地塀構築を目的とした粘土採取のために形成され、途中で築地塀崩壊瓦が落ち込み堆積し、8世紀後半には埋まっているものと考えられる。SD2351溝跡からは須恵器甕の体部破片が出土しているが、小片のため詳細時期は絞り込めないが、SG2354土取り穴が完全に埋まってから構築されているため、8世紀後半以降のものと考えられる。SF2352B 築地塀跡の積み土からは創建期の1-1群瓦（第24図1・2）、1-2群瓦（第24図3）が含まれている。いずれも摩耗しており経年変化が見られる。これらは古い SF2352A 築地塀跡に葺かれていた瓦が混入したものと考えられる。したがって、SG2354土取り穴埋土4で集中的に出土する崩壊瓦が一時期のものと考えられること、SF2352B 築地塀跡の積み土から経年変化した創建期の1群瓦が混じることから、古い SF2352A 築地塀跡は外郭I期のもので瓦葺き、新しい SF2352B 築地塀跡は外郭II期のもので非瓦葺きと考えられ、従来の秋田城遺構変遷の見解を支持する結果である（表9）。

表9 秋田城遺構変遷表

	733	750 I期 築地塀	760 II期 築地塀 材木列塀	800 III期 一本柱列塀	830 IV A期 一本柱列塀	850 IV B期 一本柱列塀	878 V期 材木列塀	900 VI期 一本柱列塀	915 950
政庁									
政庁区画施設									
外郭		I期	II期		III期 (小期あり)		IV期 (小期あり)	V期	
外郭区画施設		瓦葺き築地塀	非瓦葺き築地塀		柱列塀		材木列塀	大溝	
大畠地区		I期	II期 生産施設	III期 生産施設整備 居住域住居数増加	IV期 生産施設充実	V期 官衙建物			
焼山地区		I期 A類建物 A類建物倉庫	II期 B類建物 B類建物倉庫群か?	III期 (小期あり) C類建物 C類建物倉庫群		D類建物?			
鵜ノ木地区		I期	II期	III期	IV期		V期		
外郭西門		I期	II期	III期	IV期	V期	VI期		
時期		天平5年(733)～	8C後半前葉～	8C末・9C初 ～	9C第2四半期 ～	9C第3四半期～	元慶2年(878) ～	10C第2四半期 ～10C中葉	
備考		秋田出羽柵創建期	天平宝字年間 「秋田城」 改修期	第III期全体 大改修期	天長7年 (830) 大地震後 復興期	元慶の乱で 焼失	元慶の乱 (878)後 復興期	最終末期	

その他調査区西側の SG2353・SG2355土取り穴からは出土遺物はないが、SG2354土取り穴と同様に、秋田城創建期に築地塀の粘土採取のために形成されたものと考えられる。

4 第106次調査D区について

1) D区の各遺物包含層の年代について

D区の層序については、第II章9の基本層序で述べたが、第105次調査地E区を基準にしている。ただし、第105次調査地E区では第IV-1層としていたものを今年度の調査では①と②に細分した。今回出土した年代比定資料をみていくと、第I層から18世紀～19世紀前半の肥前系磁器染付小杯（第33図2）、第II層から18世紀代の肥前系磁器白磁皿（第33図11）、江戸後期の在地産の陶器（第33図7～9）が出土している。このことから第I・II層は近世以降の造成土であると考えられる。これは第105次調査E区と同様の見解である。その他、第I層から弥生中期前葉の壺形土器（第33図3）、撓乱から古瀬戸後期様式II～III期の平碗（第33図1）、第II層から古瀬戸中期～後期様式の瓶類破片（第33図6）と15世紀後葉～16世紀前半の貿易陶磁器染付皿C群（第33図10）が出土しており、当該地周辺の古代以外の利用状況を知る上で注意する必要がある。その他、第I・II層からは古代の瓦が多く出土しており、1-1群瓦（第36図1）、1-2群瓦（第34図2・3）、1-3群瓦（第36図2）、3-1群瓦（第34図4～7、第35図1）、3-2群瓦（第35図2～4）、4-1群瓦（第36図3・4）、4-2群瓦（第36図5）など創建期から8世紀末・9世紀初め以降の各時期の瓦が混ざって出土している。これらの瓦は後述する外郭区画施設に関連する施設に葺かれていた瓦が後世に集積され堆積したものと考えられる。

今年度の調査では第IV層以下の出土遺物はないが、第105次E区の年代比定資料を参考にすると第IV-1・2層は外郭III・IV期の整地層と考えられ、第IV-3層は創建期以降8世紀末・9世紀初めまでの間

III 考 察

の整地層、第IV-4層は創建期整地層の可能性が考えられていた（註6）。

2) D区の各遺構の年代について

D区の遺構内出土遺物は少ないが、SB2356掘立柱建物跡、SA2314柱列跡から出土している。SB2356掘立柱建物跡からはP1の掘り方埋土から8世紀末・9世紀初頭以降の4-2群瓦が出土し（第30図1）、抜き取り穴からは摩耗し経年変化した創建期の1-1群瓦が出土している（第30図2）。また、P3の掘り方埋土からも摩耗し経年変化した創建期の1-1群瓦が出土している（第30図3）。SA2314柱列塙跡の布掘り埋土からは8世紀第4四半期から9世紀第1四半期に位置づけられる須恵器台付壺が出土している（第31図1）。これらのことから、SB2356掘立柱建物跡およびSA2314柱列塙跡は8世紀末・9世紀初頭以降と考えられる。したがって、SB2356掘立柱建物跡とSA2314柱列塙よりも新しいSA2313材木列塙跡とSK2363土坑も8世紀末・9世紀初頭以降である。このことはこれらの遺構の検出面である第IV-1-①・②層が外郭III期・IV期の整地層であることと矛盾しない。

その他の第IV-1-①・②層で検出されたSB2357掘立柱建物跡、SA2358柱列跡、SK2360・SK2362～2366土坑はいずれも検出層位から判断して外郭III・IV期の平安期のものと考えられる。

遺構の切り合い関係からみて、SB2357掘立柱建物跡・SA2314柱列塙跡からSB2356掘立柱建物跡・SA2313材木列塙跡という変遷と組み合わせであると判断できる。SB2357・SB2356掘立柱建物跡は、それぞれの外郭区画施設を跨いで構築される櫓状建物と考えられる。また、これまでの調査成果による秋田城遺構変遷と対応させると、SB2357掘立柱建物跡とSA2314柱列跡は外郭III期、SB2356掘立柱建物跡とSA2313材木列塙跡は外郭IV期と考えられる（表9）。なお、外郭IV期のSB2356掘立柱建物跡とSA2313材木列塙跡の切り合い関係から、SA2313材木列塙跡を構築してからSB2356掘立柱建物を構築するという手順を読みとくことができる。また、SA2358柱列跡は外郭IV期のSB2356掘立柱建物跡よりも古く、外郭III期以前のものと考えられるが、詳細な時期は分からぬ。

この他、第IV-4-①層検出のSK2360・SK2364～2366土坑は、検出層位からみて、外郭III・IV期以降であると考えられる。外郭IV期のSA2313材木列塙跡よりも新しいSK2363土坑は外郭IV期以降である。第IV-4-②層検出のSK2362土坑は検出層位からみて創建期以降8世紀末・9世紀初め以前と考えられるが、外郭I・II期と考えられるSF2315築地塙跡よりも新しいことから、外郭II期から外郭III期までの間に構築されたものと考えられる。また、第V層検出のSK2359・SK2361土坑は古代遺構の可能性が高いが、古代以前の可能性も考えられる。

5 第106次調査E区について

1) E区の各遺物包含層の年代について

E区の層序については、第II章11の基本層序で述べた。各層出土の年代比定資料をみていく。第II層からは1380～1440年代の珠洲系中世陶器V期擂鉢が出土しているが（第39図2）、第105次調査地A区の所見からみて近世以降の畑造成土もしくは耕作土であると考えられる。

第III層以下は中世以降の遺物は出土せず古代の整地層であると考えられる。第III-1-④層からは9世紀前半の赤褐色土器台付壺（第39図3）、第III-1-⑥層は9世紀第1四半期の須恵器壺（第39図4）が出土している。なお、第III-1-⑥層は黄褐色粘質土を多く含み、築地崩壊土と考えられる。第III-3-②層からは8世紀第3四半期の須恵器壺（第39図5）に伴って、8世紀第2四半期の1-2群瓦（第41図1・2）・1-3群瓦（第41図3）、8世紀後半の2群瓦（第40図2～4）が出土している。これらの瓦

は SF2369築地塀跡の崩壊瓦と考えられる。第III-4層から8世紀第2四半期の土師器甕（第39図6）、須恵器坏（第39図7）、1-1群瓦（第41図4）が出土している。したがって、第III-1層は9世紀前半、第III-3層は8世紀後半、III-4層は8世紀第2四半期の創建期の整地層であると考えられる。また、第III-2層はSF2369築地塀跡の大走り部分を形成していると土層断面で判断された。以上のことから、第III-4層は外郭I期の創建期整地層、第III-3層は外郭I期からII期の間に堆積した外郭I期築地塀の崩壊瓦層、第III-2層は外郭II期、第III-1層は外郭III期の整地層であると考えられる。

2) E区の各遺構の年代について

E区遺構内出土遺物はSA2367材木塀跡の布掘り埋土から8世紀末・9世紀初頭以降の摩耗した4-2群瓦が出土している（第37図1）。遺構の切り合い関係からみてSA2368柱列塀跡からSA2367材木列塀跡となっており、これまでの調査成果による秋田城遺構変遷と対応させると、SA2368柱列塀跡は外郭III期、SA2367材木列塀跡は外郭IV期と考えられる。このことはSA2367材木列塀の出土遺物および各遺構の検出層位面の年代観と矛盾しない。SF2369築地塀跡は外郭I・II期のものと考えられるが、積み土の残りが悪く、外郭IとII期の峻別は困難である。現存する積み土部分は、8世紀後半の堆積と考えられる崩壊瓦層である第III-3-①層面で構築され、崩壊瓦層よりも上層で大走り部分と考えられる第III-2層が南北隣接し分布している。このことから調査で確認された積み土部分は外郭II期の築地塀跡の可能性が高い。

6 第106次調査地全体の利用状況の変遷について

以上の年代の検討を踏まえ、全体の利用状況と変遷についてまとめると表10のようになる。以下、第106次調査地の利用状況と変遷について概要をまとめる。

明確な遺構は伴わないが、A～D区の各調査区において弥生土器が出土しており弥生前期～中期の遺物が一定量出土しており、第106次調査周辺には弥生時代の生活域が存在していたと考えられる。B区ではまとまった量の弥生土器が出土しており、特に弥生時代中期中葉～後葉のものが多い。こういった弥生土器の出土は第92次A・102次・104次・105次調査地でもみられることから、焼山北西部の台地上に弥生時代の生活域があったことが改めて確認された。遺構としては今のところ第105次調査地A区のST2302土壙墓1基のみであり、ほとんどの弥生時代遺構は秋田城の造営により失われてしまったものと考えられる。

その後古代秋田城の造営にあたっては、初めにA区北側で築地塀造営等のための粘土採取が行われSG2333・SG2334・SG2335土取り穴が展開する。これらの土取り穴の大半はすぐに埋められたがSG2325土取り穴の埋土上層で9世紀前半の遺物が出土することから、完全に埋まりきるのは9世紀に入ってからと考えられる。その後A区では奈良期の幅約12mのSX2332道路遺構が造営される。B区の幅約12mと推定されるSX2349道路遺構は、A区のSX2332道路遺構の延長であり、尾根状の地形に沿って北西方向に延びている。A区のSX2334溝状遺構は、奈良期のSX2332道路遺構に伴う掘り込み整地事業の可能性が高い。その後、8世紀末から9世紀前半の平安期には幅約9mのSX2331道路遺構が造営される。この道路遺構の掘り込み整地事業としてSX2333溝状遺構が、道路に直交する方向で構築されている。このA区の平安期SX2331道路遺構はB区まで延びていると考えられるが、B区では削平のため検出することができなかった。以上のようにA・B区において奈良期と平安期の城外西大路が造営されている。

一方、C・D・E区では初めに奈良期の外郭I・II期に、C区のSF2352A・B、D区のSF2315、E区のSF2369築地塀跡が構築される。C区ではSF2352Aが外郭I期、SF2352Bが外郭II期のものと考えら

III 考 察

表 10 第 106 次調査遺構変遷表

A 区		古代	中世	近世以降
(層序)	V 層(地山)	IV 層	III 層	II・I 層
(外郭時期区分)	外郭 I・II 期		外郭 III 期	
(外郭西門時期区分)	西門 I・II 期		西門 III・IV 期	
道路遺構関係	[SX2334 奈良期道路関係] SX2332 SD2321 SD2322A SD2322B	[SX2333 平安期道路関係] SD2319 SD2320A SD2320B	SX2331 SK2328 SK2327	SA2317 → SA2318
その他	SG2323 SG2324 SG2325	SK2329	SK2326 SK2330	

B 区		古代	中世	近世以降
(層序)	VI 層(砂礫層)	V 層(地山)	IV 層	III 層
(外郭時期区分)			外郭 I・II 期	
(外郭西門時期区分)			西門 I・II 期	
道路遺構関係		奈良期道路関係 SI2343 SD2348	SD2339 SD2340 SK2345 SK2347 SK2344 SK2346	SX2350 SA2335 SA2336 SD2341 SA2338 → SA2337 SD2342
その他				

C 区		古代	近世以降
(層序)	III 層(地山)	II 层	I 層
(外郭時期区分)	外郭 I 期	外郭 II 期	
外郭区画施設	SF2352A	→ SF2352B	
その他	SG2354	→ SD2351	
	SG2353 → SG2355		

D 区		古代	近世以降				
(層序)	V 層(旧表土)	IV-4 層	IV-3 層	IV-2 层	IV-1 层	II・I 层	
(外郭時期区分)	外郭 I・II 期				外郭 III 期	外郭 IV 期	
外郭区画施設	SF2315			SK2362	SB2357 → SA2314 SK2360	SA2313 → SK2363 SB2356	
その他		SK2359 SK2361		SA2358 SK2360	SK2364 SK2365 SK2366		

E 区		古代	近世以降			
(層序)	IV 層(旧表土)	III-4 層	III-3 層	III-2 層	III-1 层	I・II 层
(外郭時期区分)	外郭 I・II 期		外郭 III 期	外郭 IV 期		
外郭区画施設		SF2369		SA2368	→ SA2367	

れる。その後、平安期は築地塀から材木塀に変わる。材木塀は、外郭Ⅲ期の溝内に間隔を空けて材木を立て並べた構造の柱列塀から外郭IV期の溝内に密に材木を立て並べた構造の材木列塀へと変遷する。外郭Ⅲ期はD区の SA2314柱列塀跡、E区の SA2368柱列塀跡である。外郭IV期はD区 SA2313材木列塀跡、E区の SA2367材木列塀跡である。これらの平安期の材木塀跡は奈良期の築地塀跡と同じ位置であり、秋田城北西部の外郭線はC区—D区—E区をとおり北西隅が張り出す形となっている。最も標高が高く、見晴らしの良いD区には SB2356・SB2357掘立柱建物跡の櫓状建物が設置される。SB2357掘立柱建物跡が外郭Ⅲ期の SA2314柱列塀跡を、SB2356掘立柱建物跡が外郭IV期の SA2313材木列塀を跨ぐ形で配置される。

その後中世後期になっても当該地周辺は利用されており、A区で16世紀末～17世紀初めの漳州窯産の磁器やB・D区で14～15世紀の古瀬戸中期～後期様式の中世陶器、B・E区で13世紀末～15世紀中葉の珠洲系中世陶器IV～V期が出土している。また、A・B区において中世材木塀の区画施設が構築される。台地縁辺に沿って南側にB区 SA2337・SA2338材木塀跡とA区 SA2317・SA2318材木塀跡、北側にB区 SA2335・SA2336材木塀跡が構築される。

その後現代になり宅地および庭として利用され、その際に削平・搅乱を受けている。

7 城外西大路について

1) 城外西大路の規格性について

A・B区の調査により幅11.9～12.0mの奈良期道路遺構（A区 SX2332道路遺構、B区 SX2349道路遺構）と幅8.6～9.0mの8世紀末から9世紀前半の平安期道路遺構（A区 SX2331道路遺構）が検出された。これらは城外西大路であると考えられる（第42・43図）。奈良期道路遺構の側溝として、A区では北側は SD2321溝跡、南側は SD2322A・B溝跡、B区では北側は SD2339溝跡である（表11）。B区南側側溝は中世の SA2338材木塀跡により削平されている。なお、第92次調査地A区で検出されていた SD1995溝跡は、配置および検出層位面から見て第106次調査地A区 SD2322Aの延長である可能性が高い。平安期道路遺構の側溝としては、北側は SD2319溝跡、南側は SD2320A・Bである。なお、第92次調査地A区で検出されていた SD1994溝跡は SD2319溝跡の延長である。

今回発見された道路遺構の道路幅については、おおむね奈良期道路は約12m、平安期道路は約9mと考えられる。このような道路幅の規格については、城内東大路において詳細に確認されている。第84次調査地では奈良時代の8世紀第2四半期～8世紀末・9世紀初めまでの道路幅は11.4～12.0mと広く、平安時代の8世紀末・9世紀初め以降は9.0～9.3mと幅が狭くなることが指摘されている（註7）。より政庁に近い位置にあたる第88次調査地では奈良時代は約12m、平安時代には道路幅は約9mであるが北側は側溝ではなく、材木塀で区画されている（註8）。なお、9世紀のある段階では幅約6mまで縮小していたことも指摘されている。また、外郭東門の西側の地点である第60次調査においては溝芯々間で11.0mと6.7mの道路側溝が検出されている（註9）。以上のように、城内東大路においては、道路幅は奈良時代約12m、平安時代には約9m以下であるといえる。今回発見された城外西大路は、このような城内東大路の規格と同一であると考えられる。ただし、城内東大路は政庁東から外郭東門までほぼ東西方向に一直線であるのに対し、城外西大路は西で約8～22度北に振れ、外郭西門から北西方向に延びる尾根状の地形に合わせて道路が構築されている。

III 考 察

2) 城外西大路と外郭西門の対応関係について

今回検出された奈良期道路遺構（A区 SX2332道路遺構、B区 SX2349道路遺構）と平安期道路遺構（A区 SX2331道路遺構）の各城外西大路が外郭西門のどの時期に対応するかを検討したい（第42、表11）。

奈良期道路遺構は、配置からみて奈良時代の外郭西門Ⅰ期（SB1991）とⅡ期（SB1990）が対応すると考えられる。一方、平安期道路遺構は、より南に位置する8世紀末・9世紀初めの外郭西門Ⅲ期（SB1989）が対応すると考えられる。平安期道路（SX2331）の出土遺物の年代は8世紀末から9世紀前半と考えられ、外部西門の年代とほぼ一致する。また、規模が小さく比較的南に位置する外郭西門Ⅳ期（SB1988）もこの平安期道路を受けることは可能である。したがって、今回検出された道路遺構は、外郭施設の時期区分で言えば、奈良期道路遺構（SX2332・SX2349）は外郭Ⅰ・Ⅱ期、平安期道路遺構（SX2331）は外郭Ⅲ期に対応すると考えられる。外郭西門Ⅴ・Ⅵ期に伴う道路遺構は後世の削平により検出されなかつたと考えられる。

外郭西門は平行柱筋の方向が真北ではなく、すべての時期において北で東に振れていることは、こうした尾根状の地形に沿って造られた道路を受けるためであり、地形的な制約によるものであることを改めて確認することができる。

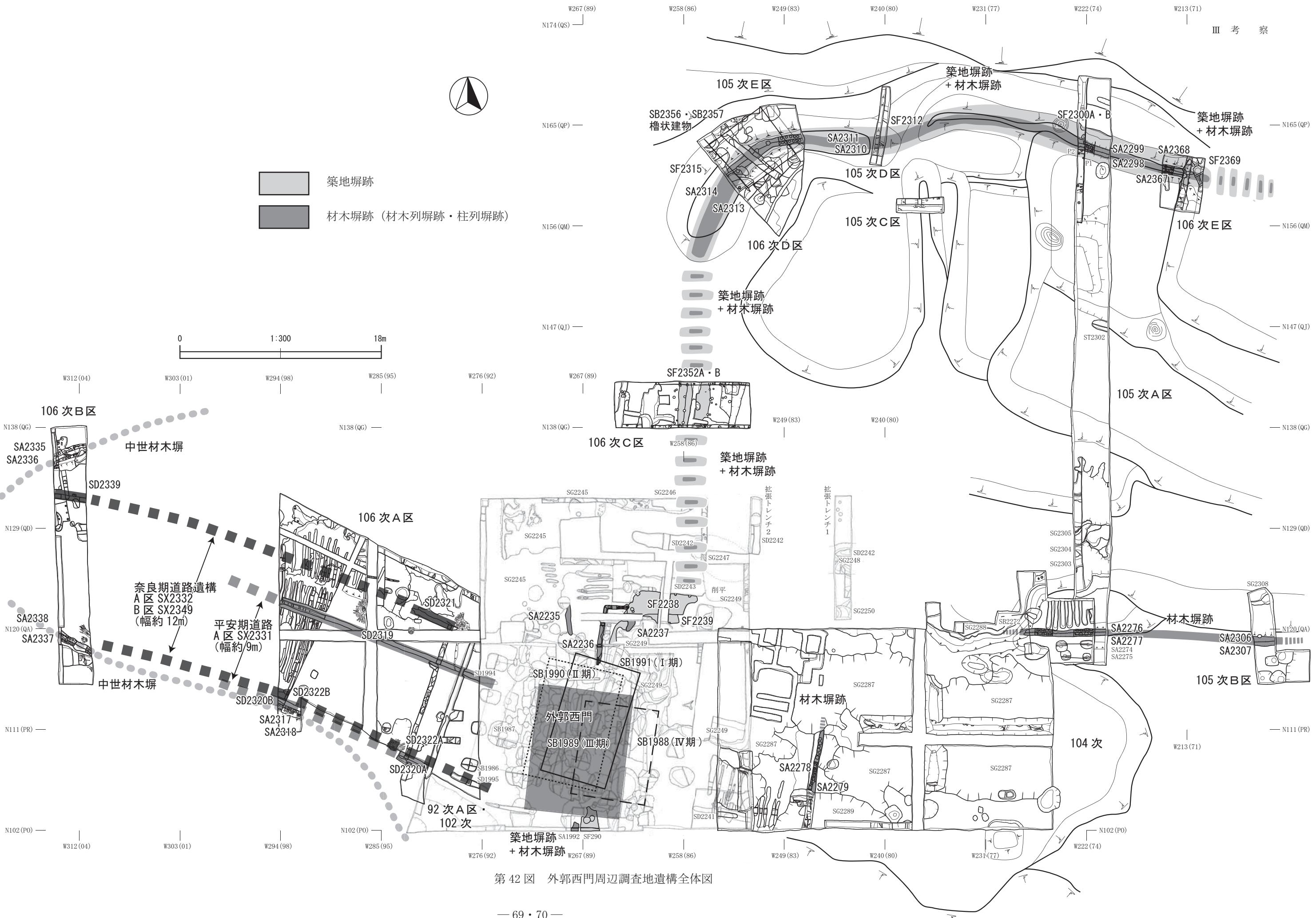
また、こうした城外西大路は外郭西門から尾根筋に沿って北西方向に延びていることが予想される。この先には秋田城の創建に関わった人々の集落が発見されている後城遺跡がある（第43図、註10）。この遺跡の方向に城外西大路が延びていることは重要なことであり、城外西大路の方向をさらに追求し後城遺跡の遺構配置の関係を具体的に検討していかなければならない。

表11 城外西大路関連遺構一覧表

道路遺構名	北側側溝	南側側溝	対応する外郭西門	時期区分	備考
SX2332(106次A区)	SD2321(106次A区)	SD2322A・B(106次A区)	西門Ⅰ・Ⅱ期	外郭Ⅰ・Ⅱ期	奈良期
SX2349(106次B区)	SD2339(106次B区)	SD1995(92次A区)			
SX2331(106次A区)	SD2319(106次A区)	SD2320A・B(106次A区)	西門Ⅲ・Ⅳ期	外郭Ⅲ期	平安期 (8世紀末～9世紀前半)

8 外郭西門周辺の外郭区画施設について

C～E区の調査結果により、これまで課題であった外郭西門北東部、すなわち秋田城外郭北西隅の区画施設の状況が明らかとなった（第42・43図、表12）。第102次調査において、外郭区画施設は外郭西門の北側に取り付いて北へ約5m延びた後に東に屈曲することが判明していた。第102次調査地においてはSF2338築地塀跡は東に6m延びたあたりで削平により検出できなくなっていた。今回新たに第106次調査地C区においてSF2352A・B築地塀跡を発見したことにより、さらに北側へ屈曲し延びることが確認された。そして第106次D区（SA2313材木列塀跡・SA2314柱列塀跡・SF2315築地塀跡）まで延び、ここから東へ屈曲し、第105次調査地D区（SA2310材木列塀跡・SA2311柱列塀跡・SF2312築地塀跡）、第105次調査地A区北側（SA2398材木列塀跡・SA2299柱列塀跡・SF2300A・B築地塀跡）を通り、第106次調査地E区（SA2367材木列塀跡・SA2368柱列塀跡・SF2369築地塀跡）へと繋がる。第106次調査地E区からはそのまま東へ直進し、沢を横断していくものと考えられる。第106次C区では削平のため、材木列塀跡・柱列塀跡は検出されなかつたものの、外郭Ⅰ・Ⅱ期の築地塀跡と外郭Ⅲ・Ⅳ期の柱列塀跡・材木列塀跡の一連の外郭区画施設がほぼ同じラインで確認されることが判明した。したがって、秋田城北西隅の外郭線は、外郭西門から大きく北東部へ張り出す形となっている。このように外郭西門の北東部が大きく張り出す意図は、第106次調査D区で検出された櫓状建物（SB2356・SB2357掘立柱建物跡）が配置



第42図 外郭西門周辺調査地遺構全体図

されることからみて、眺望空間の確保であると考えられる。第106次調査地D区は外郭西門から直線距離で約55mの地点に位置し、外郭西門付近よりも標高が高く、非常に見晴らしの良い地点である。ここに櫓状建物があるとすれば、北東方向には新城窯跡群（註11）、北西方向には男鹿半島、南西方向には海岸線まで一望できるだろう。また、このような外郭線と外郭西門の配置関係をみると、外郭西門は外郭線からクランク状に西側に張り出している形となる。

以上のように、外郭北西隅の外郭線と外郭西門との関係について詳細が判明した。基本的に秋田城の外郭線は上述のような形状であったと考えられる。ただし、この外郭線とは別に、外郭西門の東側（城内側）に第104次調査地の SA2278・SA2279・SA2276・SA2277材木塀跡、第105次調査地B区の SA2306・SA2307材木塀跡の区画施設が検出されている。これらは検出層位面からは少なくとも8世紀末・9世紀初頭以降で、SA2278材木塀跡からは10世紀前葉の遺物が出土している。これらの区画施設がどのような機能をもつのかについては、今後の課題である。

表12 第105・106次調査地外郭区画施設遺構対応表

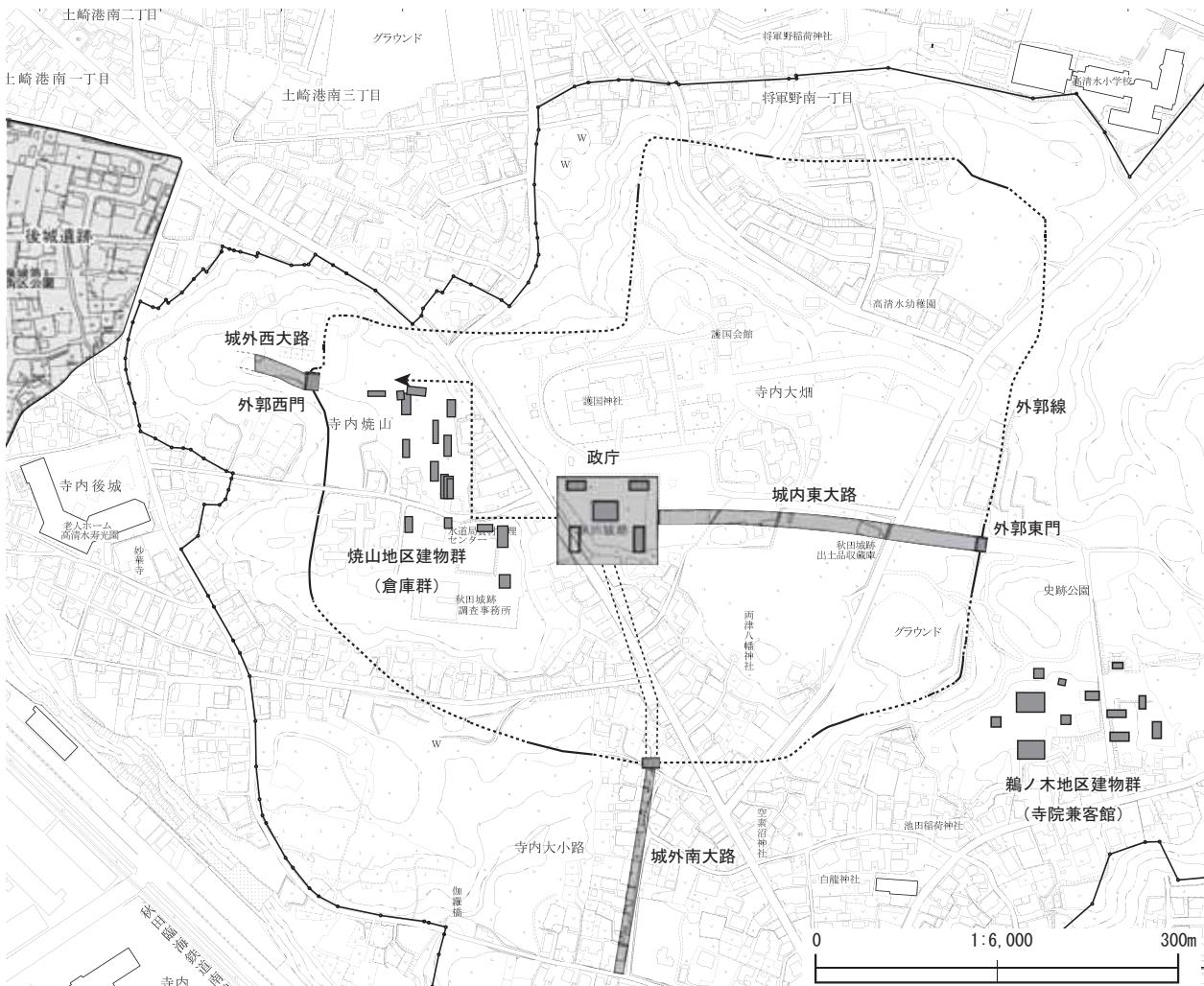
時期	102次	105次A区	105次D区	105次E区 106次D区	106次C区	第106次E区	備考
外郭IV期	SA2335	SA2298	SA2310	SA2313 SB2356	—	SA2367	材木列塀
外郭III期	SA2336 (SA2337)	SA2299	SA2311	SA2314 SB2357	—	SA2368	柱列塀
外郭II期	SF2338	SF2300B	SF2312	SF2315	SF2352B	SF2369	非瓦葺き築地塀
外郭I期	SF2339	SF2300A			SF2352A		瓦葺き築地塀

9 第106次調査の成果と課題

第106次調査の結果により、以下の7点について成果と課題があった。

- ① A・B区の調査により幅約12mの奈良期道路遺構（A区 SX2332道路遺構、B区 SX2349道路遺構）と幅約9mの平安期道路遺構（A区 SX2331道路遺構、8世紀末から9世紀前半）を検出し、城外西大路を発見した。
- ② 城外西大路の奈良期道路遺構は時期区分としては外郭I・II期で、外郭西門I期・II期に付属する大路であると考えられた。また、平安期道路遺構は時期区分としては外郭III期で、外郭西門III期・IV期に付属する大路であると考えられた。
- ③ 城外西大路は尾根筋に沿って北西方向に延びていることが予想され、秋田城の創建に関わった人々の集落遺跡である後城遺跡の方向へ向かっていることがわかった。今後、城外西大路の方向の確定と後城遺跡との位置関係の検討が課題である。
- ④ A・B区において14世紀代と考えられる材木塀跡が南側で2条、北側で2条検出され、当該地における中世後期の利用に関する新たな知見を得た。
- ⑤ C・D・E区の調査により、外郭I・II期の築地塀跡、外郭III・IV期の柱列塀跡・材木列塀跡が検出され、外郭西門北東部の外郭線を把握することができた。そして外郭西門は外郭線からクランク状に西側に張り出すことがわかった。
- ⑥ 外郭線は、外郭西門北東部が北側に張り出し、その部分に櫓状建物が検出された。このことから、外郭西門北東部の張り出しは眺望空間を取り込むためであると考えられた。
- ⑦ 今回確認できた外郭区画施設とは別に外郭西門の東側（城内側）にあたる第104次調査地・第105次調査地B区で発見されている材木塀跡の区画が存在しており、これらの機能について追求する必要があ

III 考 察



第43図 秋田城跡基本構造関係位置図

る。

註1 これ以降の考察における肥前系陶磁器の年代比定は下記に基づき記述する。

九州近世陶磁学会 2000 『九州陶磁の編年—九州近世陶磁学会10周年記念—』

註2 これ以降の考察における中世陶磁器の年代比定は下記の論考に基づき記述する。

吉岡康暢 1994 『中世須恵器の研究』吉川弘文館

藤澤良祐 2008 『中世瀬戸窯の研究』高志書院

小野正敏 1982 「14~16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』 2 pp. 71-88

森毅 2005 「中世後期輸入陶磁器の分類と変化—青花の分類と編年を注視に—」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～資料集』 pp. 445-464

註3 これ以降の考察における古代出土土器の年代比定は、以下一連の秋田城跡出土土器編年成果に基づき記述する。

小松正夫 1992 「秋田城とその周辺地域の土器様相（試案）—第54次調査の木簡・漆紙文書伴出土器を中心にして—」『第18回古代城柵官衙遺跡検討会資料』 pp. 139-144

伊藤武士 1997 「出羽における10・11世紀の土器様相」『北陸古代土器研究』 7 pp. 32-44

小松正夫・日野久・西谷隆・伊藤武士 1997 「秋田城跡出土土器と周辺窯の須恵器編年（試案）」『日本考古

学協会 1997年度秋田大会蝦夷・律令国家・日本海—シンポジウムⅡ・資料集—』 pp. 18-30

秋田市 2001 「第7章 秋田城跡の発掘調査 九 秋田城跡出土の土器編年」『秋田市史 第7巻 古代 史料編』 pp. 383-390

秋田市教育委員会 2007 「秋田城跡の土器編年」『秋田城跡Ⅱ—鵜ノ木地区—』 pp. 340-345

神田和彦 2010 「ケズリのある赤い坏—古代秋田郡域の赤褐色土器坏B—」『北方世界の考古学』すいれん舎 pp. 187-210

註4 これ以降の考察における弥生土器の年代比定は下記の論考に基づき記述する。

根岸洋 2005 「志藤沢式土器の研究（1）～秋田大学所蔵資料の再報告を中心に～」『秋田考古学』49 pp. 1-33

根岸洋 2006 「志藤沢式土器の研究（2）—秋田県内の弥生前期・中期の土器編年について—」『秋田考古学』50 pp. 1-23

根岸洋 2007 「もう一つの志藤沢式土器—奥山潤氏の型式設定資料をめぐって—」『秋田考古学』51 pp. 27-36

註5 秋田城出土瓦については、表13に基づき分類した。

秋田市教育委員会 2009 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2008』

表13 秋田城出土瓦の分類

分類	細分	色調	焼成	質	備考	時期区分	年代
1群	1-1群	灰白	良好・やや不良	軟質	・丸瓦は無段タイプのみ	政庁Ⅰ期 (外郭Ⅰ期)	8世紀 第2四半期
	1-2群	灰色					
	1-3群	黒色（いぶし焼成）					
2群		青灰・灰・暗灰	良好・堅緻	硬質	・砂粒が多い ・平瓦では特に凸面に砂粒が目立つ ・補修瓦か	政庁Ⅱ期 (外郭Ⅱ期)	8世紀後半
3群	3-1群	暗灰～灰	良好・堅緻	硬質	・丸瓦は有段タイプ ・平瓦は板状工具で撫で調整 ・成形時に粘土板を重ねた痕跡 ・古城廻窯跡産か	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	3-2群	灰・灰黄・黄灰					
4群	4-1群	橙色系を主体	やや不良	軟質	・丸瓦は有段タイプ	政庁Ⅲ期以降 (外郭Ⅲ期以降)	8世紀末・ 9世紀初以降
	4-2群	黄灰・ にぶい黄灰～褐灰色					

※秋田市教育委員会2009「IV 考察 ⑤外郭西門跡および周辺出土の瓦について」をもとに作成

註6 秋田市教育委員会 2015 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2014』

註7 秋田市教育委員会 2005 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2004』

註8 秋田市教育委員会 2007 『秋田城跡 秋田城跡調査事務所年報2006』

註9 秋田市教育委員会 1994 『秋田城跡 平成5年度秋田城跡調査概報』

註10 秋田市教育委員会 1981 『後城遺跡発掘調査報告書』

註11 伊藤武士 1998 「秋田城跡周辺須恵器窯の動向について」『秋田考古学』46 pp. 1-35

IV 秋田城跡環境整備事業

平成27年度の整備

今年度は、平成28年度4月開館予定のガイダンス施設と道路を隔てた秋田城跡の中心施設である政庁域や外郭東門地区、水洗廁舎を復元した鶴ノ木地区などを結ぶための階段を設置した。また、ガイダンス施設隣接地にはイベントやガイド活動など様々な活用事業に資する多目的広場を造成した。

工事の概要は次のとおりである。

実施地区 焼山・大畠地区

整備面積 940m²

工種	細目	数量	金額(千円)	備考
敷地造成工	土工	1式	589	切・盛土
園路広場工			5,258	
	法覆工	1式	174	人力盛土法面整形、野芝張芝
	多目的広場工	1式	3,624	広場造成
	階段工	1式	1,460	階段2箇所
直接工事費計			5,847	



ガイダンス施設側広場・階段（東から）



政庁側階段（西から）

V 秋田城跡保存活用整備事業

史跡秋田城跡を、市民の郷土学習の場として有効活用を図るために、平成27年度は下記の事業を実施し、全体で6,109名の参加者があった。

1 学習講座（5月28日～30日）

一般市民を対象に、秋田城跡全般について、発掘調査成果、文献史料、環境整備事業等を学んでもらう市民講座を開催した。郷土学習の機会として秋田城跡の周知を図るとともに、ボランティアガイド養成講座も兼ねて実施された。参加者17名。

2 史跡秋田城跡パネル展（8月1日～8月31日・秋田市ポートタワーセリオン、10月10日～11月8日・

秋田市民俗芸能伝承館旧金子家住宅、イオン土崎港店11月12日～11月15日、北部市民サービスセンター11月25日～12月23日）

市内の観光施設および商業施設の展示会場4箇所で、一般市民、近隣の小中学生を対象に、秋田城についてわかりやすく解説したパネル展を開催した。また、パネル展のテーマに合わせた「秋麻呂くん通信」を発行し、会場で配布している。平成27年度のテーマは「秋田城跡－よみがえる古代交流－」で行った。見学者は、ポートタワーセリオン1,131名、民俗芸能伝承館1,131名、イオン土崎港店387名、北部市民サービスセンター1,074名。

3 史跡探訪会（6月20日）

史跡内の自然観察会を開催した。市街地内にありながら、良好に保存された自然環境の観察を通じ、史跡指定による環境保全の側面も理解してもらうことを目的とし、史跡内を散策、動植物観察を行った。参加者11名。

4 発掘体験教室（7月25日）

小中学校を対象に発掘調査を実際に体験することを通じ、地域の歴史や秋田城跡への理解と関心を深めてもらうことを目的として体験教室を開催した。参加者11名。

5 史跡散策会（9月19日）

一般市民を対象に、ボランティアガイドの説明による史跡内の散策会を開催した。参加者17名。

6 東門ふれあいデー（10月4日）

秋田城跡外郭東門周辺を会場として、史跡の保護と活用を推進するために、地域住民と共同で各種イベントを開催した。ボランティアガイドの会等関係団体、地域住民による支援団体、地元町内会からなる実行委員会の主催、運営で行われ、調査事務所としては情報発信のためのパネル展示、のぼりの製作・活用、リーフレットの配布等を行った。参加者2,190名。

7 第106次発掘調査現地説明会（8月29日）

焼山地区北西部の発掘調査成果を公開した。参加者80名。

8 出前講座（7月15日）

近隣の高清水小学校6年生を対象に、秋田城跡について出土遺物や遺構の画像等を用い解説する講座を実施した。生徒に秋田城跡への関心や理解を深めてもらう機会とするため、郷土学習の授業の一環として調査事務所職員が講師となり授業を担当した。参加生徒数60名。



1 学習講座



2 パネル展（北部市民サービスセンター）



3 史跡探訪会



4 発掘体験教室



5 史跡散策会



6 東門ふれあいデー



7 第106次現地説明会



8 出前授業

VI 秋田城跡現状変更

秋田城跡調査事務所では、秋田城跡の発掘調査や環境整備事業、史跡の管理・活用の他に、現状変更に伴う調査を実施して、史跡内の遺構や歴史的景観の保護に努めている。しかし、史跡内は歴史的・自然的環境を活かすと同時に、居住地であることから住民のより良い住環境の整備も必要であり、現状変更の必要性も生じてくる。そこで、やむなく史跡内の現状を変更する場合は、秋田市教育委員会が窓口となって申請者および関係機関と史跡保護のための協議を慎重に行い、史跡への影響がない範囲で最小限の対応を行っている。

平成27年の現状変更申請は15件であったが、掘削が最小限で、現状変更が軽微なものについては工事の際に立会調査を、その他については発掘調査を行って対応した。その内容は下記のとおりである。

- ①民間工事9件…住宅新築・解体工事（6・12～15）、電柱等工事（1・5・11）、樹木伐採・駐車場舗装（4）
- ②公共工事4件…道路修繕（8・9）、側溝改良（10）、樹木伐根（7）
- ③史跡の保護や保存に係わるもの2件…発掘調査（2）、環境整備（3）

表14 現状変更一覧

番号	申請者	申請地	変更事項	申請年月日	許可年月日・番号	対応
1	東日本電信電話株式会社	寺内大畑2番	電柱移設	平成27年1月22日	平成27年1月26日 秋市教指令第7号	立会調査
2	秋田市教育委員会教育長	寺内焼山89番・90番・91番・218番・219番	発掘調査	平成27年2月3日	平成27年3月13日 26受府財第4号の1941	発掘調査
3	秋田市教育委員会教育長	寺内焼山51番・56番地内・71番1・71番3・74番2・74番3地内、大畑338番1地内・104番1地内・156番地内	史跡公園整備	平成27年2月3日	平成27年3月13日 26受府財第4号の1942	立会調査
4	個人	寺内鶴ノ木140番2	樹木伐採・駐車場舗装	平成27年2月10日	平成27年2月16日 秋市教指令第35号	立会調査
5	東日本電信電話株式会社	寺内堂ノ沢	支線取替	平成27年2月17日	平成27年2月24日 秋市教指令第78号	立会調査
6	個人	寺内大小路52番4	住宅新築	平成27年2月19日	平成27年3月3日 秋市教指令第96号	立会調査
7	秋田市長	寺内大畑地内	樹木の伐根	平成27年3月9日	平成27年3月9日 秋市教指令第154号	立会調査
8	秋田市長	寺内高野・大畑地内	道路修繕	平成27年3月11日	平成27年3月13日 秋市教指令第166号	立会調査
9	秋田市長	寺内大畑地内	道路修繕	平成27年3月30日	平成27年3月30日 秋市教指令第310号	立会調査
10	秋田市長	寺内焼山地内	側溝改良	平成27年7月27日	平成27年7月27日 秋市教指令第438号	立会調査
11	東北電力株式会社	寺内焼山地内	電柱移設	平成27年8月27日	平成27年8月27日 27受府財第4号の1015	立会調査
12	個人	将軍野南一丁目212番14	住宅新築	平成27年9月4日	平成27年9月8日 秋市教指令第443号	立会調査
13	個人	将軍野南一丁目212番84	住宅新築	平成27年9月17日	平成27年9月24日 秋市教指令第444号	立会調査
14	個人	寺内堂ノ沢二丁目62番、62番1地内	住宅解体・新築	平成27年10月23日	平成27年10月28日 秋市教指令第448号	立会調査
15	個人	寺内焼山56番	住宅解体	平成27年12月11日	平成28年1月15日 27受府財第4号の1674	立会調査

古代秋田城の築地塀を構成する白色および褐色粘土の互層構造について（その1）

秋田大学国際資源学部 教授今井忠男、講師西川治、学芸員千田恵吾
秋田大学工学資源学部 4年生栗崎笑、柴田いずみ

1. はじめに

これまでの発掘調査から、秋田城の築地塀は、白色と褐色の縞模様（互層）になっていることが知られているが、その詳細はわかっていない。本築地塀の主要な材料とされる土取場の粘土は、赤褐色であり、白色部分の色とは全く異なることから、別な材料が使用されたと考えられる。古来より、粘土等の土質材料を硬化させるには、白色の漆喰（消石灰）が配合されてきたが、簡易分析によって、この白色部の試料には、カルシウムはほとんど含まれていないことがわかっている。したがって、この白色部を伴う本築地塀の互層構造は、従来の古代土木技術とは異なるものと思われる。

本研究では、この白色部の物質を特定し、それらを互層にすることで得られる力学的な効果について検討することで、築地塀に関する古代土木技術を解明することを目的としている。本報では、白色部の鉱物特定の結果のみについて報告し、互層構造の力学的な解説については、別報（その2）で行う。

2. 調査方法

(1) 調査試料調査に用いた試料の一覧を表1に示す。試料は大別してA～Cの3種に分けた。分類Aは、古代築地塀およびその原料粘土を示しており、築地塀試料（白色部、褐色部）と土取場粘土、対照試料として秋田城跡の表土も用いた。また、分類Bは、政庁の白壁であり、この試料は、秋田城の築城で用いられた最も白い鉱物であることから、この鉱物が築地塀の白色部に配合された可能性は高い。さらに、分類Cは、秋田県内の白色な粘土および鉱物を示しており、秋田県南部の八沢木地区で採掘されている白粘土、北秋田市で生産されている珪藻土粉とパーライト（火山ガラス）粉を分析対象とした。なお、今回用いた珪藻土粉は工業利用を目的に生産されており、1,000°Cの熱処理によって有機物等を焼却し、白色に精製している。これら試料が産する地層の特定については、本多¹⁾および村上ら²⁾の分類によった。

表1 調査試料の名称および採取場所 (*1,000°Cで焼成処理)

分類	試料番号	試料名称	試料の色	採取場所および地層
A	A-1	築地塀白色部	薄褐色	第105次調査地A区 SF2300築地塀跡
	A-2	築地塀褐色部	赤褐色	第105次調査地A区 SF2300築地塀跡
	A-3	土取場粘土	赤褐色	第106次調査地C区、潟西層（更新世）
	A-4	秋田城跡表土	黒色	第106次調査地E区
B	B-1	政庁白壁	白色	秋田城政庁内
C	C-1	八沢木粘土	灰白色	横手市大森町八沢木地区、大森層（中新世中期） ¹⁾
	C-2	加熱珪藻土粉*	白色	北秋田市綴子地区、岩谷層（中新世中期） ²⁾
	C-3	パーライト粉	灰白色	北秋田市綴子地区、前山川層（鮮新世） ²⁾

(2) 分析方法 本研究では、X線回折装置（XRD）によって、試料内の主要鉱物および粘土鉱物を特定した。ここで、試料は粘土鉱物を特定するために水簸（すいひ）処理した試料を用い、さらにエチレングリコール（EG）処理した試料を用いて、スメクタイトとバーミキュライトとの区別もおこなった。また、エネルギー分散型X線分析装置（EDS）による主要元素の定量的な分析もおこなった。最後に、偏光顕微鏡下での観察によって、各試料のシリカ系鉱物の起源について検討した。

3. 調査結果

3-1 築地塀中の白色鉱物と政庁の白壁の成分との関連

図1(A)～(C)に試料分類ごとのX線回折パターンを示す。また、表2に一部試料の元素分析結果も示した。図1(A)より、築地塀関連の試料(A-1～A-4)は、X線回折のパターンに大きな変化はなく、石英およびクリストバライト粒子を主成分とした、粘土鉱物のカオリナイトとバーミキュライトを含む粘土であることがわかる。ただし、築地塀褐色部(A-2)では、クリストバライトおよび石英のピークが弱く、非結晶質な物質が多いと推定される。次に、図1(B)より、政庁白壁試料(B-1)の主要鉱物はクリストバライト粒子であり、石英は少なく、また粘土鉱物も見られないことがわかる。すなわち、白壁の主原料はクリストバライトの微粉であって、粘土鉱物や漆喰などの固結する要素が少ないとから、単なる白色の化粧材と推定される。

3-2 秋田県内の白色な粘土および鉱物と白壁との関連

図1(C)のX線回折パターンより、八沢木粘土(C-1)は石英およびクリストバライトを主鉱物としているが、ピークが弱く非結晶質な物質が多いと推定される。また、C-1は、粘土鉱物としてカオリナイトおよびバーミキュライトは含有せず、スメクタイトを含む粘土であることから、白壁試料(B-1)とは異なることがわかる。次に、加熱処理された珪藻土(C-2)は、クリストバライトのピークが強く、他の鉱物の存在はほとんど見られず、白壁試料に近いパターンを示している。珪藻土を構成する非結晶質シリカ(オパールA)は、続成作用あるいは800°C以上の加熱で、オパールCT(クリストバライト)へ変化することから³⁾、この試料(C-2)は熱処理の精製工程で変成したものと考えられる。次に、パーライト粉(C-3)の回折パターンでは、クリストバライトより石英のピークが大きいことから、シリカの結晶化が進んでいる³⁾。また、図2の偏光顕微鏡下(直交ニコル)の観察より、八沢木粘土(C-1)の主成分は火山ガラス(暗灰色)であるが、政庁白壁(B-1)はクリストバライト(彩色)で、その起源は確定できない。

4. 考察とまとめ

以上の分析結果から、築地塀白色部(A-1)は、土取場粘土(A-3)にクリストバライトを主成分とする政庁白壁試料(B-1)を配合し、白色化させたものと推定される。また、この白壁試料の起源は未確定であるが、ごく少量の珪藻殻が認められたことから、熱変成した珪藻土の可能性もあると考えられる。

謝 辞 秋田大学において、EDS分析では緒方武幸博士に、XRD分析では院生の安東大輝君に、顕微鏡下での珪藻の観察では山崎智恵子博士にご協力いただいた。ここに記して感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 本多朔郎 (1990) : 粘土科学、第30巻、第3号、pp. 187-196.
- 2) 村上英樹ら (2008) : 地質学雑誌、第114巻、補遺、pp. 111-120.
- 3) 加川博敏ら (1991) : 鹿児島大学理学部紀要(地学・生物学)、第24号、pp. 1-22.

表2 調査試料の元素分析結果 (EDS法)

元素*	A-3	B-1	C-1
	土取場粘土	政庁白壁	八沢木白粘土
Si	49.3	56.4	77.8
Al	29.6	25.6	12.4
Na	0	10.3	0.4
Ca	0	7.7	2.3
K	6.6	0	2.1
Fe	13.2	0	2.9
Mg	1.3	0	2.1

(*炭素および酸素を除く元素割合%)

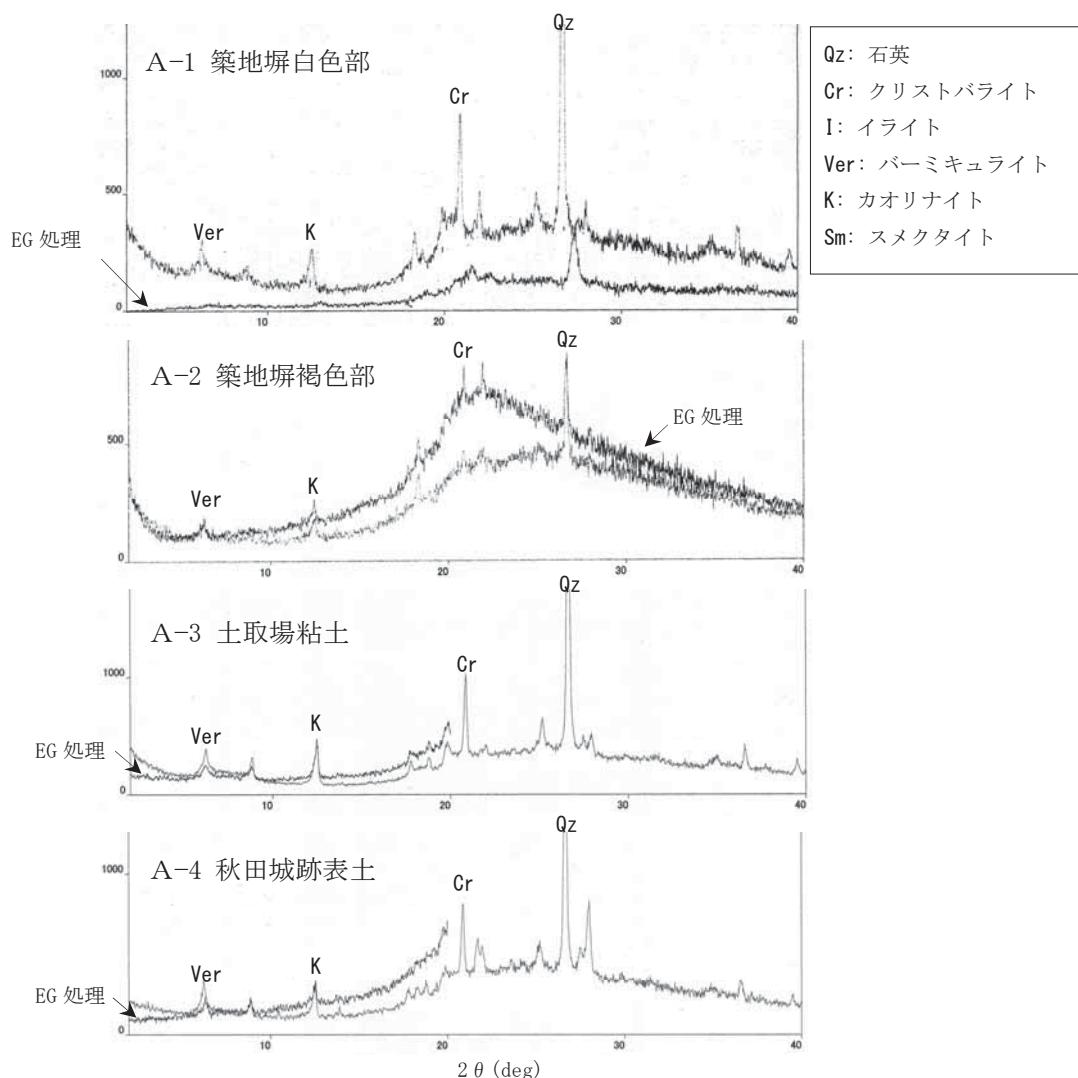


図1(A) 築地堀関連試料のX線回折パターン

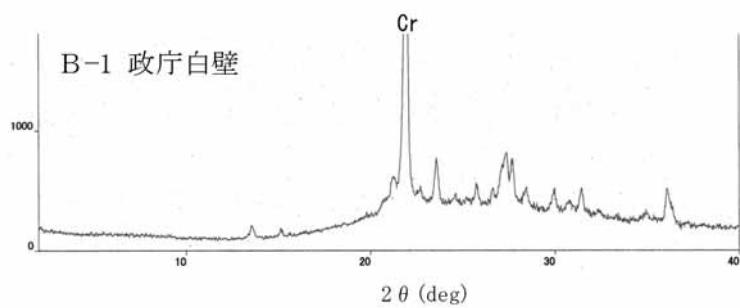


図1 (B) 政府白壁試料のX線回折パターン

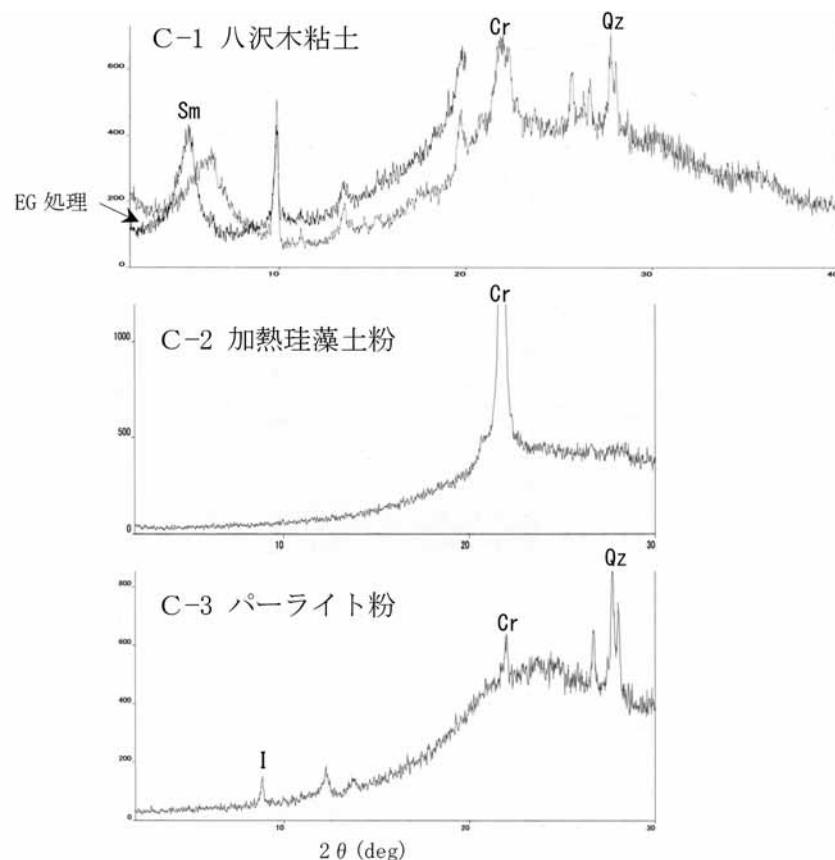


図1 (C) 秋田県内の白色な粘土および鉱物のX線回折パターン

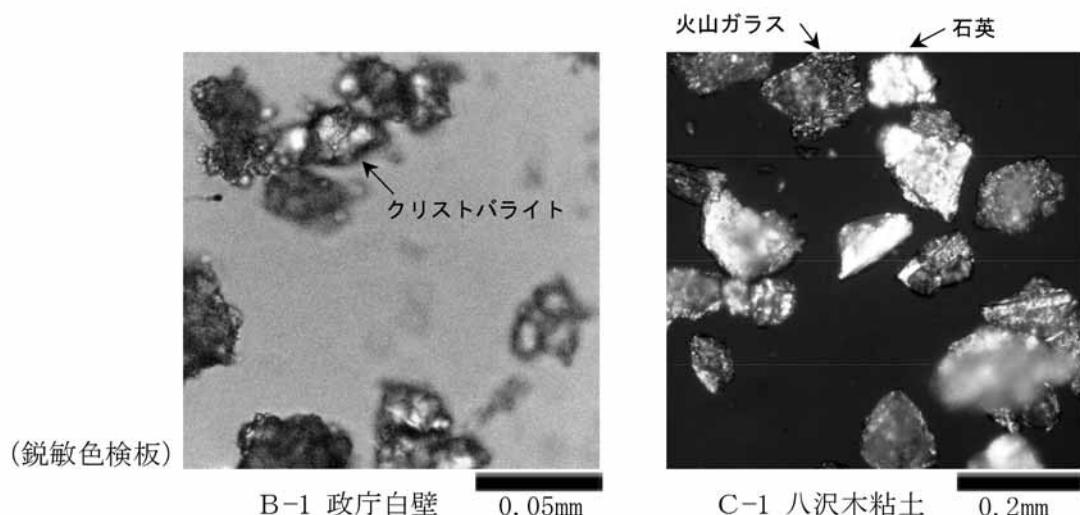


図2 偏光顕微鏡下（直交ニコル）における白壁および八沢木粘土の主要鉱物粒子



①第106次調査地A区第III・IV層面全景（SX2331・SX2332道路遺構等）（西から）



②第106次調査地B区第III・IV層面全景（SX2349道路遺構、SA2335～2338材木塀跡等）（南東から）



①第106次調査地C区SF2352築地塙跡検出状況（北から）



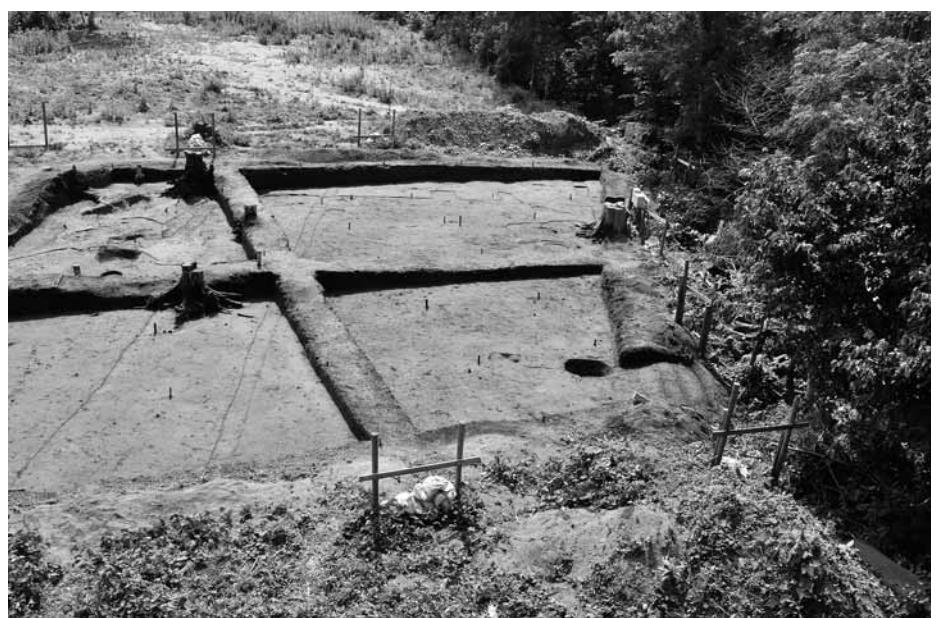
②第106次調査地D区IV層面全景（SB2356・2357掘立柱建物跡、SA2313・2314材木塙跡、SA2358柱列跡等）（西から）



①A区調査前状況（東から）



②A区第II-2・3、III層面全景
(東から)



③A区第II-4、III層面全景
(SD2319・SD2320A・B溝跡
SX2331道路遺構検出状況) (西から)



①A区第III、IV-1層面全景 (SX2331道路遺構検出、SD2319・SD2320A・B溝跡半裁状況全景) (西から)



②A区SD2319溝跡半裁状況 (西から)



③A区SD2319溝跡土層断面 (西側掘り下げ部分) (西から)



④A区SD2319溝跡土層断面 (東側掘り下げ部分) (西から)



① A区SD2320A溝跡検出状況（東から）



② A区SD2320A溝跡土層断面（東から）



③ A区SD2320B溝跡検出状況（東から）



④ A区SD2320B溝跡土層断面（東から）



⑤ A区SD2321溝跡検出状況（西から）



⑥ A区SD2321溝跡土層断面（東から）



⑦ A区SD2322A溝跡検出状況（東から）



⑧ A区SD2322A溝跡土層断面（東から）



① A区SD2320B・SD2322B溝跡、SA2317・SA2318
材木堀跡検出状況（東から）



③ A区SX2333溝状遺構検出状況（南から）



② A区SD2322B溝跡・SK2328土坑半裁状況（西から）



⑥ A区SX2334溝状遺構検出状況（南から）



⑤ A区SX2333溝状遺構半裁状況（南から）



① A区SG2323・SG2324土取り穴土層断面（南東から）



② A区SG2325土取り穴土層断面（西から）



③ A区SG2324土取り穴土層断面（南から）



④ A区SK2326土坑半裁状況（南から）



⑤ A区SK2327土坑半裁状況（南から）



⑥ A区SK2329土坑半裁状況（西から）



⑦ A区SA2317・SA2318材木堀跡一段下げ柱痕跡検出状況
(東から)



⑧ A区SA2317・SA2318材木堀跡半裁状況（柱痕跡検出）
(北から)

第106次調査地A区

図版7



① B区調査前状況（南から）



② B区SD2339溝跡検出状況（東から）



③ B区SD2339溝跡土層断面（東から）



④ B区SX2349道路遺構土層断面（南東から）



① B 区SD2340溝跡半裁状況（南から）



② B 区SI2343竪穴住居跡検出状況（南から）



③ B 区SI2343竪穴住居跡半裁状況（南から）



④ B 区SI2343竪穴住居跡 P 3 半裁状況（北から）



⑤ B 区SK2344土坑半裁状況（北から）



⑥ B 区SK2345土坑半裁状況（東から）



⑦ B 区SK2346土坑半裁状況（南西から）



⑧ B 区SK2348土坑半裁状況（東から）



① B 区SA2335・SA2336材木塀跡、SD2341溝跡半裁状況（東から）



② B 区SA2335材木塀跡土層断面（南から）



③ B 区SA2336材木塀跡土層断面（南から）



④ B 区SD2341溝跡土層断面（東から）



⑤ B 区SX2350土墨検出状況（南東から）



① B区SA2337・SA2338材木堀跡半裁状況（西から）



② B区SA2337・SA2338材木堀跡、SD2342溝跡半裁状況（東から）



③ B区SA2337・SA2338材木堀跡土層断面（北から）



④ B区SA2337・SA2338材木堀跡、SD2342溝跡土層断面
(東から)



⑤ B区SD2342溝跡半裁状況
(西から)

第106次調査地B区

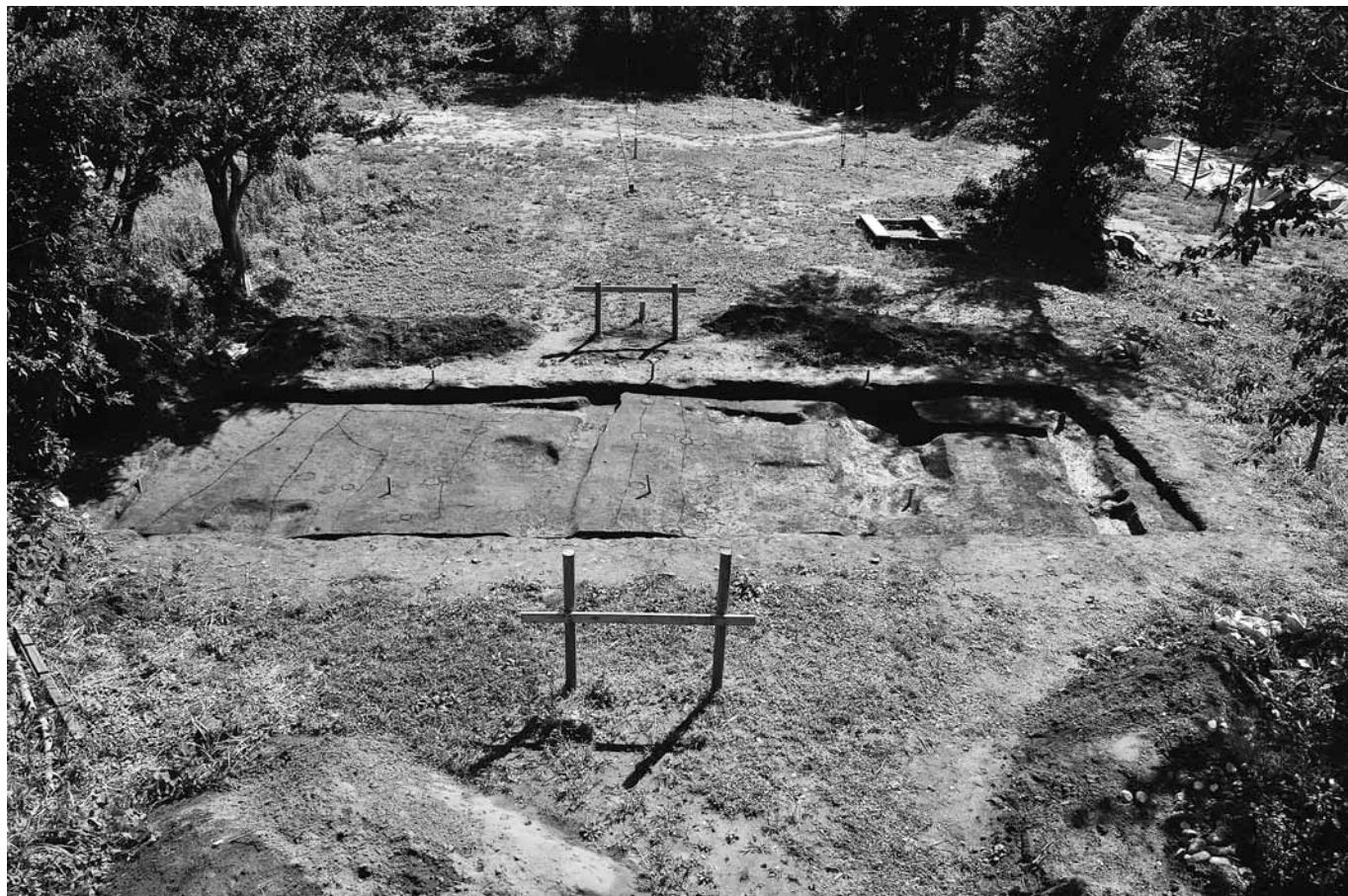
図版11



①C区調査前状況（南から）



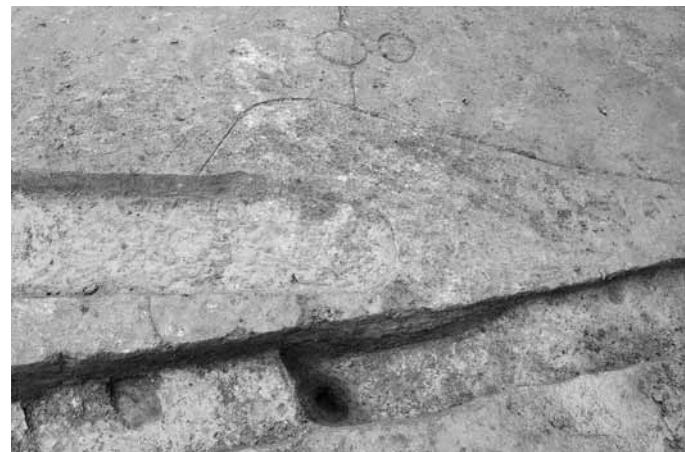
②C区SD2351半裁状況（北から）



③C区III層面全景（SD2351溝跡、SF2352A・B築地壝跡、SG2353～2355土取り穴検出状況）（北から）



①C区SF2352B北側サブトレンチ東端落ち込み部分土層断面(北から)



②C区SF2352B南側サブトレンチ東端落ち込み部分土層断面(南から)



③C区SF2352A北側サブトレンチ西端落ち込み部分土層断面(北から)



④C区SF2352A北側サブトレンチ西端落ち込み部分土層断面(南から)



⑤C区SF2352A南側サブトレンチ西端落ち込み部分土層断面(南から)



⑥C区SG2353土取り穴南側土層断面(北から)



⑦C区SG2354土取り穴南側土層断面(北から)



⑧C区SG2355土取り穴南側土層断面(北から)



①D区調査前状況（北東から）



②D区SA2313・SA2314材木堆跡検出状況（東から）



③D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P1検出状況（南から）



④D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P1半裁状況（南東から）



⑤D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P1半裁状況（北東から）



⑥D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P2半裁状況（西から）



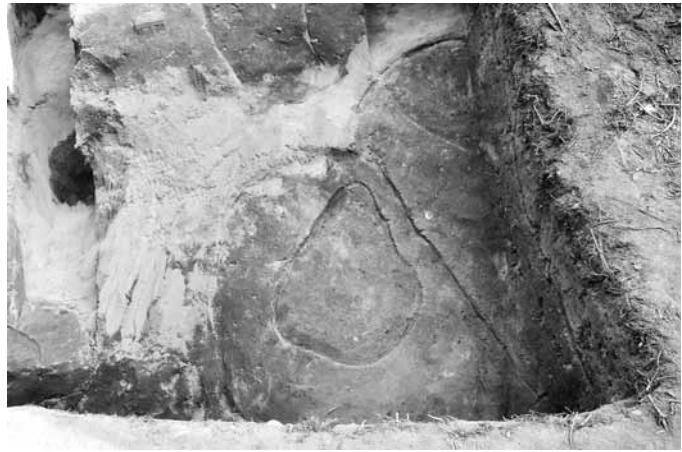
①D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P2検出状況（南から）



②D区SB2356掘立柱建物跡P3半裁状況（南西から）



③D区SB2357掘立柱建物跡P3半裁状況（南西から）



④D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P4検出状況（北から）



⑤D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P4半裁状況（南西から）



⑥D区SB2357掘立柱建物跡P4半裁状況（北から）



⑦D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P5検出状況（北から）



⑧D区SB2356・SB2357掘立柱建物跡P6検出状況（北から）



①D区SK2359半裁状況（南東から）



②D区SK2360半裁状況（南東から）



③D区SK2361土坑土層断面（北東から）



④D区SK2362土坑土層断面（東から）



⑤E区III層面全景（SA2367・2368材木塙跡、SF2369築地塙跡半裁状況）（東から）



① E区調査前状況（東から）



② E区SA2367・SA2368材木堆跡 1段下げる柱痕検出状況（西から）



③ E区SA2367・SA2368材木堆跡土層断面（南から）



④ E区SA2367・SA2368材木堆跡土層断面（西から）



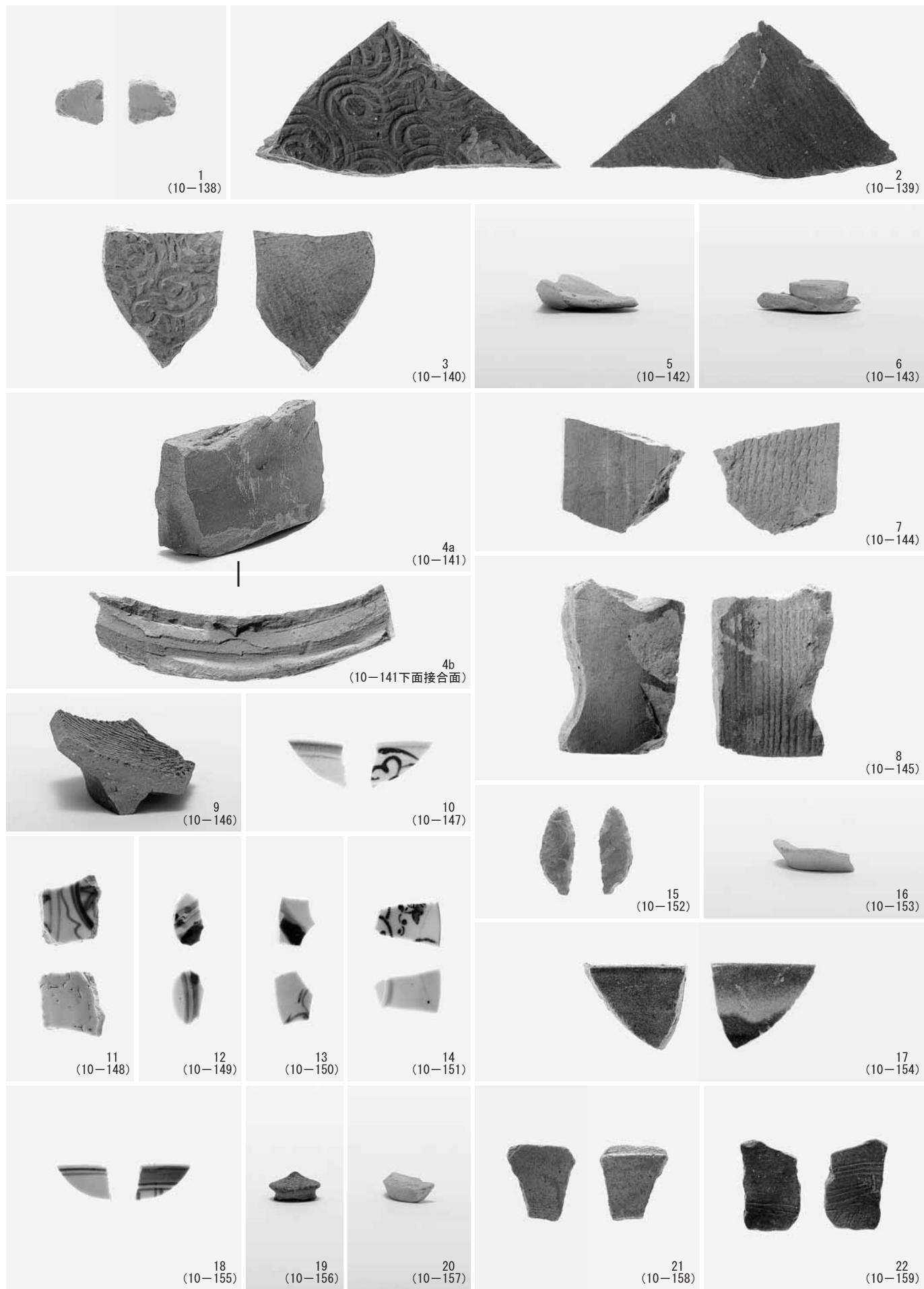
⑤ E区III層面全景および第105次調査地A区
SF2300築地堆跡発見地点遠景（東から）



⑥ E区SF2369築地堆跡土層断面（東から）



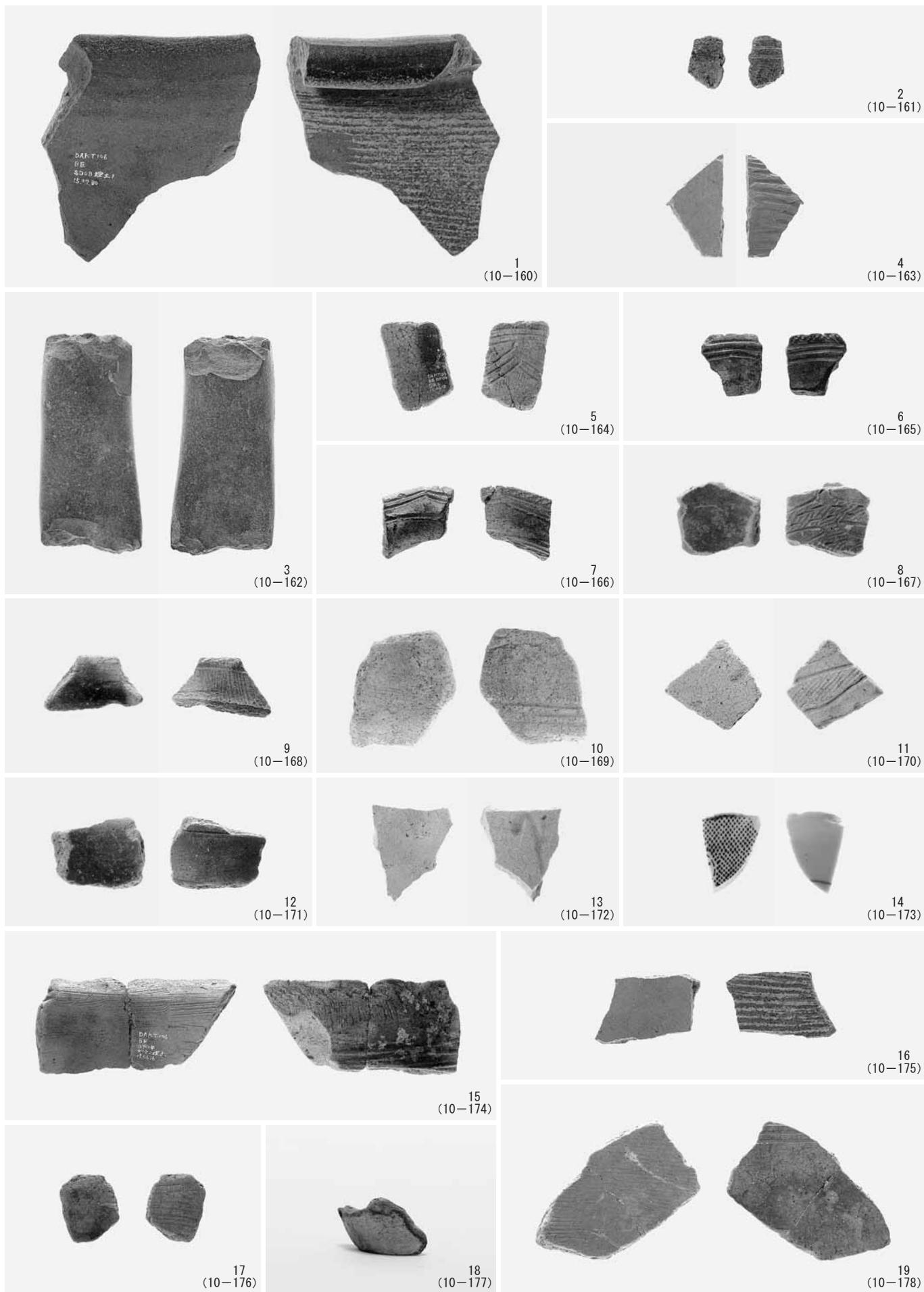
⑦ E区サブトレンチ南側深堀区土層断面（北東から）



1 SX2333 2~8 SG2325 9·10 A区第I層 11·12 A区第II-1層 13 A区第II-2層 14·15 A区II-3層
16~18 A区第II-4層 19~21 A区第III層 22 A区第V層 (7·8はS=1/4、15はS=1/2、それ以外はS=2/5)

図版18

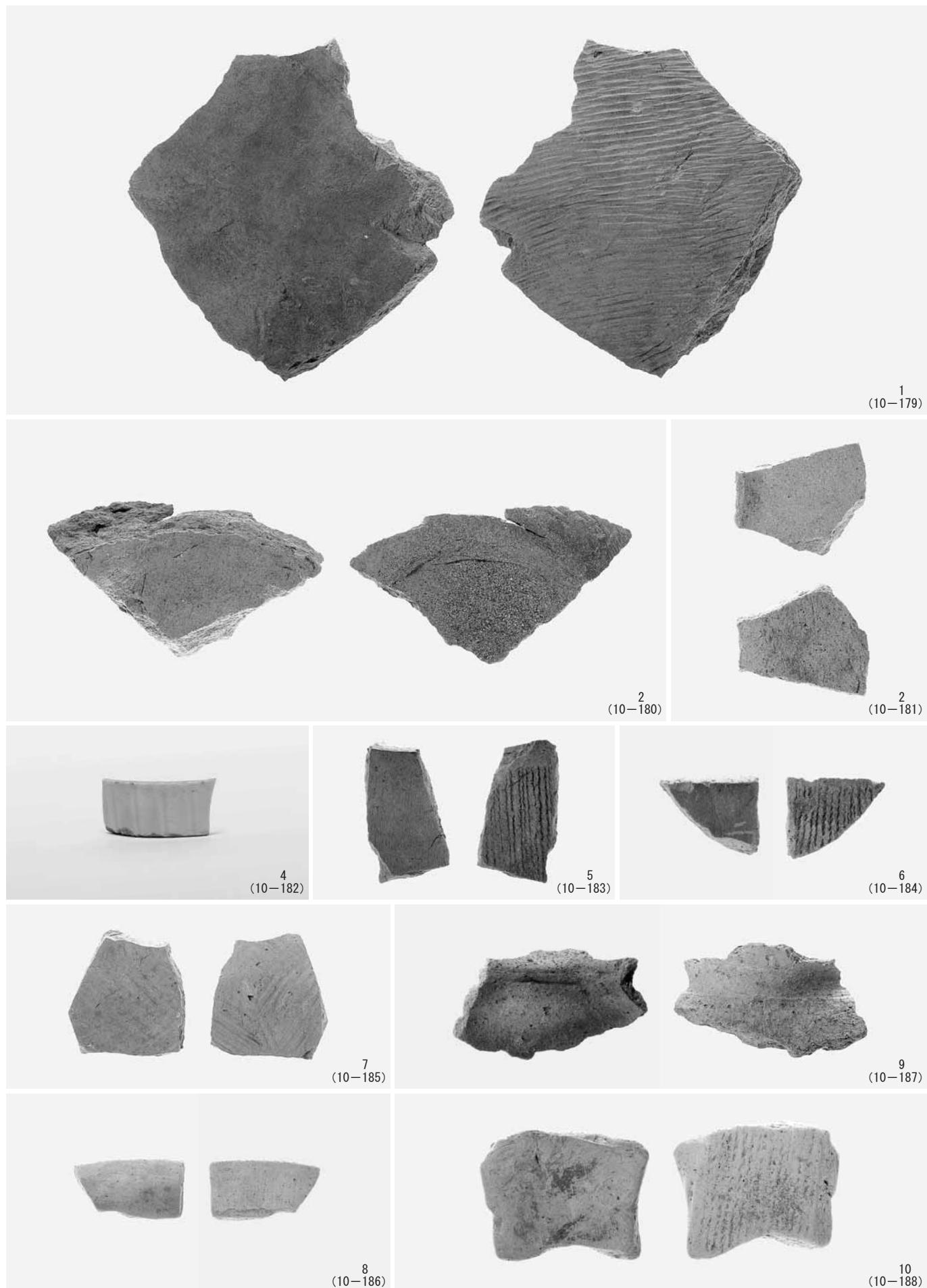
第106次調査地A区出土遺物



1 SA2338 2・3 SD2341 4 SD2342 5~14 B区第I層 15 B区搅乱 16 B区第II-1層 17~19 B第II-2層
(3はS=1/2、それ以外はS=2/5)

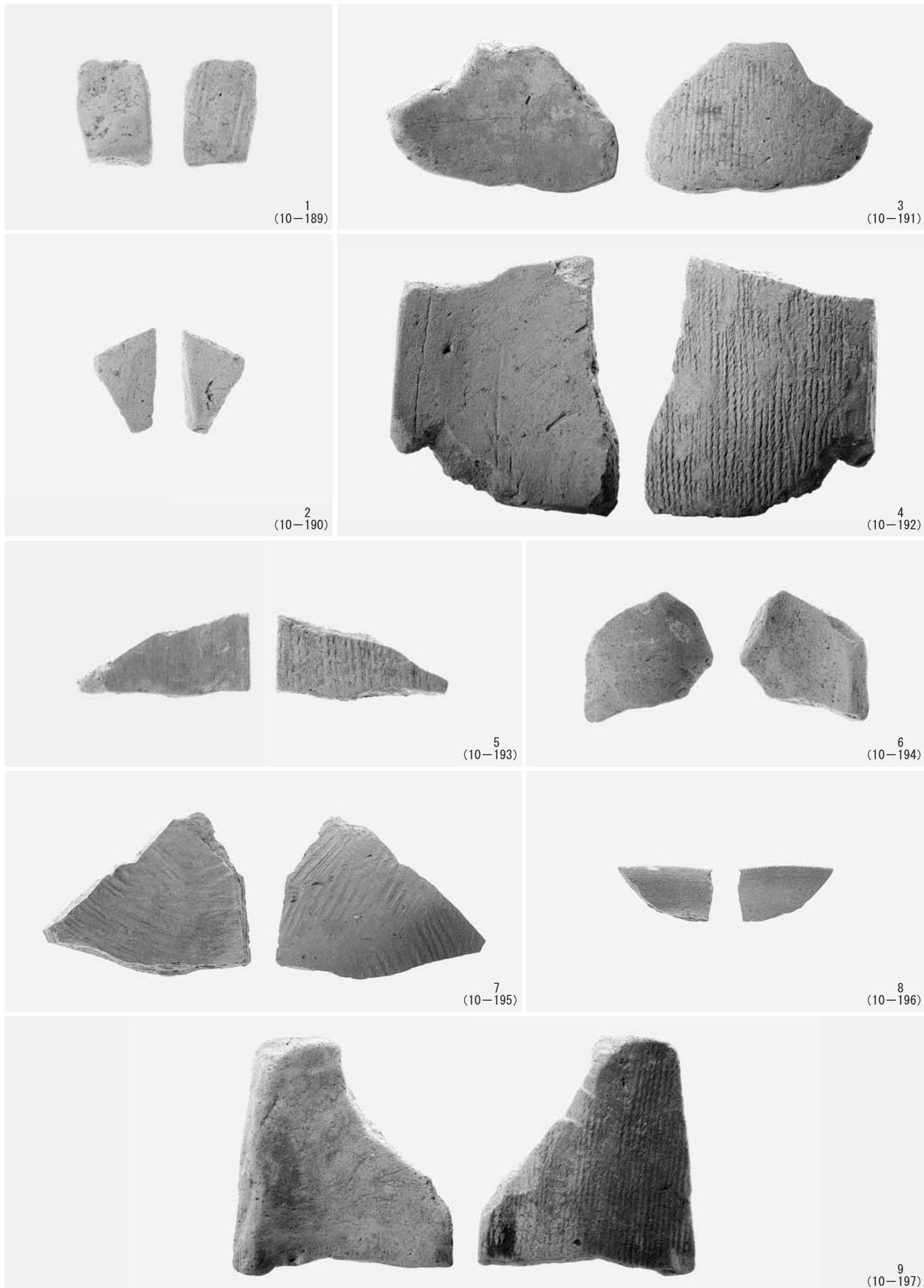
第106次調査地B区出土遺物

図版19



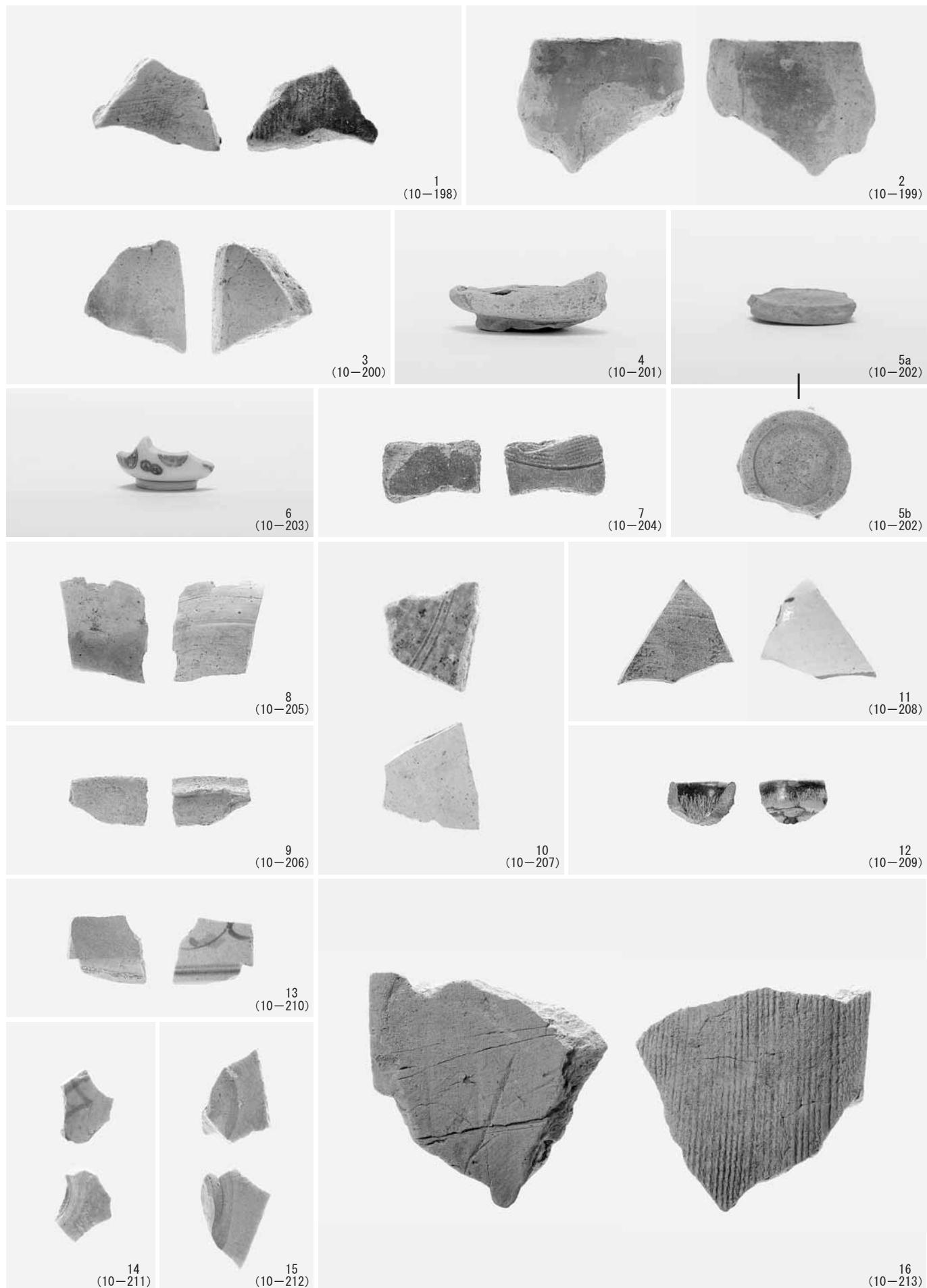
1～4 B区第II-3層 5 B区第I層 6 B区第II-4層 7 SD2351 8・9 SG2354 10 SF2352B
 (5・6・10はS=1/4、その他はS=2/5)

図版20 第106次調査地B区(1～6)・C区(7～10)出土遺物



第106次調査地C区出土遺物

図版21



1～3 SB2356 4 SA2314 6・7・16 D区第I層 8～15 D区第II層
(1～3・16はS=1/4、それ以外はS=2/5)

図版22

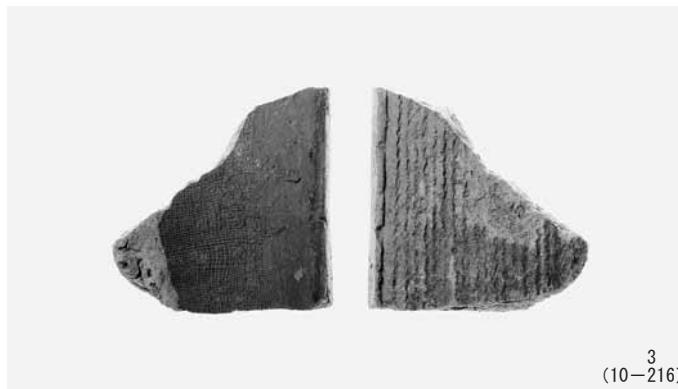
第106次調査地D区出土遺物



1
(10-214)



2
(10-215)



3
(10-216)



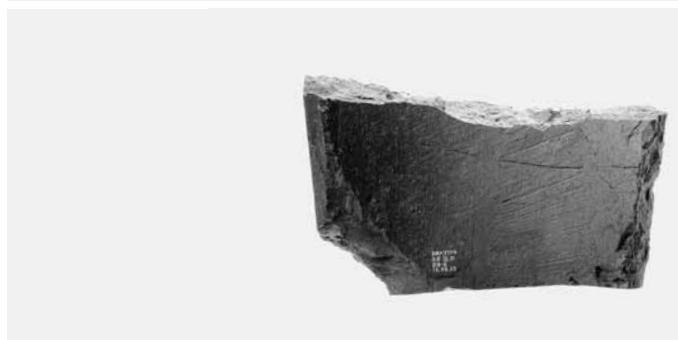
4
(10-217)



5
(10-218)



6
(10-219)



7
(10-220)



8
(10-221)

1～8 D区第I層 (すべてS=1/4)



1
(10-222)



2
(10-223)



2
(10-224)



4
(10-225)



5
(10-226)



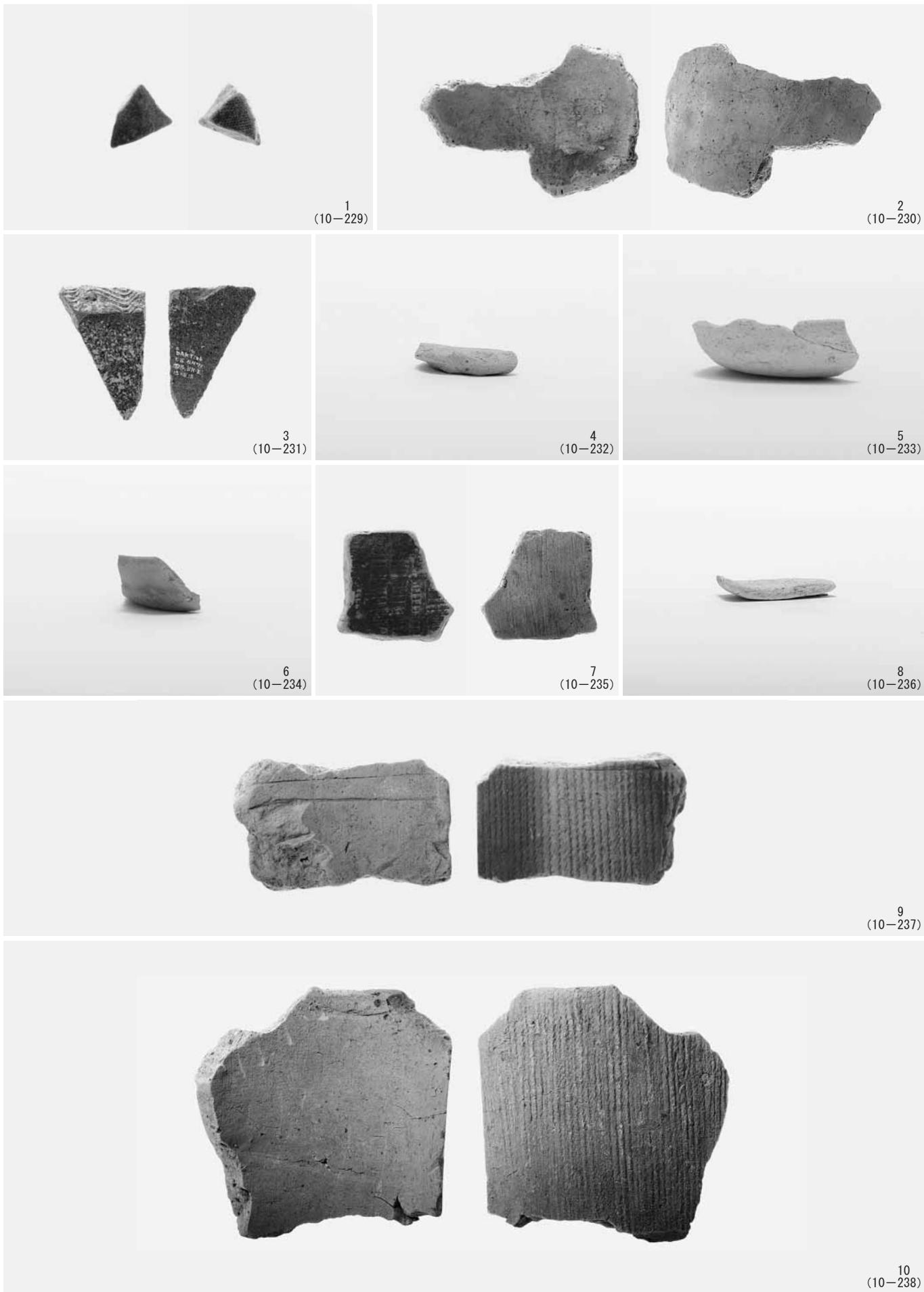
6
(10-227)



7
(10-228)

1～7 D区第II層 (すべてS=1/4)

第106次調査地D区出土遺物



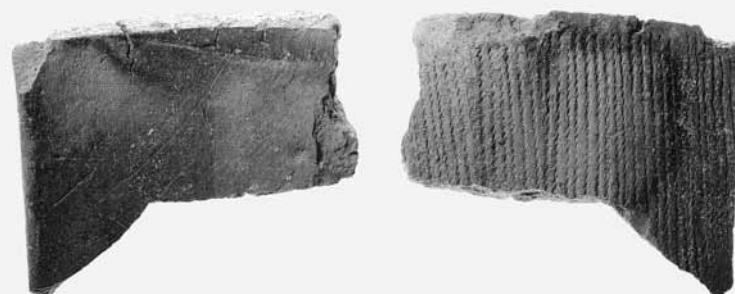
1 SA2367 2・3・9 E区第II層 4 E区第III-1-④層 5 E区第III-1-⑥層 6・10 E区第III-3-②層
7・8 第III-4層 (1・9・10はS=1/4、それ以外はS=2/5)

第106次調査地E区出土遺物

図版25



1
(10-239)



2
(10-240)



3
(10-241)



4
(10-242)



5
(10-243)



6
(10-244)

1～5 E区第III-3-②層 6 E区第III-4層 (すべて S = 1 / 4)

図版26

第106次調査地E区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	あきたじょうあと							
書名	秋田城跡							
副書名	秋田城跡調査事務所年報2015							
巻次	2015							
シリーズ名	秋田城跡調査事務所年報							
シリーズ番号								
編著者名	斎藤和敏、伊藤武士、神田和彦、松下秀博、今井忠男、西川治、千田恵吾、栗崎笑、柴田いずみ							
編集機関	秋田市教育委員会 秋田城跡調査事務所							
所在地	〒010-0907 秋田県秋田市寺内焼山9番6号 TEL:018-845-1837 FAX:018-845-1318							
発行年月日	2016年3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ一ド 市町村	北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査 原因	
あきたじょうあと 秋田城跡	あきたし てらうち 秋田市寺内	05201	39度 44分 20秒	140度 05分 00秒	第106次 20150511 ～ 20151013	535	保護管理	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
秋田城跡 第106次調査	城柵官衙 遺跡	奈良 ～平安	【A区】道路遺構2面、溝状遺構2箇所、材木塀跡2条、溝跡4条、土取り穴3基、土坑5基 【B区】道路遺構1面、土塁跡1基、材木塀跡4条、溝跡4条、竪穴住居跡1軒、土坑5基 【C区】溝跡1条、築地塀跡1基、土取り穴3基 【D区】掘立柱建物跡2棟、材木塀跡2条、柱列跡1列、築地塀跡1基、土坑8基 【E区】材木塀跡2条、築地塀跡1基	須恵器、土師器、赤褐色土器、瓦、中世陶器、陶磁器、弥生土器、石器、石製品	外郭西門周辺の城外道路、外郭区画施設の調査			
要約	<p>調査区はA～E区の5箇所を設定した。A区で外郭西門からの奈良期および平安期の城外大路を発見した。城外大路の道路幅は、奈良期約12m、平安期約9mであることを確認した。B区ではA区で発見された奈良期の城外大路の延長を発見した。C～D区では外郭西門北側から北東の外郭区画施設（築地塀跡・材木塀跡）を発見した。また、D区では櫓状建物と考えられる平安期の掘立柱建物跡2棟を発見した。これらの古代遺構から外郭西門周辺の秋田城の基本構造に関する重要な知見を得た。</p> <p>なお、A・B区では中世後期と考えられる材木塀跡・土塁跡が発見され、焼山地区北西部における中世の当該地における利用状況について新たな知見を得た。</p>							

秋田城跡調査事務所要項

I 組織規定

秋田市教育委員会行政組織規則 拠粹 (平成3年3月25日教委規則第1号)

第5条

4 文化振興室に所属する機関として秋田城跡調査事務所を設置する。

第8条

5 秋田城跡調査事務所を秋田市寺内焼山9番6号に設置し、その分掌する事務は、
おおむね次のとおりとする。

- (1) 史跡秋田城跡の発掘に関すること。
- (2) 史跡秋田城跡の出土品の調査および研究に関すること。
- (3) 史跡秋田城跡の整備に関すること。

II 発掘調査体制

1 調査体制

秋田市教育委員会

教 育 長 越 後 俊 彦
文化振興室長 工 藤 淳

調査機関

秋田城跡調査事務所

所 長	斎 藤 和 敏
副 参 事	伊 藤 武 士
主 査	三 浦 龍
主 査	神 田 和 彦
主 査	高 山 信 義
主 査	松 下 秀 博
技能技師	遠 藤 栄 子

2 調査指導機関

宮城県多賀城跡調査研究所

秋田城跡（秋田城跡調査事務所年報 2015）

印刷・発行 平成 28 年 3 月

編 集 秋田市教育委員会

秋田城跡調査事務所

〒011-0907 秋田市寺内焼山 9 番 6 号

TEL 018-845-1837 FAX 018-845-1318

印 刷 株式会社三戸印刷所

